わたしはどういう風にして獨逸語をやってきたか？

關口存男

私のドイツ語苦心談がどれだけ參考になるかは疑問ですが，マア一席やつて見ましよう。

まず身の上話から始めますが，私は皆さんのように正規に高等學校や大學を通つて來た人間ではなくて，中學二年でよして

學歷

（姫路中學ですが）それから大阪の地方幼年學校に入學，陸軍士官學校を卒業，見習士官と胸膜炎とに同時になつて，少尉に任官したら早速休職を仰せつけられ，その次は型の如く『お前はやめろ』と來た。成績はそう惡い方ではなかつたつもりですが，一ぺん胸膜炎なんてものをやつてしまうと，陸軍大學はどうせ體格でペケにきまつている，陸軍大學が駄目なら軍人をやつたつて仕樣がない……こう思つて，二十一歳で方向轉換をしたのです。

えゝと，一寸申しおくれましたが，私の年齡は今年五十……八だつたかな？ 九だつたかな？（どうも自分の年という奴は困るです，今年こそは斷然覺えてやろうと思つて年頭に斷然覺える事もあるんですが，翌年になるとモウ違つて來るので，しよつちゆう頭の中で混亂して今日に及んでいます。五十八というのも，ひよつとすると二三年前に覺えたやつかも知れません。家内に訊くとわかることもあるんですが）。

ドイツ語は，實はその幼年學校で學んだのです。幼年學校の事なんぞ知つてる人は大してなかろうが，幼年學校では英語という奴は敎えなかつた。それは，士官學校へ行けばどうせ普通の中學で英語をやつた連中がはいつて來るから，少數の幼年學校出身者にだけは英語以外をやらせておくというわけなんでしよう，とにかく地方幼年學校では，ドイツ語班とフランス語班

との二組になつていました(東京の中央幼年學校では，その他になおロシヤ語班というのがありました)。競技などやる時には，いつも此の獨佛兩班が對抗するのですが，どういうわけか知らんが，どの幼年學校の話を聞いても，優勝するのは必ず獨逸班ときまつていたようです。こういう事を言うと佛蘭西班の人達はむきになつて怒るが，事實だから仕方がない。また，妙な事には，ドイツ班へ這入つて來る男とフランス班へ這入つてくる男とは，顏の感じがちがうんですな。士官學校で各幼年學校の者が集つて來たのち，私は大阪から來た者以外に關しては何も知らず，誰が佛班で誰が獨班かということは，別に徽章をつけているわけでもないから，本當はわからない筈なのに，顏の感じだけで言いあてたことを記憶します。ちよいちよい間違うこともないではなかつたが，それでも十人について七八人まではピタリとあたりました。どういうんでしようかな？ ドイツ語班へはいつて來て der, des, dem, den とか gegangen とか何とかやつているうちに顏が段々 gegangen 式になつて來るのか，それとも，ゲーテのいわゆる親和力といつたような以心傳心的な相互吸引作用があつて，「おれはドイツ語をやろう」，「おれはフランス語にしよう」と決定する瞬間に，ある種の顏(從つて性格）の持主はどうしてもドイツ語乃至フランス語の方へ微妙に吸引されてしまうのでしようか？——これだけはいまだに不思議におもつています。

小生の顏はここに御紹介申しあげた通りですから（巻頭の写真を御覧下さい——編者)，ドイツ顏というのはどんな顏かということは，これによつてお察しをねがいます。若い時は顏中一杯無精ひげを生やしていましたが，終戰後はご時勢がニヤケて來たので，おれもニヤケなくちや不可んかなと思つて，殆んど毎日ひげを剃ることにしましたが，時間がかかつて弱ります。

どうしてドイツ語をえらんだか？ これはどうも，全然無意識

にやつたことで，理由なんぞ覺えていません。察するところ，英語が第一でその次が獨逸語，などという，極く世間並な評價に從つて，第一がないから第二にしたといつたような，ごく無定見な考えだつたのではないかと思います。それと，當時ドイツの陸軍は非常に有名だつたからでしよう。なにしろ十四歳の小僧のことだから，無理もない話です。

十四歳で氣がついたが，なるほど，此の點私は非常に條件がよかつたんですな。普通の人はみんな高等學校や大學へ行つてからドイツ語をはじめるのに，私はそれよりも數年前にはじめたのだから，これは何といつても一歩の長です。殊に十四五歳當時の數年という奴は，事語學に關する限り，非常に影響する所が大きい。語學と音樂だけは，とにかく早くはじめた者が得です。兎のように途中で盡腰さえしなければです。(私は二三度盡腰をしたことがあります，殊に二十三四歳頃，一時新劇に凝つて，一二年の間ドイツ語のドの字も開けて見たことのない時期がありました，まさかドイツ語で飯を食うことになるとは思わなかつたので……今の青山杉作君などといつしよに新劇の革新陣營をゴロゴロしていたのです。いまだつて新劇はやりますよ，本當！ 嘘と思うならやつて見せましようか？ その代り下手だぞ……)。

最初の苦心

さて，十四の時からはじめて，大阪地方幼年學校でどういう風にドイツ語をやつたかという話に移りますが，こいつがなかなか厄介です。しかも，此の最初の苦心をよくお話するということが一番大切ではないかと思います。というのは，これは現に當時わたしと一緒に同幼年學校にいた連中が，(最高は中將，多くは少將または大佐程度で終戰になつたと思いますが）まだおそらく三百人や四百人は生き殘つているだろうから，わたしも嘘は言えず，また謙遜して嘘を言う必要もないから，自信を以て斷言しますが，とにか

く地方幼年學校の三ケ年在學中に，斷然ドイツ語が出來だしたことは事實なんで，しかもそれが或る種の異狀な努力と熱中の賜であつたことは，當事の學友がすべて認めてくれるだけではない，むしろ所謂る「ひとつばなし」になつて今でも殘つているはずです。とにかく驚異の的だつたのです。自分からこんな事を言うのはおかしいが，嘘は大嫌いだから，笑われても構わないハツキリ威張つておきます，とにかく驚嘆されたものです。しかも——ここが面白いのですが——自分ながら奇蹟としか思えないのです。

努力と奇蹟，奇蹟と努力！これですな結局。若い時にやることが何か物になるとすれば，わたしは此處じやないかと思う。努力と奇蹟，奇蹟と努力！——努力が奇蹟を生む。そして奇蹟が努力を生むのです。（前者は普通の修身講話になつてしまうが，後者に注目していただきたい。自分でどう考えてみても，そんな努力ができた筈はないと思うのですが，何かの奇蹟で，とにかくやつたものらしい。）

十四歳のときに決心

どんな努力をしたかというと，一言にして言えば，つまり無謀きわまる事を企らんだのです。すなわち，ＡＢＣを敎わり，發音の概略を會得し，やがて出るとか出んとか出すとかいう例の夫婦喧嘩みたいなところが終つて，とにかく自分で辭書が引けるようになつた頃だつたと思います（何時頃だつたかはハツキリ記憶しません，あるいは一年生の始めの頃，あるいは半ばだつたかも知れません），語學以外は別に何一つむつかしい事もなし，ただドイツ語だけが全然新たな學科だつたものですから，『よし，おれはこいつを物にしてやる！』と或る日決心したわけなんです。この決心には何のわけもない，いわゆる斷言命令的・言目的・無茶苦茶的・駄々ツ兒の意地張り的・天降り的・その他いろんな的決心だつたので，しかも此の決心をすると同時に，何

だかドエライ者になつたような氣がして，同輩の顏を見渡しても，なんだか自分より二三級位下の連中みたいな氣がしたことをおぼえています。幼年學校では上級生が下級生をなぐりに來るのは毎日の行事でしたが，最初は，何の理由もないのにポカポカなぐられると，くやしくて，夜消燈ラツパが鳴つて床の中で一人きりになると，シクシク泣いたこともありましたが，此の『よし，おれはドイツ語をやつて見せる，おまえたちなんかどうだつて好いんだ！』という挑戰的決心をしてひねくれてしまつてからというものは，いくら殴られても口惜しくも何ともなくなりました。その代り，入學の當初は，しきりに父母がこいしくて，姫路ということを聞いただけでも，脫走して歸りたいほどセンチになつたものですが，いつたん此の決心をすると同時に，なんだか心が兩親を離れたというのか，孝心が薄らいだというのか，だいいち親許へ手紙を書かなくなり，夜眠る前にすら故鄕のことを考えなくなつてしまいました。當時上領という大尉の人が私たち十二期生の生徒監で，この人の人格は思いうかべただけでもなつかしくて涙が出るようですが，此の人も私にこういう轉期のあつたことは恐らく御存じあるまいと思います。しかし，ある時此の人に呼びつけられて，深夜十二時頃まで，おまえは近頃少しどうかしている，なにか惱みがあつたら今全部言つてしまえといつて，やさしく諄々とさとされたことがありますが，私は，しまいには泣き出してしまつたが，そんな決心をしたことだけは遂にいわなかつた。最も崇拜する人であつたにもかかわらず，どうしても言えなかつたのです。言えば理由を問われる。ところが，理由というのは，前述の通り，なにもないので，ただ駄々兒の意地張りで，しかも此の決心に居直つて世の中を見ると，どいつもこいつも自分より以下に見えるという，とにかく理窟では言えない自己救濟的決心だつたので，そいつを，自分の最も崇拜する上領大尉殿に詳しくジロ

ジロ見たり批評されたりするということが堪えられなかつたのです。——けれども同大尉にはまことにすまなかつたので，二三時間一人きりで部屋の隅に立たされた後，一切の返事に代えて私は泣き出してしまいました。大尉は，口だけはきびしく「軍人が泣いたりしちやいかん！」と言いましたが，顔は實にやさしい顔をして，小さな聲で，「よし，もう好いから，かえつて寢ろ」と言いました。私は外へ出てから，思い切つて言つてしまおうかと考えましたが，しかし，そうすると，「同じ決心をするなら，ドイツ語なんて變なものに決心しないで，立派な軍人になる決心をしたらどうだ」と言われそうな氣がしたので，そう言われると，軍人よりドイツ語の方がいいという理由はどうしても考えつかなかつたものですから，惡いな，とは思つたが，そのまま寢てしまいました。(その後同大尉から私の父にあてて，關口は最近少し性質が變つて，陰險になる徴候があるから注意されたいという手紙が來たそうです。それまでは淡白な兒だつたと見えます。)

十四五歳の少年でも，性格がすつかり變るほどの決心をすることがある，ということがこれでもわかりましよう。だから，少年の性質が變つたり，淡白でなくなつたりしても，それをすぐ何か惡い事のように思うと間ちがいます。少年には，多情多感な，すこぶる危險な時代があるのです。私のは，生れてはじめて兩親の膝下をはなれ，しかも嚴しい幼年學校へはいり，上級生には毎日ボカボカ毆られ，箸の上げおろしにまで一々文句を言われたので，入學當初の數ケ月は，まるで世界が變つたようで，しかもまだ親しくつき合つて打ちとけ合う友人といつては一人もなし，そのままで行つたら，あるいは飛んでもない不良になるか，あるいは親許へ逃げてかえつて世間の物笑いになつていたかも知れないのです。此の多情多感の危機を自ら救おうとして嚙りついたのが偶然ドイツ語だつたわけです。たとえ

ば，お灸をすえるとき，感じのにぶい人は平氣で我慢できるでしようが，感じの鋭い人は，何か，下つ腹に力を入れるとか，誰かの腕をギユツと握るとか，とにかく何かにしつかりつかまつて渾身の力を肇に集中しないと，熱さに對抗できないでしよう。それと同じことです。私も，まるで横つ腹の一番くすぐつたいところにお灸をすえられるような多情多感な少年時代の危機に對抗するために，何かに嚙りつこうとしたのです。するとドイツ語が一番手近かにあつたきりの話です。

若い人たちは此の話はわかつてくれるでしような？

ドイツ語を物にしてやろうと決心した前後の事情はだいたいこれくらいにしておいて，さてそのつぎには，その實行の模樣を出來るだけ思い出して書いて見ます。これは大いにご參考になるだろうと思います。ただし，その實行方法が誰に話しても恥ずかしくない模範的なものだつたから參考になるというのではなくて，模範的でないから參考になると思うのです。あんまり頭の好い人に讀まれるとチヨツト困るんだが，どうせこんなくだらん記事を讀む人にはそう頭の好い人もおるまいから，思い切つて正直に書きます。模範的でない人には模範的でない事の方が模範になるでしよう。

最初何にくらいついたか？

とにかくですな……とにかく決心すると同時に日曜日に（大阪の幼年學校に居たのですから）心齋橋通の丸善支店へ出かけて澤山ならんでいる洋書の前に立つたわけです。『とにかく本を買おう！』という氣持でいつぱいでした。ところが悲しいことには何を買つていいかわかりません。うつかり醫學書なんか買つてはつまらん……(堂々たる本はどうもみんな醫學書らしいのです）と思つて，あつちこつち見廻つているうちに，財布との關係もあるので，とうとう例の Reclam 叢書ばかりつまつている書棚の前に立つて眺めはじめました。星一つが五錢だつたと

記憶しますが，あるいはもう十錢にもなつていたかも知れません。とにかく星一つがいくらと書いて貼つてあつたから，安心して標題をながめはじめました。ただ，店員が見ているので，辭書を出して引くことができないのには弱りました。

とどのつまり買つたのは，非常にぶ厚い，星が七つも八つもついている，ドストエフスキイの『罪と罰』の獨譯 (Schuld und Sühne) です。私にとつては實になつかしい本です。なんと思つてこんな本を買つたかというと，ちよつと中をあけて見ると，一頁の中に ist とか in とか ich とかいう，わたしのすでに充分知つている單語が，たてつづけに五つ六つならんでいるところが眼についたからです。それと，とにかくウントぶの厚い本を買つてそれをみんな讀んでしまうんだ！という，少年らしい，實に誇大な感情があつたからです。星の一ばん多い本が偶然此の Schuld und Sühne だつたのです。

この點は，わがことながら非常に面白い。何の定見もなく，ただモウ尨大だつたから買つたという事實……此の事實が凡てを語つているように思われます。いつたい若い者のやらかす無意味なことほど意味深いものはありません。若い者が何かおかしなことをしたら，敎育家はその點を最も尊重すべきだということがわかります。

さて，それをどういう風に讀んだかというと，それが實に思い切つた無茶苦茶な讀み方なんです。學校ではまだやつと，ご存じの方があるかも知れませんが，皆方々で使つていた German Book という Hier ist ein Mann. ではじまつている讀本の最初の半分ぐらいしかやつていない時に，しかも世の中の事を大して知らない十四歲の少年が，突然ドイツ語の小說をよみ出したのですから，どんな風によんだか大體察しがつくでしよう。というよりはむしろ「どんな風によめたか」ということが今でも私自身には疑問です。とにかく，最初の一行からして全然意味

がわからなかつたのじやないかと思います。單に，ところどころに ist とか nicht とか Haus とか schön とかいう，わかる單語がないこともないので，そんなのが出て來ると大體その邊の意味がボンヤリわかつたような「氣」がしたのじやないかと思います。頭の好い少年なら，「こりやあ全然わからん！むつかしい本に噛りついていては時間の無駄だ！」というハツキリした認識が起るでしようから，好い加減に見切りをつけて，よしたかも知れません。ところが私はそういう實際的なことにかけては實に頭がわるかつた。それに，大人に相談したり，先生に智慧を借りたりすることが大きらいだつた。(初めての家に訪れるときなど，人に道をきくのなども，輕くきけ出したのは四十歲近くになつてからだと思います。今でも問題によると，どうも人の智慧を借りるのがきらいです。どんなに損をしたつて，損の方はいつこう痛く思わない，ただとにかく自分の思つたように下手なことをしないと生きているような氣がしないという困つた癖があります。つまり「頑固な病人」というタイプですな。學問上の事も然り。學界で八十年も前に發見してしまつていることを最近自分で發見して感心しているようなことが澤山あります。人の忠告は，うがつた忠告であればあるほどきらいです……) ドイツ語の先生とは毎日顏を合せているのだから，相談すればきつと好い本をおしえてくれたでしように。

ちつとも分らないままで五頁や六頁は讀む人もあるかも知れませんが，私のように百頁も二百頁も(しかも丹念に)讀んだという人はあんまりいないでしよう。私はそれをやつたのです！頭の好い人ならイヤになるところだが，わたしはいつこうイヤにならなかつたのです。——意味がわからないままで讀むといつても，決して上すべりして字の上を滑走したというのではありません。とにかく「わかろう，わかろう」と思つて，片つぱしから辭書を引いて，辭書に書いてあつた意味を何でもかでもそ

の語の妙な響きに結びつけて，そうして一行か二行を穴の開くほど睨みつけて，十ぺんも二十ぺんも三十ぺんも讀みなおして，そして，ああじやないか，こうじやないかと，とにかく十四歳の少年の智慧に及ぶ最後の限界まで考えつめたのです。

とにかく……どうも「とにかく」が多過ぎるが……とにかく人に言わせないで自分で最後まで考えることは子供の時から好きでした。女學校へ行つている姉がよく色んな謎をおぼえて來て私に課しましたが，姉のは一寸癖がわるくて，人に謎をかけておきながら，人が考えている最中に，からかいながら，答を露骨に暗示するような事をはたから言うので，よく怒つて喧嘩したことをおぼえています。おしまいには，姉が謎を言うと，私は直ぐ裏へ行つて，裏戸をあけて，耳に固く指をつつこんで考えたものです。

つまりそれとおんなじ氣持で，わからぬ本を一年半か二年ばかり眺めていたのです。途中，同縣人の下宿で，誰だつたか此の罪と罰との飜譯が出るとか何とか言つたのを偶然きいたことがありましたが，その時の不愉快な氣持は今でも一寸おぼえています。もちろん，そんな反譯などを參考にする氣持はありませんが，とにかく，自分がこうして大事にして探つている一歩一歩の秘密が，飜譯家だか何だか知らないが，抑々世の中の誰かに，ちやんと日本語に直せるほどハツキリわかつてしまつているのだ……という感じは甚だ不愉快なものでした。そういう偉い人に會つたとしたら，私はとても同席していることはできなかつたにちがいありません。

それから，とにかく，わけもわからないくせに，その本がとにかく非常に好きになりました。バラバラに破れてしまつてからも，新たな表紙をつける氣になりませんでした。とにかくその茶褐色の表紙が自分の命の一部分になつてしまつたので，それが白になつたり綠になつたりすることは考えられなかつたので

す。(これを以て見ると，わたしのドイツ語勉强の發心は，精神的，內容的なものではなくて，全然外形的，動物的なものだつたらしい。何が書いてあるかわからない本を，單に表紙の色に對する愛着から，一年半も二年も，毎日毎日とり出して，こんなに好きな表紙の本だから何とかして解りたいと思つて一心不亂ににらめつくらしたのですからね……こういう無茶苦茶な馬鹿な氣持は，人にわかるかどうか，それがちよつと私にはわからないが……しかしこんなことは誰にもあるのじやないでしようか？ 人間というものは，口ではみな相當立派な筋路立つたことを言うけれども，やつている事はみんな大體此の程度の變なことばかりなのじやないでしようか?)

要するに，ちよつと千頁近くもある本を，わけもわからぬままに，二年ばかりかかつて，數百頁よみました。するとどうでしよう，おしまい頃には，なんだか……わかり出したのです！

「わかり出した」というと嘘になるかも知れません。「なんだか」わかり出したような氣がしだしたのです。此の「なんだか」も實をいうと只今のわたしにはよく思い出せない。しかし，とにかく，こう言うことはできます，すなわち，第一には，小說の中の筋がわかり出したのです。主人公のラスコルニコフはどうも此の女が好きになつたのじやないかという氣がしはじめると，はたしてその通りになつたりなどするのです。そんなことをしたつて無駄じやないかと思つて讀んでいると，はたして作者が「しかしそれは無駄であつた」と言つたりするのです。これは正に私に話の筋がわかり出した證據です。

ところが妙なことには，話の筋は大體わかつてきたのに，文章の關係や，その他文字のことはホトンド霧の日に隣の家を見るように，朦朧と霞んで，なに一つハツキリわからない。たとえば，ズラツト一行の文章がならんでいると，わたしはいつもの癖で，すぐそれを發音してペラペラと讀んで，幾度もくりか

えして，おしまい頃には，二行か三行までの文章なら，二三度よむと，すぐ眼をつぶつてそれを暗記で言えたものです。ところが，その中には，ほんの飛び石のように，あちこちに知つた單語があり，ちよいちよい知つた句があるくらいのもので，全體の構造などはわかりもせず，飜譯して見ろと言われたつて出來ません……が，それにも拘らず話の筋はよくわかつて來たのです！

文章の意味がわからずに話の筋がわかるというのは，實におかしな話ですが，實際そうだつたんだから，決して嘘ではありません。とにかく，わけのわからぬ本を，毎日毎日にらんで，それを二年ばかりつづけたあとの狀態というものはそういうものだと見えます。

そうだ，書いているうちに重要な事實を思い出しました。當時の私は，別にドイツ人の發音をきいたわけではなかつたが，いつも「若林」という先生の口調が頭にあつたので，たとえば床に入つて眠りこむ時には，意味のわからないドイツ語の長い長い文章が（二行三行ぐらいの）しきりに頭の中できこえるのです。まるで蓄音器をかけるように！——こんなことがありました。ある夜床の中で，例によつて，まるで近所のうるさいラウドスピーカーのように耳朶を搏つ，そうしたドイツ語の句や文章になやまされながら，何かたわいもない事を考えながら眠り込もうとしていると，どうも一つだけどうしても鳴りをしずめない變な文章があるのです。もうウルサイ，はやく寢よう，とおもつて右に寢がえり打つたり左に向いたりしますが，またしてもまたしても同じ文章を頭の中でくりかえして，自分ながら手がつけられません。おしまいには，つづけるところまでつづけてやれとおもつて，頭を冴えさせて，その次を次をと頭の中で綴つて見ると，おどろくなかれ，ほとんどレクラム版の一頁近くもあろうかと思うほどの文章ができあがる，しかも，フト，

それがどの頁にあつたかも思い出したので，そつと床を出て，本を出して，便所へ行つて，暗い電球に本を近づけて，その場所を探したのです。すると，すぐ見つかりました。しかも，讀んでみると，一字二字の差はあつたが，ほとんど私が知らずに暗記していたままでした。しかもそれが，ほとんど一頁近い長さなのです（もつとも中の筋がおぼえそうなところでしたが）。

これは，私が，わからないままにも，同じ箇所を何度も何度も口に唱えながら，おそらくは一晩の中に一頁ほどの所を何十度とくりかえして讀んだ日がその二三日前にあつたことを證します。暗記しようと思つて暗記したのではなくて，とにかく小野道風の蛙のように，飛びついてはおつこち，飛びついてはおつこち，ほとんど狂じみた單調な努力を，子供の一心で，一年半あるいは二年ばかりくりかえしているうちに，あの大きな本の中のあらゆる半わかり，或いは三分の一わかりの文句を，ゴツチヤにではあるが，とにかく潜在意識の中に不知不識の間に叩きこんでしまつたわけです。

最初おぼえたドイツ語はどんな風に頭の中へつめこまれたか？

そういう調子だつたものですから，私の頭の中には，なんだかよく意味のわからない，あるいは半わかりのドイツ語の短文や斷句がゴシヤゴシヤと詰めこまれてしまつたわけです。意味がよくわからなくても，いつこう苦にならない。というよりは，むしろ，いろんな文句がペラペラツと出てくるのだから，それでつまり解つているような氣がしていたものと見えます。たとえば elf (11 のこと，英の eleven) という語におめにかかるたびに，何の理由もなく Es schlug gerade elf（ちようど十一時を打つた）という文句が頭の中に反響します。ところが gerade の意味はよくわかつていないのです。そんなのは，そういつてもまだよくま

とまつた短文ですが，大抵はまとまらない意味のものが多い。たとえば，よくおぼえている例で言うと，整列して訓示を聞いている最中に，何か「息子」ということばが耳にきこえたのです。すると，息子というドイツ語は Sohn だということはよく知つていたのですが，Sohn！と考えると同時に，どういうわけだか die die liebe Base meinem Sohne hat angedeihen lassen という相當の長句が蓄音器をかけたようにペラペラと思い泛びました。整列している最中のことですから，暇なので，die die つていつたい何だろうかと思つたり，angedeihen というのは，動詞にはちがいないが，どうすることなんだろうと思つたりしましたが，殊に Base［バーゼ］という單語が，ひびきが何となく怪奇な感じをおこさせるので，訓示がすんだら直ぐ辭書を引いてやろうと思つていると，訓示がひどく長くなつて，解散すると同時にすぐ體操服にきかえてまた整列となり，それから三四時間ばかり次へ次へ何かあつて，ついに夕食後にやつと辭書を引きました。すると Base というのが二つあつて，一つは「盥基」，一つは「親戚の女」とか何とかいうのですが，どちらだかわからない。その後十年ばかりは，とにかく「盥基」（というのがそもそも何だかわかりませんでしたが）とか「親戚の女」とかいうとすぐに此の die die liebe Base meinem Sohne hat angedeihen lassen という句を考える。十年後に，ちつと氣にかかつて，angedeihen というのを辭書でしらべてみたが，それでもまだ何のことやら要領を得ず，ついに三十歳近くになつて，法政大學でドイツ語の先生をしだした時，下しらべをしていると，また此の angedeihen が出てきて，しかもやはり angedeihen lassen という結合ででてきた。けれどもその時には辭書も何も引かずに，このむつかしい語がぴたつとわかり，しかも意識的に自分のものになつたことをおぼえています。

以上はほんの一例ですが，わたしの頭の中につまつているド

イツ語というやつには，多少の差こそあれ，すべてこれに似た妙な曰く因緣がある。しかも，單語としておぼえているものよりは，むしろ文章や句でおぼえているものの方が多い，つまり，わたしの頭というガラクタ箱にいつぱいつまつているのは，小石ではなくて，繩の切れつぱしなのです。ちよつと見えている端つこを引つぱると，ぞろぞろと長い繩が出てくる。しかもその繩があつちこつちもつれていて，一本だけ引つぱり出すわけにゆかない。一本引つぱれば，それにもつれて何の關係もない別な繩が二本も三本も出てくる……

だから（これはマア十五六年も二十年も後の話になりますが）法政大學の豫科や獨文科で，最初元氣の好い頃の私に教わつた人たちはおそらく記憶があるでしようが，わたしは何かというとすぐにチヨークをとつて黒板にペラペラと長い文例を書きました。老熟して來ると，ごく簡潔な，キチンと意味のまとまつた，ほんの三四語か五六語でまとまつた文例を書いたが，未熟な若い當時は，とにかく思い泛かんだままのゾロゾロした長い繩をそのままならべて見せたものです。講義をきかされる學生たちこそいい迷惑です。けれども，そのために「あの先生はものすごい」という評判になつて，たちまちのうちにドイツ語の天才だということになつてしまつた。學生にとつてはドイツ語の天災だつたわけです。

けれども，こうしたわたしのペラペラ的メトーデは，それから十年二十年後には，おどろくべき威力を發揮したことは事實です。三十歳になる前頃，演劇の方では到底めしが食えないことがわかり，ついにドイツ語でめしを食うことに決心した或る日，わたしは此の「句と文章」を中心とした行き方の一大ドイツ語論を書くことを思

文例による獨乙語文法を思い立つて文例整理ノートを設けた時のこと。

い立ち，それからのちは，わたしがその時まで無意識に機械的にやつていた勉強法を，いよいよ合理化してノートにとることにしました。只今わたしの座右にある行李に一ぱいほどの分量の，百冊近くもあるノートがそれです。どんなノートだか，それは商賣上の秘密でちよつと言われないが，大抵の人はチヨツト開けてみただけでもウワーと言つてびつくりしてしまう。(此のノートは終戰の直前，長野縣の妻籠へ疎開する際，まるで探偵小說みたいな隱れん坊をして私を心配させました。私たちは，荷物をすつかり造つて，宇田川という近所の運送屋さんに萬事をたのんで，身體だけ四月前に妻籠へ行つたのです。ところが，何時まで待つても荷が來ない。どうしたんだろうと思つていると，そのうちに到頭留守宅にいた長男の存哉から「イエヤケタ，ミヒトツカイシヤヘユク」という電報がきた。いつたい此の存哉という奴は氣が利かない點で有名なんですが，荷が出たら出たと付け加えれば安心するのに，荷のことはなんにも言わずに，單に家燒けたと言つてきたから，こつちは勿論荷が出ないうちに家といつしよに燒けたものと思つて，すつかり覺悟してしまつた。殆んど半生もかかつて書きためたノートが燒けてしまつたのですから，これはモウ學者としての資格はゼロになつた，半生かかつて計畫して來たドイツ語の「句と文とから行く文法」もモウ灰になつてしまつた，と思いました。ところが，それから十日か二十日ばかりたつと，ヒヨツコリと一荷車分の荷物がついたのです！しかも，あとで聞くと，荷が家を出たのは四月十二日，即ち家が燒けた前の日だというじやありませんか。一日の差で，いや，詳しく言うと十時間ぐらいの差で荷が助かつたわけです。——ところが話はまだそれだけではないので，ノートの運命はもつと際どいことになつていたのです。ノートは，三箇の木箱にはいつていたのですが，荷をほどきながら檢べて見ると，その木箱がどうしても二箇だけしか來ていないことを

發見しました。なまじつか喜んだ後のことなので，これにはガツカリしました。わたしに取つて見れば，衣類や勝手道具がいくら澤山助かつたつて一向ありがたくはない，肝腎かなめのノートが，三分の二になつてしまつたのでは，だいいち用をなさない。全然來ないのと大差ないわけです。私はまたガツカリしました。——ところが，それから一月ばかりたつと，また追加の荷がついて，ソレというので駈けつけて見ると，來た來た，すつかりあきらめて居た一つの木箱が，何食わぬ顏をして入口になげ出されてころがつている！——運送屋さんから來た手紙によると，十二日に目白驛へ荷を運んだところが，荷が荷車に積みきれなくて，五六箇殘つたのだそうです。ところが，神佑と言いますか，その荷物の殘りを，もし私の家へ運び戻していたら，家と一緒に燒けていたのですが，運送屋さんが，警報が鳴つたものだから，荷を自分の店の前に投げ出したまま警防團の詰所か何かへ出かけてしまい，そのために助かつたのです。なるほど，こんど東京へかえつて來て見ると，運送屋さんの家の一角だけが燒けずに島のようになつて殘つている！

つまらんおしやべりに頁を空費しましたが，とにかくそうした劇的運命を閲して，そのノートはまだ無事に私の座右にあります。それは實に混沌たる鬱蒼たる，ジヤングルのごときノートです。三十年近くの間，毎日毎日，丹念に書きためた，但し私以外の人には恐らく利用のできない一種異樣なノートです。たとえば前置詞 in だけのために，相當の厚さの一冊があつて，それが數多の項目にわかれていて，どこを見てもタイプの細かい字が一杯打ちこんであつて，それに，赤や青や黑や綠の，いろんな印がついたり，注意書きが書きこまれたりしている。だいいち，開けるのにも，相當用心して開けないと，風の吹く時に開けようものなら，整理に十日や二十日はかかるでしよう。つまり，ノートというやつは，わたし自身の頭よりはずつと微

妙に細かく出來ているので，ノートによつて頭の整理をすることはできますが（またその爲めのノートでもあるわけですが），頭でノートを整理するなんてことは到底できません。火事も困るが，風も相當おそろしいのです。

流　讀

また脱線しましたが，これでいよいよ私の初歩時代の話を打ち切るために，「ハハア，おれにはドイツ語が讀める」という最初の自信を得た瞬間のことを述べておきましよう。これはハツキリと覺えています。

學校で教えられるドイツ語を全然度外視し，初級中級をカツ飛ばしていきなり千頁近くもある原書にくらいつき，まるで猛獸に卷きついて食うか食われるかの死鬪を演ずる熱帶の大蛇のごとき鼻息で，執拗な，單調な努力を，およそ一年半ないし二年もつづけたでしようか。（生活環境に對して非常に敏感で，軍人の學校へ遣入つたことを忽ち後悔した私は，此の無謀無策にして單調且つ執拗なる內面的死鬪によつて當面の焦慮から救われたのでした）あの尨大な書物の三分の二ばかり，わからぬままによんだのち，二年生から三年生になる當時だつたと思いますが，なんだかコウ，ところどころ，イヤにはつきりよくわかる箇所が頻々として出てくるのに氣がつきはじめました。時とすると，半頁も一頁も，スラスラと讀めて，よく意味がわかるのです！

此の時の妙なうれしい氣持は非常にハツキリ記憶しています。おかしな話だが，語學というものは意味がわかつて讀まなければいけないものだということに，生れてはじめて氣がついたのです。というよりはむしろ，まるでコロンブスが亞米利加を發見したように，「横文字で書いたものにも，やはり一語一句ハツキリした意味があるのだ」ということを發見して，まるで一大發見をしたような氣持がしたのです。

最初の自信

そして——これもハツキリ記憶していますが——「そうか！では此の本の中に書いて

あることには，いま解つたような意味の，ハツキリした一言一句の意味があるんだな……」と思いながら，その茶褐色のレクラム本を手にとつて，つくづくと眺めると，なんだか，その本がそれまでとは全然ちがつた本のような感じがしました。それまではただ妙に好きだつたにすぎませんが，その瞬間からは或種の畏敬の念を以て眺めはじめたのです。

そして，「今までの所は，そんなに一言一句に大したハツキリした意味があると思わずによんできたが，では，初めつからそういう風にハツキリ意味があつたのかしら……」とおもいながら，試みにチヨツト一番最初の頁をあけて，はじめの數行を讀んでみたのです。するとどうでしよう！わかるのわからないの，一度スラリと讀みおろしたきりでピタリとわかるではありませんか！わたしは，まるで狂人のようになつて夢中になつて最初の十頁か二十頁ばかりを一氣呵成によみ流しました。わかるわかる！おもしろいようにわかる！あつちにもこつちにも，既に充分暗記して頭にこびれついている句があつて，しかも，忘れたものも忘れないものも，みな一樣にハツキリとわかります！まるで近眼に氣がつかずにいた人が，急によく度の合つた眼鏡をかけたようです！

それからのち一ケ月か二ケ月ほどかかつて，それまでの二年間に死鬪しながら取つ組んできたその本を，また讀みなおしました。この時のドイツ語の進歩といつたら，物すごいものでした。また，この時に得た自信は大したものでした。そうして，三年生になつてからは，サアこんどは買つた買つた，レクラム版の小說や戲曲をウンと買つて，一年間に相當よみましたが，中にはちよいちよいむつかしくて筋も何もわからぬものもあつたが，大部分は，ちよいちよい辭書を引くきりで，マア大體中に書いてあることはスラスラとわかつた。一文のうちに二語や三語知らぬ單語が出てきても，大體わかると，そのまま次をよ

んで行くという「流讀」の癖がついたのも，この，地方幼年學校三年のときです。教室で讀む教科書なんてものはモウ馬鹿々々しくて仕様がなく，全然先生のいうことをきかないで，退屈しのぎに辭書の隨意の一頁をあけて新知識を漁つていたことを記憶します。

前回までにおいて，わたしの甚だ我武者羅な，最初の二三年の勉强法を述べおわりましたから，今度は，それに就て，その後わたしがツクヅクと考えたことを一括してお話して見ようとおもいます。

まず，語學の勉强法を云々するときによく問題になる「精讀か濫讀か」という見地から，私が只今のべたような無茶苦茶な勉强法を回顧してみましよう。精讀か濫讀か，という見地から考えてみると，私のは，どつちに屬するのだかチヨツトわかりません。亂暴な粗雜な讀み方だつたという點では濫讀のようでもあるし，一向はかどらなくて，片つぱしから辭書を引きながら，一日に大して進まなかつたという點では精讀のようでもあります。

ところが，例の尨大な小說をよみ了つて，多少の自信ができて，それから次に色々なムツカシイ書物を次から次へとよんで行つた「第二期」においては，私は完全に「濫讀」の方の行き方を採用しました。手あたり次第に讀み，半消化のままに通過し，迅速に片づけ，次から次へと漁つた……要するに典型的な濫讀です。

精讀と流讀

そこで，これは恐らくどなたも關心のおありになることだと思いますから，此の精讀か濫讀かという有名な問題について，私自身の癖と關係した所信を述べておきます。(所信というものは必ず個性と關係しているもので，私がこれから申し上げることも，すべて，私と同じようなタイプの人にのみ通用する眞理だと思つて下さい。私

は，Nietzsche の用語を借りて言えば，いわゆる dionysisch 型の方に屬するように思われます。)

語學の勉强には，精讀的な行き方と，私のような濫讀的な行き方とがあつて，その二者には各々向き不向きということもあり，また一長一短があつて，よく議論の對象になるのですが，わたしは，どちらかというと濫讀の方に味方したくなります。それは，いままでに述べた若い時の經驗があるからです。(ただし，若い人を眼中においた場合のはなしと思つてください。相當年を取つたのちとなると，これはまた少し話がちがつてきます。その事はまたずつと先へ行つてからのべることにしましよう。相當年をとつて，殊に飜譯でもしようかという人が，そうした濫讀「のみ」によつて生じた語學力で中途半端に好い氣になつて，わかつたようなつもりで仕事をすると飛んだことになるので，これは世間に一番多い例で，世を毒する事これより甚だしきはなしと言いたいのですが，これからの話は，そんな上層のはなしではなく，單に語學の力をつける最初の時期の話なのですから，勘ちがいをしないで頂きたいと思います。)

濫讀というと言葉がわるいから「流讀」とでも申しましようか。Statarische Lektüre (精讀，熟讀) に對する Kursorische Lektüre (走讀，流讀，通讀) です (英語でも *cursory reading* ということを言います)。こいつが出來るようにならないと語學は進步しません。また，相當はじめの頃から，思いきつてこいつをやらないと無意識な底力というものがいつまでたつても生じないのです。スラスラと讀み流すなどということは，それは相當語學力がついてから後のことだろうと思うと大きな間違いで，それはむしろ逆で，それをやらないと「相當の語學力」なるものがそもそも生じてこないのです。「わかるとスラスラ讀めるようになる」のではない「スラスラ讀むとわかるようになる」のです。

もちろん，最初から此の流讀という奴をやるには，すでに物心のついた，頭の冴えた，常識のある人には，相當の覺悟が要ります。私は，いきなり軍人の學校へたたき込まれて頭が混亂していたために，ほとんど正當防衛をするような絶望的な氣持で喰らいついたために，思い切つてそんな非常識なことをすることができたのですが，正常な自由な環境の下に勉强していられる青年諸君としては，意味もなにもわからずに，ただ時々，一頁に一二行半わかりのする所が出てくるのを樂しみに千頁もある尨大な本を讀んで見ろと言つたつて，或いは馬鹿々々しくて一週間と讀んでいられないかも知れません。それよりは何かよく意味のわかるものを讀んでみたいという欲望が當然起つてくるでしよう。進歩しているのやら進歩していないのやら全然見當のつかない無駄なことを一二年も一心不亂にやれと言つたつて……それはチヨツト出來ますまい。けれども——けれどもです！何等かの意味に於て單調な，執拗な，頭のわるい，非常識な，盲めつぽうな「糞勉强」をしなければ何だつて物にならないのですから，語學だとてやはりその通りで，さてその糞勉强をどういう風に持つてゆくかといえば，それは此の一見無茶苦茶なような「わからぬままに讀んでゆく流讀法」というのが，後になつて見ると一番近路ではないかと思うのです。ただし既に言つた通り，相當頭の發達した人は，此の流讀というやつを徹底的にやり遂げんがためには，相當覺悟してかからなければなりません。それはどんな覺悟かというと，まず第一には，少々わからなくても，そんな事はあまり氣にしないことです。第二には，わからない單語を一つ一つ辭書で引くのもよろしいが，そのために一向進まなくなつては流讀の意味をなしませんから，一語一語の意味を知ろうとする努力はマア適當にしておいて，わからない所があつたらわからないままにしておいて先を讀んで行くことです。ただし，ある一つの文章がよく意味がわかつ

て，しかもその中に一語一句だけ知らないものがあつて，それが非常に氣になる……といつたような事がよくありますが，そんな時には，チヨツトゆつくりかまえて，辭書を引いて詳しく考えてみることです。そんな時に檢べた單語は非常によく頭に入り，あとで非常に爲になります。これは單調な流讀の砂漠の中の綠地のごときもので，そんなことばつかりやつていてはそれがまた單調になつて効果が少なくなりますが，たまにやるからよく効くのです。

第三には——これが最も重要！——色んなツマラナイ反省を敢然として斥け，完全に馬鹿になりきることです。頭の好い人にはこれがなかなか出來ない。頭の好い人にかぎつて成功を焦る，辛抱というものがない，いろいろともつともな事を考える，いろいろと自分のやつていることを自分で批評する。——これがいけないのです。「こんなに大して意味もわからずにドンドン讀んでいるが，これは結局單に上すべりしているにすぎないのではあるまいか？」とか「自分では一向進歩しているようにも思えないが，これでは何の樂しみもないではないか……」とか，「もつと何か適當な本さえあれば，もつとよく意味もわかり，もつと進歩するのではなかろうか？」とか，その他種々さまざまな反省が生ずるでしようが，それは流讀の際には厳禁です。そんなに頭の好いことを考えるなら，ついでにモウ一つ頭をよくして，「方法に良し惡しはない，良い方法を不徹底にやるよりは，惡い方法を徹底してやる方が，結局最後の意味においてはそれが好い方法なのだ」という風に考えるべきです。

要するに，流讀は，或いはあまり好い方法ではないかも知れませんが，時間と精力の浪費を意としない元氣旺盛な若い人々は，やろうと思えば最もわけなくやれる方法なんですから，その意味においては或いは好い方法と言つても好いのではないかと思います。

一字一句の意味をしらべ，よくわかつてからでないと先へは進まぬという精讀主義の方は，わたしはこの方がむしろ實行しにくいと思います。この方はよつぽど意志堅固な人でないと最後まで徹底的にはやれないでしよう。それに比べると，同じ勉強にしても，流讀の方はずつと事が簡單です。阿呆にでもできます。(かしこい人には，今言つたように，ちよつと困難があります)。

精讀というやつをやる時には主として「頭」と「理智」と「意識」が働きます。それに反して流讀というやつをやる時には「感じ」と「本能」と「無意識」が働くのです。わたしは，語學というやつは，頭の問題ではなくて，やはり感じの方が主じやないかと思います。頭でおぼえたことは割合役に立たない，感じと本能でおぼえたことは確かです。だいいち頭では一時にたくさんのことは覺えられない，それに反して本能と感じというやつは，ごく漠然とではあるが，短時間のうちに，信ぜられないほど多くの事をおぼえます。暗記なんて問題も，けつきよくは感じです。それが證據に，たとえば或る一つの單語をとつて，それを理屈でおぼえようとしたつて，思つたようには行きません。覺えられたか覺えられなかつたかということは，けつきよく長い月日のたつたのち判明するわけですが，その時によく檢べてみると，「これは必要だから何とかして覺えよう……」などと思つて意識的に努力しておぼえた單語なんてものは割合おぼえていなくて，最初から何となく覺えられそうな「感じ」のした單語をやはりいちばん確實におぼえています。これを以てみても，暗記なんてものはすべて感じが主であるということがわかるでしよう。

流讀しているというと，意識的に詳しく考えるなどという暇がありません。そのために，頭腦の方が遮斷されて，主として潜在意識の方がはたらき出すものと見えます。精讀してわかる

と，意識活動が旺盛であるために，一見非常に進歩しているような氣がして，頭の好い人には，氣持に滿足を與えます。その代り，冴えた意識活動のために，無意識活動の方が阻止されて，感じというものの發達が，むしろ邪魔される傾向すらあります。

私は，最初の二年間ばかりは，小野道風の蛙のような努力もしましたが，大體から言つてやはり流讀をやつたわけです。そして，わかり出して，多少スラスラ讀めるようになると，こんどは流讀ばかりやりました。つまり十六の年（地方幼年の三年目）から二十六七歳の頃まで，約十年間は，ほんとうの流讀あるいは濫讀でした。精讀なんてことは，ほんのたまにやつただけです。三十近くになつて，法政大學で教鞭をとりだして，學生の前で說明をしたり譯をつけたりしなければならなくなつた時に，はじめて精讀をしなければ敎師はつとまらんと氣がついて，それからやつと詳しく考えながら讀むように自分で努力する習慣をつけたぐらいのものです。

地方幼年學校時代，しよつちゆうわけのわからぬ短文や斷片が頭の中で躍つていて，それが丁度役に立つたことから思いついて，私はその後，或種の方法を自分で發明して意識的に用いはじめました。それはすでにこれまで何度も人に紹介した方法ですが，ついでに一寸のべておきます。(實際的には二十歳頃からやり出したフランス語の勉强の時にはもつぱら此の方法で進歩しました。)

「暗記」について

それはこうです。流讀をやつている最中，「これはよく意味がわかる！」という文に遭遇すると，わたしはすぐ本から目を上げて，その文章を(たとえ二行でも三行でも)ソラで言つてみます。つまつたら，カンニングをするようにチヨツト本を見て，なんとかしてそれを覺えてしまいます。そしてそれを何度も何度も言つておぼえてしまうのです。

おしまいには，どんな文でも，二行三行くらいまでは，それを一度讀んだきりですぐソラで言えるようになりました（三四年つづけているとです）。しかも，一つの文をいつまでも暗記しているのではなく，どんどん忘れてもいいのですが，とにかく文をよめばすぐそれがソラで言えるように，毎日毎日練習しました。もちろん，あんまり面白いことではないから，半時間と根氣がつづきません。たいてい十五分か二十分ぐらいでウンザリしました。しかしそれをとにかく毎日一回や二回は必ずやりました。

そうすると，いろいろと妙なことがおこつてきます。たとえば，或る頁のおしまいまできて，まだ文が終らないで次の頁につづいている時などは，すぐ頁を開けないで次の頁の最初の單語が何であるかを，十中八九までは言いあてられるようになります。最初の一語だけではない，時とすると四五語も，自分の想像する通りになつて行くことを發見したりなどします。こうなるとモウ非常に進歩しているのです。（しかも變なことには，大して意味のとれない，知らない單語だらけの文章すら，そういう風にして先きを言いあてることができるようになるのです。變ですが，實際そうなるのです。）

私は，ドイツ語をやりながら，そういう風にして，ごく樂にフランス語を物にしました。しかも，とても短時日に物にしました。神田のアテネ・フランセという學校へ通つたのですが，すでにその前の一年間にそれをやり，なおつづけて二三年やると，忽ちにしてフランス語が一通りよめるようになり，また喋舌れるようにもなり，綴れるようにもなり，懸賞作文にパスして御褒美をいただき，一躍して同校の先生にまで採用され，本職のドイツ語をそつちのけにして，まずフランス語を教えて飯をくつたということは，一にも二にも，ただいま申し上げた勉強法のおかげです。勿論私のフランス語というのは，單に達者

なだけで，口でペラペラ喋舌つたというだけで，學問としては完成しませんでした。だいいち文獻をたくさん讀んでいないから駄目です。けれども，とにかく飜譯をしたり教えたりするぐらいなら，フランス語を專門にしている人達にだつて負けないつもりですが，悲しいことには進歩がとまつてしまつたので，ほんとうの實力はあんまりなさそうです。

私がはじめてドイツ語をやり出してから後の十年足らずの間の苦心談は以上に述べた通りですが，それから後のお話をすることになると，玆に一寸，凡そ語學教育というものの根柢に横たわつている重大問題の一つを檢討せざるを得なくなります。

Philologie と Linguistik.

重大問題というのは，『文化語學』(Philologie) か『實用語學』(Linguistik) かという，殊に現下の外國語教育方針に重大關係のある，また，これから如何なる外國語をやる人にも切實な關係のある重大問題です。

まず私自身の傾向の方をハツキリと告白しておきましよう。前回までの身の上話をお讀み下さつた方々には，もはや別に改めて告白するまでもないことですが，私は日本にいて書物でドイツ語を勉强した人間ですから，私のドイツ語は，出發點からして，謂わば生きたドイツ語ではなかつたわけです。つまり，昔の漢學者が漢文を勉强するようにドイツ語を書物の上で學んだ人間です。近頃は，殊に英語教育の方において，眼から先に這入るといつたような「學問的」な教え方はいけない，耳と口とで覺えるような教授法を採用しなければいけない，という事が急にやかましく言われているようですが，そういう見地からは，どちらかというと，やはり私も非難される方の陣營に這入つてしまうでしよう。

けれども，『文化語學』對『實用語學』という見地からは，私はもつと詳しく言うならば，丁度その中間ぐらいの所を領域にし

ていて，どちらかというと少し文化語學の方に傾いている……といつた程度のところにいます。

それから，私の實用語學（即ち，發音，會話，作文等）的方面の事も正直に告白しておきます。私のは，とにかくドイツへ行つた事もないのだから，會話ができるだけでも一種の奇蹟と思つていただかなくてはならないのですが，もちろんそうスラスラと喋舌れるわけではなく，やはり一言一句かなり努力しないと言えません。發音も，そう大して手際が好くはない，九十九パーセントまでドイツ人のそれに近いという自信はありますが，あとの一パーセントはどうにも致し方のないところがある。十年ほど前まで度々ラジオで獨逸語の放送を擔當したことがありますから，お聞きになつた方は大體おわかりのことと思います。自分から言うのはおかしいが，大體ドイツ人の發音によく似た發音はします。決して如何にも日本人がやつているように聞こえる拙い發音ではない。しかし，ドイツ人に聞いてみると，「よく聞いていると やはり 本當の ドイツ人でないことは直ぐわかる」というのだから，こいつはどうも矢張りやむを得ないものと見えます。結局二世の英語のようには行かない。

作文はどうかというと，この方は會話とはちがつて，ずつと本物です。作文は，苦心もし，時にはずいぶん時間もかけ，しらべるべきことはチャンとしらべて書くし，おまけに文學書や哲學書その他色んな物を讀んで色んな事を知つているから，作文だけは，或いはドイツ人なみに書けると言つても好いかも知れません。

單に眼から遺入つてきたドイツ語の知識を基礎にして，多少インチキであるにもせよ，どうして發音，會話，作文，即ち實用語學的方面を以上の程度にまで進歩させたかということは，これはチヨツト一口では説明できません。褒めてくれる人は，「語學の天才」という，ちよつと私には意味のわからない，光榮

ではあるが，多少迷惑な形容詞で以て片づけてしまう。なぜ迷惑かというと，天才という形容詞は，私のチヨツト一口では説明できない複雜微妙な，無限にこみ入つた，單に意識と腦力と努力と苦心とによつて操作して來た千態萬樣の「人工的努力」と，その努力の蔭にかくれた「企劃性」と「信念」とを全然買つてくれない評價だからです。否，私の語學力というやつは，竪にして眺めても横にして眺めても，「天才的」なところはどこにもない，凡て是れ意識的に，努力的に，企劃的に，ヤツトのことででつち上げ，ヤツトの事で持ちこたえている人工的なものにすぎません。たとえば，發音にしても，ドイツ本國へ行けないから，その代りに在京のドイツ人と接するたびに，一言一句相手の喋舌るのに注意して，まるで植物學者が植物を採集するようにして，いろんな知識を採集して，同時に一生懸命にかれらの發音を眞似したきりの話にすぎません。殊に發聲映畫はよく利用しました。同じ映畫を三四晩もつづけて見，おしまいには中の文句を半分通り覺えてしまうほども研究しました。それでも，なかなか全部聽いてわかるところまでは行かない。しかし，とにかくトーキーでは隨分覺えました。その他，既に二十二三歳の時，幸にして在京の墺人の Leopold Winkler 君というのが，同じ大久保に住んでいたので，この人としよつちゆう交際することになつたのが非常にためになりました。この人は今でもいますが，du で話す關係のドイツ人というのは今でも此の人きりです。その他，今日まで，全體として，色んな關係で話したドイツ人の數が，それでも五十人や六十人はあつたでしようか。私の會話力と發音というのは，つまり東京にいた五六十人の色んな種類のドイツ人と，それから若干のドイツ映畫とから獲得した，すこぶる人工的なものなのです。その努力といつたらありません！ 或る種の細かい事となると，あんまり恥かしくて，とても公開する勇氣がありません。

けれども，たとえどんな無理な人工的な手を用いたにせよ，とにかく私のドイツ語には，我國の多くの獨逸語學者や大學教授諸君には大いに缺けている所の『實際語學的方面』というものが多分にあることは事實で，本來はやはりそうした人々と同じような『文化語學』卽ち Philologie の方の畑の男でありながら，そうした畑の方に一番缺けている實際語學的方面の要素を多分に備えているということが取りも直さず私の强味だと言えましよう。けれども，私を單に實用語學者だと思つている人があるとすれば，それに對しては私としては斷然異議があります。だいいち，語學というものを專ら實用語學と解する事に對しては眞向から反對ですから，その意味においては，私は或いはいわゆる「語學者」ではないかもしれません。やはり，よく言う，むつかしい事はよく知つているくせに，會話や聽き取りとなると，ごく簡單なことにすらマゴつく「學者」の方の陣營です。

だから，文化語學か實用語學かという問題に關しても，私はどちらかと言うと「文化語學」というものの方を强調したい氣持でいます。今の時勢には多少逆らうかも知れないが，一國の文化という高遠な觀點からは，眞の教育家はすべてそうでなければならないと思います。それは決して耳と口との教授法という改革に對して反對を唱える意味ではないので，それはそれで結構であり，私自身も實際教壇に立つ時にはそれを最高の原則としてやつてきました（今は指定は受けていないが，とにかく士官學校を卒業して形式的には少尉に任官した履歴上當然追放だろうと言われているので，自から慎しんで，何とか決まるまでは公職にも教職にも就こうとは思つていませんが)。(昭和 25 年現在)

では，どういう意味で文化語學の方を强調するかということを少し言わせてもらいます。本稿は，本當は具體的な苦心談だけにとどめて，一般論はなるだけ遠慮するつもりではありますが，此の問題だけは，私自身の語學力の生成過程と密接な關係があつて，兩者を分けて考えるわけには行かないと思うので，しばらく御辛抱をねがう次第です。

まず，いわゆる Linguistik，すなわち實用語學というものの正體をよく觀察して見ようではありませんか。そうすれば，それが果して語學の理想であるかどうかは，すぐわかります。

私の經驗から言うと，實用語學なんてものは，眞の語學すなわち文化語學の方がしつかりしていさえすれば，わけのないものだと思います。よく言う事だが，大學で何年も英語をやつたというのに，繼詰のレツテルすら讀めないじやないか，と云つて大學の英語が非難されます。しかし，大學では別に繼詰のレツテルの讀み方を教えるわけではないから，それもやむを得ないじやないですか。

それに反して，實用語學のみを理想にして獲得された外國語には，それどころではない，もつともつと致命的な缺陷があります。よく見受ける現象ですが，外人を相手にどんどん話のできる人という奴の中には，もちろん本當に其の外國語をよく知つて話す人もあるにはありますが，大抵の人はそうではなくて，單に日常會話の範圍の事だけがわかつているにすぎない。これが證據に，少しこみ入つた話になつたり，いわんや思想の發表とか氣持の上の問題とかになると，だいいち外人の方で初めつからあきらめて，てんで相手にしてくれない。そういう人が，たとえば外人同志がそうしたむつかしい話をしている席に一緒にすわらされると，まあ何てことはない，まるで落語家がオペラの役を引きうけたような恰好になる。そういう場面を私はたびたび見受けて知つていますが，實に屈辱的な……というよりはむしろ國辱と言いたい氣がします。そういう時には，何というか，或種の義憤をおぼえます。悲憤的愛國心に鞭打たれます。戰爭には何遍負けても好いが，精神的水準と文化人としての水

準だけは，せめて西洋人に笑われないだけの日本人を五六萬人造らなければ駄目だと思いました。本當です。

だから，實用語學の必要を誰人よりも以上に痛感して來ていながら，しかも信念としては，誰が何と言つても我國の語學教育は文化語學でなければならないという決論を持する所以のものは，一にも二にもそうした文化的見地の愛國心から來ています。此の愛國心，此の愛民族心だけは一錢の掛値もありません。

私は決して右翼的思想をもつた男ではない。また左翼的でもない。どちらかというと國際的自由主義者，あるいは個人至上主義的ニヒリストです。けれども，どんなに清算しようとしても清算し切れない過去の野獸が少しばかり意識の奥に殘留している……それは愛鄕心です，日本人としての自尊心です。こいつだけは觸らないでソーツとしておいてもらいたいのです。しかしマア，こんな話はやめましよう，くだらない事だから……

實用語學的行き方は，勿論中學あたりから盛に採用しなければなりません。けれども，それは直ぐ讃詰のレツテルが讃めたり西洋人と話ができたりする事が理想であつてはならない，やはり結局は文化語學，すなわち主として「書物が讀める」ことが最後の理想でなければならない。書物さえ讀めるなら，なんなら會話や作文はできなくてもよろしい。少くとも，全部のインテリが會話や作文ができる必要はない。しかし書物を讀むことだけは全部のインテリができなくてはいけない！これが私の見地です。

如何となれば，外國語と一口に言つても，文化的背景を持つた獨英佛等の語學をやる場合と，ホツテントツト語やズールー語やダコタ語やエスキモー語をやる場合とは，やる目的が全然ちがうと思うのです。それとも違わないでしようか？

もちろん，書物は讀めるが，會話も作文も碌にできないというのは，たしかに片輪には相違ありません。けれども……書物

が讀めないよりは好いじやありませんか！

とにかく，ちよつとしたツマラナイ事のために最も重要なことを忘れてはいけません。大學の教授のくせに會話一つ出來ないとか，語學者でありながら發音がなつてないとか言いますが，では，我國の文化，我國の科學を，せめて今日までの程度に向上させたのは誰の力だと思います？外人ガイドや，横濱の人力車夫や，米兵專門のパンパンや，その他外人を相手にペラペラと輕快に話のできる人たちの力でしようか？もしそうなら，もつと外人と接觸する機會の多い，ジヤワ人や佛領印度人や，その他植民地の原住民の方が我々よりはずつと西洋人の腦に喰い入つて，我々よりもずつと西洋文化の水準に近づいていた筈です。

そうではない，我國の文化水準をせめて今日の程度にまで引きあげたのは，すべて是れ，本は讀めるが會話となると頭を掻いて馬脚をあらわす醫學者，科學者，思想家，飜譯家，文人，大學教授，その他の片輪語學者であつたのです！すなわち「文化語學」をやつて來た人たちなのです！

だいいち，語彙や表現からいつても，實用語學ほど貧弱なものはありません。それに反して，書物に出て來る外國語が，これが本當の英語，本當の獨逸語です。(話される言語が本當の言語だという說は，もう古いといつて好いでしよう) 從つて，この方は，そう簡單には支配できません。長年の勉强を要します。しかしそれはむしろ當然でしよう。

語學というものを輕便に考えている人は，もう一度昔の漢學者の立場にかえつて，その眞の目的を深く反省すべきです。でないと，西曆 2049 年頃には，極東の地圖はすつかり色が變つてしまいますよ。

以上は，事いやしくもドイツ語に關する限りという前提で申しあげたのです。ホツテントツト語となればまた少し話がちが

つて來るかもしれませんが，私はホツテントツト語の事は知りません。

以上は，文化語學の見地から，すこし實用語學のことを强く言いすぎましたが，今度は，また苦心談の方へ戻つて，會話とか發音とかいつたような方面でどんな苦心をしたか，事實を主にして申しあげます。

會話と作文　會話や發音で一番苦心をしたのは，ドイツ語ではなくて，一番最初は先ずフランス語でした。わたしのフランス語は，陸軍の學校にいる當時に，ほんの少々噛つてはいたのですが，ほんとうに本腰を入れてやり出したのは，任官と同時に陸軍をやめさせられてから後のはなしです。(それでも，士官學校の當時，內緒で Tolstoi の小說の佛譯を机の中に忍ばせていて，そいつを週番士官——井伊中尉といいましたが——に見つけられて呼び出され，おまえは無政府主義かといつてヒドクどなりつけられたことがあるところをもつて見ると，既に士官學校の時にも，或る程度までは讀めるようになつていたものと見えます)——ところが，フランス語をやりながら，まだ一度もフランス人の發音という奴を聞いたことがなかつた。そこで，陸軍をやめさせられると同時に，神田のアテネ・フランセというフランス語の夜學校に入學しました。その時には，書物だけではモウ大抵のものは讀みこなせるようになつていました。その前の二年間ほどは，ちようど暇があつたので，わかつてもわからなくてもとにかく一日に百ページ位のフランス語は必ず讀むことに決めて勉强し，その上おまけに一日に半時間ぐらいは，既に前に申し上げた，「二三行の文章を一度眼を通したきりで，中に少々わからぬ單語があつても，すぐそれをペラペラとそらで言えるようにする」という練習時間を設けて，とにかくそれを二年間つづけて强行したものですから，その間のフランス語の進步は實にすばらしいものでした。

既にドイツ語を七八年もやつた後のことですから，その點もあつたでしよう。

要するに，アテネ・フランセに入學するときには，發音はほとんどチツトも知らなかつたが，讀む方は相當進步していたのです。ですから，初めからすぐ高等科に這入りました。高等科は，校長の Cotte さんの擔任で，もちろん全部フランス語でしやべります。正直に言うと，最初の二三時間は，何を言つているのかちつともわかりませんでした。生れてはじめてフランス人の發音を聞いたのですから無理もない話です。しかも時々質問を向けられる。隨分弱りました。

けれども，不思議なもので，四時間目五時間目あたりからは，よくわかり出しました。まるで……謂わば霧が晴れて隣の家が見え出すようにスーツとわかり出したのです。わかり出すと，一言一句刻明に理解できる。しかもそれが四時間か五時間目です。

これは全く，その前に書物の上で二年間ばかりミツチリ勉强していたお蔭です。それと，既にのべた「長い文章を其の儘暗記する」という練習方針が効を奏したのです。

殊に强調して申しあげたいのは，實際語學というものは，既に書物が充分讀めるようになつてさえ居れば，まことにわけもないものだという此の一點です。私は，自分の經驗からして，斷乎として此の點を主張したいと思います。『もし頼山陽が支那へ行つたとしたら，おそらくは一年でもつて實際の支那語ぐらいはすぐ出來るようになつたろう』と。

というのは，わたしはアテネ・フランセで實際發音を習うこと約二三年，三年目には，前述の Cotte 氏にみとめられて，少しおぼつかなくはあつたが，とにかくアテネ・フランセ式の直接教授をやる講師として同校の教壇に立つたのです。なぜみとめられたかというと，べつにそう大して實際語學としてのフラ

ンス語が特別によく出來たというわけではないが，とにかくドイツ語の方で相當西洋の精神文化を吸收しているし，その上おまけに二三年間强行的にフランスの書物を讀んでいるから，どことなく「精神水準」がちがつていたので，學者タイプの Cotte 氏のことですから，つまり其の點を買つてくれたのではないかと思います。山田吉彦氏もその當時 Cotte さんの所にいましたが，此の人もやはりそういう意味で買われていたものだろうと思います。單に發音が好いとか，實際的語學がしつかりしているとかいう點では，そう言つては失禮だが，私も山田吉彦君も，たとえば丸山順太郎先生のような人には，たとえ逆鉾立ちをしても，とても叶うまいと思いました。

これから少々ボロ話になるが，アテネ・フランセの教壇では，まことに血の出るような苦勞をしました。とにかく，フランス語の ＡＢＣ からして教えるのに，日本語は一切使わないで，初めつからフランス語でやるというのだから，新米の私にとつては，實に目もあてられない苦勞です。一時間中，つづけ樣にフランス語ばかりでしやべり，それに手ぶり足ぶりを交えて，つまりフランス人に成り切つて，しかも ＡＢＣ から教えるというのですから。つまり一種の芝居ですな。――しかも，教えている最中，扉の外には Cotte さんが，洒落ではないがコツトコツトと靴をならしながら廊下を歩いていて，一言一句に注意してきいている。そして授業を了えて出てくると，すぐ私をつかまえて，あなたの difficile の發音はまるで difcile のようにきこえる，fi の i をもつとハツキリと聞かせなければいかんとか，あなたは commencer de…… と言つたが，commencer の時は de ではない，à ですよ，とか……あるいは，「此の瞬間に」は à ce moment ではない，en ce moment ですよ，à ce moment だと「その瞬間に」になつてしまいますよ，とか何とか……とにかく一回の授業について五つか六つの誤りを指摘される……

なるほど，會話や作文になると，よほどしつかりしていないと，一人前には行かないものだということを，骨身に泌みて痛感したのは此の時です。

こうして，盛に誤もおかし，いろいろと恥ずかしいことを經驗しながら，此の直接教授のおかげで，單にフランス語のみならず，私の本職たるドイツ語の方についても，私は根本的に反省させられました。自分ではずいぶんわかつているつもりでも，どんな簡單なことでも，それを責任をもつて人に教えるとなると，よつぽどハツキリした確信がないと駄目だという點にです。

けれども，とにかく，Cotte さんに仕込まれたおかげで，實際語學としてのフランス語は短時日のうちにおどろくべきほど進歩し，その後，外務省の飜譯課に勤めた時には，とにかく曲つたなりにも相當複雜な外交文書の佛譯をやつて，最初はずいぶん直されたが，おしまいにはわたしの案の通りに通過することもあつたのですから，自分ながらおどろきました。もし私に文化的野心がなかつたら外務省に勤めたままになつて，今頃はおそらく飜譯課長にでもなつていたところでしよう。けれども，フランス語は單に教養としてやるつもりで，ラテン語やギリシヤ語と同程度にしか考えていなかつたので，外務省は，映畫の方に仕事がみつかると同時に止してしまいました。もつとも，その時にはまだ，まさか語學が本業になるとは考えていなかつたので，理想は「哲學あるいは演藝」という，ちよつと私一流の變なところにあつたのです。

演藝といつたから，此の方にも一寸觸れないと苦心談が完全になりますまい。フランス語をやりながらも，いちばん興味をもつてやつたのは，アテネ・フランセの校友會で催されるフランス語のお芝居でした。あの當時の人はまだ今でも多く健在でしようが，ずいぶんインチキなフランス語で盛に Molière や Labiche などをやつたものです。小生自身も，餓鬼大將を以て

自任していたから，何かというとすぐ主役を引受けてやつた。大抵フランス人の半專門家がいて，發音をやかましく訂正してくれるので，語學の方でも非常にためになりました。だから，自慢するわけじやないが，佛語の發音だけは，佛語を專門にしていられる現在の大家にも負けないつもりです。語學力では，長年進歩せずにいるから，或いは大したものではないかも知れませんが，發音だけの話です。(けれども，長い間使わないとやはり駄目になるものと見えて，今ではモウ佛蘭西語の會話となると，あまり自信がありません。やつと用事が言える位のところでしよう。)

もう十年以上も前の話だが，誰がどう傳えたか，私の事を博言學者のように吹聽する人があつて隨分迷惑したことがありました。つまり，獨逸語ばかりではない，フランス語も英語もイタリイ語も，西洋の言語は凡てできる，その上おまけにラテン語，ギリシヤ語，サンスクリツト，ヘブライなど古典語までやる……というわけです。雜誌などにも，極く無責任な筆つきでそういう意味の事を書かれたので，こいつには困りました。

なぜ困るかというと，其處につまり前號でのべた Philologie 對 Linguistik の問題があつて，Philolog (文化語學者) を以て任ずる私としては，そんな澤山の言語ができるように言われると，世間的には一種のインチキ師になつてしまうからです。人間一個人の限りある一生涯と，その限りある一生涯において成し遂げ得る頭腦の業績との間の關係を極くアイマイに考えている世間の人は，「あの人は何ケ國語ができる，十何ケ國語できる」などということを，何の條件もつけずに平氣で言いますが，これは實におかしな話です。なるほど一人の人間が何ケ國語も自由自在に驅使するという例は，古今東西に亘つて決して稀なことではありません。けれども，それは必ず Linguistik であるに相違ない。たとえば，低級 Linguistik の範圍，すなわち會話

をしたり日常の意思を達したりする範圍でなら，數カ國語をマスターしている人は世界に何百萬もいます。それを商賣にするとなれば，三十ケ國語ぐらいは一生のうちにマスターできるでしよう。けれども，既に高級 Linguistik (實用語學の少し毛の生えた程度のものを斯う呼んでおきましよう，これも結局大したものではないのですが……) の範圍，即ちたとえば新聞を讀んだり，國際會議の通譯をしたり科學書の飜譯をしたりするとなると，もう何十ケ國語とは行きません。天才でも五六ケ國語が精々でしよう。普通は高々二ケ國語，三ケ國語で，四五ケ國語というと誰でも多少疑うのは當然です。——要するに，そう澤山の言語ができるというのは，凡て Linguistik のことで，本當に深く研究するとなると，即ち眞の Philologie となると，もう二ケ國語だつて無理です。たとえば私の場合で言うならば，獨と佛とを同樣に深く研究しようとすると，それはモウ二兎を追うことになります。如何となれば，眞の Philologie は，單に言語ばかりではない，その言語で書かれた凡ての文學，學問書，風俗習慣，歷史等をはじめ，日常生活の Linguistik をも含めたありとあらゆる事柄を立體的に包含するのでなければ本物にはなり得ないからです。ドイツ語の場合でいうならば，Philologie としてのドイツ語は，たとえば昔の漢文が漢文學，儒教，支那文化，佛教文化の全部を包含したごとく，ドイツ人の頭が生み出した有りと有らゆるものを全部包含します。ドイツ語はドイツ語だけではないのです。Philolog としてのドイツ語學者は，單なる語學者では勤まらないのです。(度々申す通り，獨逸語，英語，佛語，などは，ホツテントツト語やエスキモー語ではないのですから) なによりもまず文學者，藝術家，哲學者，思想家でなければならない，その上科學のことも知らなければならない，制度文物の知識もなくてはいけない，その上おまけに日常會話も，作文も，發音その他の具體的な Linguistik にも相當の

自信がなくてはならない……それら凡てを基礎とした上に築かれたものでなければ本當の Philologie とは言えないのです。—

そんな意味における語學が，人間一生の中に，二ケ國語以上に亘つて出來るでしようか?

私は斷じて申します：それは絶對に不可能です。もしそんな事が二ケ國語以上できるという人があつたら，そこにはインチキがあります。本當に天才なら，そんな馬鹿な努力はしません。そんな事を企らむ人があるとしたら，それはその人が天才でない證據です。

もつとも，たとえばドイツ語をよく理解し，その根本を究めんがためには，英佛のみならず，ギリシヤ，ラテン，其の他できるだけ多くの同族語を多少かじる必要はあります。學問はすべてピラミツドの如きもので，基底が廣くないと高さが生じないのです。そうした要求から私も佛語その他をやりました。英語も，讀むだけは少々讀めます。けれども……數ヵ國語が『できる』とは言われたくありません。『できるとは何ぞや?』と反問したくなるからです。

暗記と記憶に關する私見

フランス語に凝つて，一番自信のあるドイツ語を一時おろそかにしたのは，二十歳から三十歳までの間でしたが，その間には，同時に芝居の方に凝つたり，生活に困つて飜譯をしたり，その他色んな道樂をして，本職とは全然無關係な方面に足を踏みこんでしまいました。ところが，語學というものは妙なもので，結果として見ると，無關係なことが一番關係があるということが只今になつてよくわかります。只今になつて考えてみると，おれはどうしてもつともつと色んな事に首を突つこんで置かなかつたろうかと，むしろ脱線の少なかつた事を恨んでいます。私は只今では獨逸語を以て學生の努力の對象とする傍，全然ちがつた方面では，自信を以てやれる事といえば，演劇だ

けです。もはや此の年をして商賣道を習う自信もなければ，改めて科學者を志す元氣もない。本當は辯護士なんてものや，社會運動や，その他色んなことがやつて見たい。けれどもそれはもう駄目です。

語學語學といつても，語學という奴は，深く人生の『事柄』と關係しています。卑近な例を取るならば，單語一つ覺えるにしても，自分の頭に關心のない事は，覺えることが出來ません。たとえば「氣分」，「氣持」ということをドイツ語で die Stimmung といいますが，この單語を教室で學生に向つて丁度適當な機會に黒板にでも書いて教えてごらんなさい。そして，それを試驗問題に混えて出してごらんになるが好い。五十人居れば，おそらくは四十五六人はみんな忘れてしまつているでしよう。しかし，四五人，それを不思議に記憶していて，待つていましたとばかり正解する學生がいる。その學生がどんな人間であるかを檢べてごらんになるが好い。その學生は必ず何か藝術とか藝術論とかいつたような事に深い關心を持つていて，とにかく「氣分」という概念に何等かの深い關係のある世界に生きている人間です。これはほんの隨意な一例ですが，要するに單語の暗記ということは，普通人の考えているような，單なる「暗記力」の問題ではありません。「頭が好い惡い」の問題ではありません。その人間が人生諸般の現象に對してどれだけ深く，どの方面にどれだけ強く關心を持つているかによつて「暗記力」がきまつて來るのです。少し別な例で言つて見ましよう。單語の暗記(從つて文章，句などの理解)は，たとえて言えば人の顔や名前をおぼえるようなものです。自分に何の關係もない，痛くも痒くもない人名を二十も三十も並べてそれを全部おぼえろと言われたつて，それは一時間みつめて居たつておぼえられるものではありません。これは私自身實驗のつもりで一寸やつて見たことがあります。法政大學にいた頃の話ですが，いよいよ入學者が決

定して，獨逸語を第一外語として私のクラスへ這入つて來る學生の名簿ができ，おまけに寫眞入りの學生證までちやんと整理されたので，私はちよつとしたワルサをしてやろうと思い立ちました。ワルサというのは，學生と初めて接する前に，寫眞と名前とを對照して，クラスの七八十人の顏と名とを頭の中でくつつけてすつかり覺えてしまつてやろう，そして，初めて敎壇に立つた最初から，いきなり初對面の學生をつかまえて，おい何々君！なんて指名して，「おや，此の先生はモウ初めつから一人一人の顏を知つてるぞ……こいつはウツカリできない……」という風に頭ツからちじみ上るようにしてやろう……

そんな事を考えて，およそ三四時間もかかつて，まるで皆さんが單語カードを暗記なさるように，ちよつと見ては眼をつぶり，また一寸見ては眼をつぶつて，一生懸命に寫眞と名前とを暗記したものです。

その結果どうだつたかと言うと，いざ敎壇に立つて見ると，七八十人のうち，たしかにおぼえていたのはほんの四五人だけで，しかも，その中二人は，呼んでみると「ちがいます！」という。つまり前田を前川と言つたり，古屋だから「フルヤ」かと思つたら「コヤ」だつたり……いやどうも完全に失敗！

單語カードで無理無愈に單語を詰めこむなんてのは，結局これと同じことではないでしようか。

それに反して，既に關心が生じている所においては，人名は何の努力もせず，しかも何人でもおぼえる事ができます。美人だな，と思つた女の人の名は，一ぺん聞いただけで一生おぼえているでしよう。むしろ忘れるのに苦勞するでしよう。また，自分にむかつて何か失禮な言動に出た相手の男の顏は，一瞬にして强く腦裡に刻みこまれ，その名，その聲とともに，もはや拭わんとして拭うべからざる絕對確實な單語知識としてあなたの藏書の一部に編入されます！

片言，斷句，文章もまた然り。感情問題に關係した書簡なんてものは，よつぽど文句に注意しないといけないというのはつまり玆なので，相手の本當に關心のあるところに觸れた「痛いこと」または「お世辭」というやつは，あなたは別に大した考えもなくお書きになつても，それを讀んだ相手の人は，まるで必ず試驗に出るときまつた「やま」の箇所を敎えてもらつた學生のように，一言一句を腦裡に刻み込んでしまいます。ただ學生の試驗勉强とちがうのは，學生は頭痛鉢卷で五六行の文句を詰め込むのだが，痛い所に觸れた，あるいは擦ぐつたい所に觸れたお世辭や惡口は，別に頭痛や鉢卷をするまでもなく，まるで吸い込まれるように二度三度四度とそれを讀む，そして四度も讀むうちにはすつかり其の用語から云い廻しまで完全に自分のものになつてしまつて，うつかりすると，それとは何の關係もない文章を書いている最中にも，ちよつとでも似た場合になるとすぐ其の文句が出て來るものです。

以上はほんの一二の例にすぎませんが，此處に『暗記力』という現象の心理的根據があるので，その法則を一言に要約するならば『すでに自分の關心が潛在的に耕やされつつある方向に關係した單語は，待つていましたとばかり頭にこびりつくが，まだ自分の關心範圍に其の該當物のない單語は，どんなに努力しても，どんなに頭の好い人間でも，たとえば胃袋と食物との關係のように這入る量は高がきまつており，また一度這入つてもすぐまた忘れてしまうものだ』——こう言えましよう。だから，自分の關心とは何の關係もない單語は，頭の好し惡しに關係なく，まあ一日に十語ぐらいしか覺えることはできません。百おぼえても九十は必ず忘れます。一日に十語とすれば一年に三千六百五十です。五年でも十年でも大したことはありません。そんな貧弱なおぼえ方では，とても一生のうちに一つの語學をマスターすることはできないでしよう。(一寸斷つておきますが，

一日に十語といいましたが，詳しく言うと，たとえば kommen にはおそらく百以上の用法がありますから，こんな單語はすべて百語以上として勘定することになります。in や an などになると五百語乃至千語として見なければなりますまい……）

ですから，一日に十や二十の單語をおぼえていたのではおつつかないので，全體として見ると，その三十倍か四十倍を覺えて行かないと五年乃至十年のうちに少し讀めるという程度にすら達しません。そうした奇蹟がどうしてできるかというと，それが卽ち關心との結びつきなので，一頁の原文を讀んで十五六の單語を引いたと思つても，實は關心の無意識な力によつて，その頁では恐らく五十や六十の新らしい事を覺えているのです。その無意識的におぼえる一頁に何十という新知識は，それが三十になるか，四十になるか，或いは五十になるかという事が何で決するかというと（問題は此處ですよ！）それは決して「腦力」が決するのでもなければ「熱心さ」が決するのでもありません。不知不識の間に吾人の刻々の意識を色づけて行くところの，『潛在關心』が之れを決するのです。原文を讀んで解るとか解らんとかいうのも，すべて此の『潛在關心』から來ます。此の潛在關心なるものが，物慾や性慾や自尊心問題と同程度に，人生の有りと有らゆる方面に隱然として高壓電線網のごとき關心網，痛痒網を張りのばしている人間のことを，その電壓の强度と其の網の範圍に準じて，之れを『頭が好い』，『天才だ』あるいは『頭が惡い』，『凡才だ』と名づけるきりの話です。

「關心」と「慾」が決定的要素

たとえば，春機發動期にある青年諸君は，或種の話を一寸聞いただけで，われわれ老人にはとても及びもつかない猛烈な潛在力を以てピンと反應するでしよう？ それが天才です。——當局の眼をくぐつて惡い事をする人々は，或種の事柄に關しては

あなた方無邪氣な人たちの及びもつかない頭の好さを持つています。これが（その或種の事柄に於ける）天才です。——自分に切實な關係を持つ事柄においては誰もが天才なのです。自分に直接何の關係もない問題においては，ニユートンだつて低能兒以下でした。

そも人間なるものは，自分にとつて痛くもなければ痒くもないといつたような緣遠い事柄に對しては恐ろしくおめでたいが，少しでも自分にとつて痛くもあり痒くもある事柄にかけては，その事柄に關する限り，おそろしく頭が好くなるとしたものです。ある事柄における天才凡才の差とは，要するに，その事柄に對する吾人の痛痒の程にすぎません。天を作すは痛にあり，才を爲すは痒にあり——痒を離れて才なく，痛を去つて天なし：わたしは斯く信じます。

ところでさて，その痛，その痒は何處から來るか？ その痛を以て生まれ，その痒をもつて育つのは，これはやはり「天」ではないか？ という人があるかも知れんが，此の問に對しては私は簡單にかく答えたい：それは蛇のような心から來ます。われわれ凡てが（嗚呼あまりにも）豐富にめぐまれて此の世に生れて來る空おそろしい，毒々しい，永遠に得體の知れぬ「蛇のような心」から生れて來ます。維摩經に曰く：「痴愛を滅せずして明脫を起し，五逆の相を以て而も解脫を得」と。私は此の「而も」(obgleich) を「故に」(weil) と變えてかく言いたい：「痴愛滅せざるが故に明脫を起すなり，五逆の相を以ての故に解脫を得るなり」と。

此の關係は，深く抉つて述べるとなると，いくら書いてもきりがありませんが，その暗記力というものとの關係は實にすこぶる明瞭でしよう？

『若い時にもつと道樂をして色々と脫線しておけばよかつた』と言つたのは此の意味です。

これは語學者としての私の私見ばかりではない，およそ一つの專門の使命を完全に果そうとする人は，すべてこうした歎きを持つているのではないでしようか？ 人世の事というものは，何が何とどう關係しているか，そう簡單には言えません。凡ての部門が凡ての部門と凡ての關係に立つている。深く一事に徹底せんがためには，深く一事に徹底してはならないのです。すべての範圍を抱擁せんがためには，凡ての範圍を抱擁してはならないのです。幅を廣く取らんがためには，まず一ケ所を深く穿つことが必要です。一ケ所を深く穿たんがためには，できるだけ幅を取ることが必要です。如何となれば，幅は幅に非ずして，奥行きの一種だからです。奥行きも亦實は奥行きに非ずして，單に幅の一種にすぎないからです。如何となれば，問題は面積の大を狙うにあるのですから，幅と奥行には，別に幅としての絶對價値，奥行としての絶對價値というものはない筈です。

まるで禪坊主の寢言みたいな事になつてしまいましたが，單なる一語學者としての私の，此の『半生觀』は，おそらくは腦力を資本にして仕事をするあらゆる專門に共通な修身ではないかと思います。こんな事は，實は誰も教えてくれなかつた。私自身，色々と失敗し，色々と迷つたあげく，もはや取り返しのつかない只今となつて，ハッキリと此の認識を得たのです。こういう切實な一生政策と申しますか，生涯經濟と申しますか，とにかくこうした修身こそ，たとえば大學などに好い先生をおいて，學問をする人間だけを別けて，自分の一生を最も有効に利用するように，徹底的に豫備訓練をすべきではないでしようか？

けれどもまあ，考えて見れば，私などは，ずいぶんヘマな事をしながらも，幸にして三十歳になる前にハツキリと自分の一生の最も有利な，最も自分の條件を完全に効かす方策を決定して深く心に決するところがあつたから，まあ上手にやつた方の

部類かも知れません。けれどもとにかく，語學者になるにしては，あんまり出發點が狹すぎました。哲學と文藝と芝居とが傍系的專門じやあ，語學者も大したことはありません。うつかりすると單なる Linguist になつてしまう。それかあらぬか，現にわたしをそう見て居る人もかなり有るようです。そう思うと，私の元來考えていた Philologie の理想も，わたしという人間を材料としての實驗に關する限り，（これを自認するのは甚だ情ないが）今回はまず不成功だつたかも知れません。また來世にやり直しますか。けれども Philologie の理想だけは理想として買つて下さい。

今回のお話と關連して，私の Philolog としての座右の銘を御紹介します。文豪 Schiller の言で，ドイツ語は少しむつかしいがまあ研究して下さい，それは：

Wer etwas Großes leisten will, muß tief eindringen, scharf unterscheiden, vielseitig verbinden, und standhaft beharren.

譯して曰く：大事を遂げんとする者は，徹するに深く，辨ずるに鋭く，獵るに廣く，持するに剛なるを要す。

私は，以上の第二と第四とだけで多少の成功を收めましたが，第一と第三とでは完全に失敗しました。

今度は，少し眼先を變えて，時間の利用に關する經驗談をしましよう。

時間の利用

いわゆる寸暇を利用するという件では，私はずいぶん素ばしこく立ち廻つて來たつもりです。古典語にまでも手を出して，ラテン語を相當深く，ギリシヤ語はそれよりはやや淺く，最後にはほんの少々梵語を嚙るに至つたのは，まつたく寸暇利用のおかげです。ギリシヤ語に至つては，書齋に坐つてまともに勉强したことは一時間もなかつたと思います。つまり全部，電車の中で，それから授業の

十分間休憩などにやつたのです，そのため普通なら二三年で出來ることに二十年ばかりもかかつてしまいましたが，その代り本職のドイツ語その他には何の影響も與えずに，全然寸暇だけの收獲としてギリシヤ語が多少わかるようになつたわけです。ラテン語は，アテネ・フランセで學び，あとでラテン語の講師として同校の教壇に立つたので，教室で恥をかいては大變と，これは家でも相當勉强しました。けれども，アテネ・フランセでラテン語を教えたのは，やはり同校の直接教授式メトーデで，教室では一切日本語が許されず，フランス語でもつてラテン語を說明したり譯したりしたものですから，私の關心が主としフランス語の方にあつたので，フランス語は進步したが，ラテン語は一向進步しませんでした。學生がむずかしい引用句などをもつて質問に來ると，得意のフランス語で洒落を言いながら笑わして追つ拂つたことが度々あります。ひよつとすると，そんな人がいて，此の記事を讀んで苦笑しているかも知れないから，申しわけの爲に付記しますが，あれから後に本當にラテン語に凝り出したので，今の私のラテン語をあの程度のものと思つては困ります。あれよりはずつと進步しています。

少し脫線しましたが，寸暇の利用というと眞先に思い出すのが，話は少々尾籠になるが，便所という奴です。便所にしやがむ數分間乃至十數分という奴は，人間一生を通ずれば，隨分の時間になるでしよう。しかも，量的にのみならず，質的に言つて，便所にしやがむ時間というやつは非常に貴重な時間です。婆婆にいる間は，色んな意味で氣がソワソワしていますが，一旦別莊へ這入つて臭い飯ならぬ臭い空氣に接すると，實によく氣持がおちつきますからね。此の面壁十分間の坐禪をどういう風に利用したものかと二十歲頃に考えはじめ，最初は單語帳など作つて持ち込んでみましたが，そのうちには，單語暗記などというくだらない事をするには，此の選ばれる十分間は餘りにも

勿體なさすぎる，これはもつと何か有意義な事に利用しなければ嘘だと氣がつき，そのうち遂に考え出したのが，便を催したならば早速堂々と書物をふところにしてでかけるという策です。但し別に本を讀むというのではなく，平素本を讀む時に，これは面白いと思つて赤鉛筆で印をつけた所や，どうしてもわからなくて長い間考えた個所などを開いて，ほんの數行を睨んで考えるという遺樂です。婆婆でどうしてもわからなかつた事が，面壁十分間のうちに豁然として解るという事もずいぶんありました。また，面白いと思つて赤線を引いておいた文句を（もうだいぶ昔のもので殆んど忘れかけていたのも出てきますから）靜かに讀みなおし深く考えながら味わつていると，今まで全然注目しなかつた一大世界が眼前にひらけ初め，便所の壁が二つに割れて無限の樂園の前に安坐したような嬉しい氣持に見舞われることもあります。とにかく，色んな意外なことがあつて，一つ一つ述べるわけには行きませんが，いずれにせよ，思想を深めるという點では，端倪す可からざる收穫があるのです。嘘とお思いになるならやつてごらんなさい。とにかく，本を讀んでいるときに，これは面白い，これは一度よく考えよう，これは俺に重大な關係がある，などと思つて赤線を引くのは誰でもやることですが，おしい事には，大抵の人は，それをよく味つて考えなおすという事をしないで放つておくのではないでしようか？ そのためには，面壁十分間の臭い空氣をおいて外に適當な空氣はありません。少くとも私は，便所がそれに一番向いていると思います。沈思默考などと言いますが，まだしつかりした具體的內容を持たない若い者の沈思默考なんてものは，うつかりすると漠然たる，とりとめのない，大して自己を扶る所のない，それどころか，ややともすれば放心虛脫にすぎない散漫なものになりがちです。私もそうでした。ところが，何か書かれた文章とその意味を出立點として自己に與えると，そこには自分でもおどろく

ほどの心境の發展が生じます。その上おまけに，語學を中心とする考え方の進歩はすばらしいものです。つまらない記事を百頁讀むより，或種の赤線づきの文句を一行二行便所で睨んだ方が語學はずつと長足の進歩をするものです。

ただし，段々と年を取るに從つて，若い時のように一瞬一刹を功利的に打算的に考えるということをしなくなりました。それと，途中でだいぶん心境の變化もあり，また，自分自身の自主的見地から色々と考える事が多くなつたせいもありましよう，そうした寸暇の利用は，十年ほど前からは少しだらしなくなりました。ただ，面壁十數分という奴だけは只今でも大好物です。最近まで，信州の妻籠（木曾谷の村）という所に疎開していましたが，天氣の好い日には，汚ない軍服を着て山をひとりで歩き，山の一番高いところで下界を見おろしながら野糞を垂れるのが唯一のたのしみでした。どうしてそんなに巧い具合に便が出るかというと，そこは實によくしたもので，相當長い坂をエツチエツチと登つてゆくと，頂上に達した頃には大抵うまい具合に便を催します。これはどうも一般的法則らしい。現に私たちの借りて住んでいた家が，木曾川の岸から「あららぎ川」という溪流に沿うて八九丁もダラダラ坂を登りつめた一番最後のところにあるのですが，此の坂を登つて妻籠村へやつて來る荷馬車の馬が，私の家の前あたりまで來ると必ず立ちどまつて糞を垂れる。その度に塵取りをもつて出て其の金色燦たる祝福を推しいただいて裏の畑へ持つて行くのが私の仕事でしたが，此の馬の氣持は私によくわかる。私もその通りで，今日はあの山の天頂で野糞を垂れてやろうと思つて出掛けると，上に着いた頃には豫定通りチヤンと陣痛を催すのです。

山頂の野糞の味！ドイツ語とは直接何の關係もないが，前にも申した通り，凡そ人生の事たる，何が何とどう關係しているかわかつたものではなく，ドイツ語も或いは括約筋あたりで野

放心と，老後の生活態度

糞と關係していないとは誰にも斷言できないし，括約筋に關する研究だつてまだ其處まで進んでいるわけでもなかろうから，野糞に關する講釋も一應は聽いて下さい。あたりに人無き山頂のことゆえ，敢然ケツを捲つて，四方八方から丸見えのところにしやがみます。そして悠々と下界を見おろし，煙草を吹かしながら時の到るのを待ちます。時が到るというと，それと覺しき例の胎動が感ぜられ，やがて前衛，あるいは既に本隊らしき大部隊の進出がはじまる。するとサア，出るわ出るわ，まるではらわたそのものが下りるのではないかと思うほど，輕輕として，チューブも裂けよとばかり繰り出される。その繰り出された蜿蜒長蛇のごとき縱列が，一卷き一卷き又一卷きと，たくましき左卷きに幾回となくとぐろを卷いて，卷き終つた最後が，やや筆がかすれて『終りツ！』といつたようにピンと上へはね上つた頃の下腹部の氣持よさ……茫然自失というか，恍惚奪魂というか，羽化登仙というか，寂滅爲樂というか，涅槃というか，虛脫というか，……とにかく天地自然の心に解け込んでしまつたような氣持です。

藪の蔭でソッとやる野糞なんてのはあんまり感心しませんな。大きなひきがえると對坐して畏まつて見たところではじまりません。四方八方まる見えの山頂でケツをまくつて，「あの邊には人間とか何とかいう碌でもない野郎が碌でもない事で騒いでいやがる」と思いながら下界を見おろしてきばるところに快感があるのです。

野糞がドイツ語の苦心談とどう關係するか，と問われると，これはチヨツト……困りますな。しかし，全然何の關係もないわけではない。たとえば，わたしのように，寸暇を利用する事を徹底的にやり通して來た人間には，ある年配になると，當然反動がおこつてくるもので，すべてを打算的に考えていた努力努

力の時代は，十四の年からかぞえて，四十年とはつづかなかつた。最近は，そんな生活とは少しちがつた方面に重點が傾いている……という，ちよつと一口では申しあげられない複雜微妙な事柄の象徴的表現だと思つて下さい。

睡　眠

次は睡眠のこと。わたしは八時間乃至十時間はたつぷり眠ります。寢の足りないときには，半時間でも一時間でも思つたときに晝寢をする事ができます。法政大學に勤めていた頃には夜が主として勉强時間だつたので，學校の晝食後の三四十分は必ず涎を出して晝寢をしました。野蕣と同樣窮屈な狀態でやる晝寢という奴は，好い氣持なものです。當時法政大學で同僚だつた星野先生というのも，よく晝寢をしておられたが，この人もかなり努力して勉强する人でした。努力して勉强する人間はみんな思つた時に隨時うたたねが出來るようになるのではないかと思います。不眠症になやまされたなどという例は一度もありません。

以上のように述べて來ると，よく反省してみると，私自身の描寫法が少し歪んできたような氣持もしないではありません。わたし自身，ほんとうに今まで述べて來たような，打算的に功利的によく考えた勉强法をして來たろうか？色々な事實をよく考え合せて見ると，其處には色々と例外があつたような氣がします。たとえば，芝居がはじまつたり，その他何か勉强の日常生活を攪きまわしてしまうような突發的なことが起ると，まだ氣の練れていなかつた私はその騷ぎがすつかり靜まつてしまうまでは，どうしても勉强が手につかなかつたことを記憶します。こんな事では駄目だと思つて，精神修養のつもりで，嵐の最中に本をあけて見ても，やつぱり駄目です。そのかわり，靜かな勉强生活がかき亂された時には何時も感じたことですが，『事務的な才能』，すなわち，どんな大騷ぎの最中にも，頭をハツキリとさせて事に對處し，その時その時の緊急要件をテキパキと捌

いて行くという能力は，自分ながらおどろくほど發揮することに氣がつきました。またそれが面白くやつて行けるのです。私の知つている範圍のいわゆる學者連にはそうしたところがなく，

肌の相違

世間を大して知らず，書齋の勉强ばかりしている筈の私の方がむしろそうした事を樂しむ傾向があるところを以て見ると，私という男は，學者肌の男なのではなくて，むしろ實際家肌の男なのではないかと思います。——ただ私に完全に缺けているのは，人の氣持に取り入つて，上長とともに巧く事を運んで行くという才能です。大將にさえなつていれば巧く行くが，難かに命令される立場になると必ず或る時になつてケツをまくつてしまう。二十年時代に陸軍を止したのもまず其の手はじめ，それから外務省の翻譯課も二年足らずでケツをまくつて，當時の人事課長さんに一寸御迷惑をかけた（まだ健在でいられたら此の席で改めて陳謝致します），それから映畫界の先驅者である歸山敎正氏の配下にいた時も最後はちよつと喧嘩腰みたいな事になつて同氏を困らせた，それから土方氏などの例の「指鬘外道」とかいう芝居の時も小生が煽動をして何だかストライキみたような事をやつた，それから法政大學でも單に氣に喰わんという我儘から內田百閒さん並びに多くの敎授諸君にむかつて突然爆彈動議みたいなものを叩きつけて當惑させ，例の法政騷動の口火を切つたのも私です。それに反して，自分で隨意に選ぶ出版業者とは大抵うまく行く。それはうまく行くはずで，何か重要な事を一緒にやろうという時には，私は決して威張つている有名な大きな所とは結托しないで，すつかり私のやることを信用して，私のやり方を御託宣のように考えてくれるところへ持つてゆく。大抵の出版業者は，少し本の數を出すと，かならずその背後に小うるさい小姑がついているものですから，そんな小姑のない所に仕事をやらせる，したがつて必ず駈け出しの，名も何もない人と結托することにな

るわけです（日光書院などもそうだつたわけです）。だから，『我がまま』と『傍若無人』というやつは，わたしに取つては，たとえば潜水夫にとつての潜水甲羅のようなもので，家庭においても世間においても，これによつて同胞人類という水を肌から二寸乃至三寸ばかり隔離して保つのでないと私は何もできません。ここに世間的に言つて私の強みもあると同時に致命的缺陥もあるのではないかと思います。これまで人の前で何べんケツをまくつて啖呵を切つたか，一々おぼえてもいませんので，此の席で一寸恐縮の意を表しておく次第です。最近の野蕒も，年が寄るとあまりケツをまくる機會もないので，不知不識の間にその塡めあわせという意味で道樂になつたのかも知れません。話というものは，やはり落ちるところまで落ちないとケリがつかないものと見えすね。（終）

ラ・フォンテーヌの寓話

——朗讀文學のために——

關口存男

わたしは，實は「朗讀文學」というものに興味を持つていて，なにか大きな聲で多數の聽衆に讀んできかせるような文學が起らなければならないと思つている者ですが，その見地から，最も實行し易いものの一つとして，たとえば佛蘭西古典文學中の有名なラ・フオンテーヌの寓話などを推したいと思います。

ラ・フオンテーヌは，今から約三百年前，即ち十七世紀の人で，例のモリエールやラシーヌなどと同じ頃の文豪，その寓話集は，大部分はイソツプ物語と同じ話ですが，その扱い方が當時の佛人の氣持に合つて，現在に至るまでもモリエールの喜劇，ラシーヌ，コルネイユの悲劇と同程度に人口に膾炙しているだけではなく，學校の教科書中に取入れられる量から云えば殆んどラ・フオンテーヌに勝る文豪は佛蘭西はおろか，佛蘭西以外にも無いでしようから，暗誦用の題材になるという意味では，これこそ本當に文字通り人口に膾炙した作家というべきではないでしようか。

ラ・フオンテーヌの寓話は非常に洗練された詩文から成つていますので，本當に佛人たちが面白がるように面白く味わうには，勿論佛文のまゝでなければ意味を成さないわけで，飜譯などしたところで，何が面白いのか全然わけのわからぬものになつてしまうのは當然です。筋はわかるかも知れませんが，面白味は筋ばかりではなく，むしろ一行，一行，一言一句が面白いのですからそうした面白さは，一字一字直譯などした日には，たとえば「古池や蛙飛び込む水の音」を，「古いお池の中へ

カエルがとび込んで水がドブンと云つた」と變えたようなことになつてしまうでしよう。

以下，三つばかり實例をお目にかけますが，「蛙が飛び込んで水がドブンと云つた」式にならないように，直譯を避け，意に忠にして語には必ずしも忠ならざる表現法を採ることに致します。

蟬　と　蟻

せみせみせみと，蟬さんは
夏ぢゆう歌つていましたが，
さて木枯しが吹き出すと，
食べて行けなくなりました。
どこをどんなに探しても
虫けら一匹おりません。
そこでとうとうお隣の
蟻に無心を云いました。

「蟻さん，まことにすまないが，
この冬越すのに困るから，
お米を一粒かしとくれ。
何としてでも九月には
利息をつけてかえすから，
どうぞたのむ。」と云いました。

すると蟻さん，よし來たと
云つて貸すかと思いの外，

「いつたいあんたは夏のうち
毎日なにしていなすつた。」

「何していたとて……暇だから
歌を歌つていたきりさ……」

「歌を歌つていなすつた?
へーえ，そいつはよかつたね，
ぢやあまあこんどは踊りでも
踊つていなさい，さようなら。」

朗讀文學という見地からは，此の蟬と蟻のような簡單なのも勿論簡單なものに特有な面白さはありますが，それよりももつと注目しなければならないのは，やや複雜な構造を持つた寓話です。即ち，面白おかしく讀み上げるためには，多少大規模な，劇的構造を持つていると，ちよつとした所で非常に効果がちがつてきます。たとえば次に擧げる「お寶と二人の男」などがその一例ですが，落語家と講談師とを兼ねたような調子で物語つてきかせたら，必ず相當の劇的効果を收めることができます。これも，勿論「かえるが池の中へ飛び込んだら池の水がどぶんと云つた」ではありませんから，多少自由な改修はしてあります。

お寶と二人の男

むかしむかしあるところに
ひとりの男がありました。
男はあつたが此の男，

お金はありませんでした。
お金がないから貧乏で，
貧乏だから金がなく，
あるものはただ借金と，
廻らぬ首と，溜め息と，
やけくそばかりでありました。
何もないとは云いながら，
これだけあれば大したもの，
なおそのほかに麻繩の
丈夫なやつがあつたので，
こいつで首をくくろうと，
とある空屋に忍び込み，
その麻繩を天井の
梁にゆわえて首を懸け，
ブランと身體を釣りますと，
釣つたとたんにバリバリツと
梁が折れたと思つたら，
天井裏からドツスンと
大きな箱がおつこちて，
金貨銀貨がバラバラと
部屋一杯に散りました。

「コリヤ首くくらんで好かつたわい，
イヤ，首つつて好かつた……」と，
男あわてて掻きあつめ，
箱を小脇にかい込んで，
風をくらつて逃げ出した

すぐそのあとから持主が
飛び込んできて「アレーツ」と
叫びも敢えず腰がぬけ，
ウーンと悶絶しましたが，
やがてのことに正氣づき，
さては夢ではなかつたか，
やつぱりほんとに盗まれたか！
世間は闇だ！してみると
神も佛もないものか！
いやモウいよいよこうなれば
神も佛も要ることか，
幸い此處に繩がある，
この繩一つでたくさんだ。
今この首をくくらねば
またとくくれる時はない，
くくれる時にくくらねば
だいいち繩に面目ない
何に未練もないけれど
繩にや未練があるんだ……と，
モウこうなると滅茶苦茶で，
その麻繩を天井の
梁にゆわえて首を懸け，
ブランと身體を釣りますと，
こんどは天井も毀れずに
首尾よく首が釣れました。

最後に一言附言して

以て弔詞に代えますが，
いつたいドウモこの人は
溜めるのだけが道樂で，
天井裏のおたからは
役に立たない金でした。
役に立たないお寶が
役立つ男の手に渡り，
要らなくなつた麻繩が
要る人の手に入つたのは，
これも物々交換で，
有無相通じたわけでしよう。

最後に一つ，うんと長いのをお目にかけましよう。ラ・フオンテーヌの原文は別に長くはないのですが，こんどは，ほんの荒筋だけを採つて，細部の經緯を全部日本式に創り直して見ます。實際ラ・フオンテーヌの寓話の或るものは，よく親しんでいるとそういう創作欲を刺戟するのです。だから，飜譯として見られると困るが，ラ・フオンテーヌの寓話を朗讀文學の見地から利用するとこういう事も出來るという一例をお目にかけるわけです。ラ・フオンテーヌを紹介するという目的には多少添わないかも知れませんが，わたしはどうも例の「古いお池の水へ蛙がとび込んだら水がドブンと云つた」が非常に嫌いなので，むしろこうした創作みたいなものの方が，本當の意味に於ては，ずつと本當の紹介になりはしないかと思うわけです。

犬　小（ど）　舎（や）

あるときのこと，臨月（りんげつ）の

お腹をかかえた牝犬が
どこでお産をしようかと，場處を
さがしておりますと，
あるお邸の玄關に
ペンキを塗つたハイカラな
小さな小舍があつたので，
覗いてみると藁もあり
食器もあるのでよろこんで，
「オヤオヤ，これは丁度よい，
わたしも實はかねてから
たとえ七とこ借りをして
七とことも踏みたおしても，
犬と生れて來たからには
一度はこういう犬小舍に
住んでみたいと思つていた，
お產はお產で別として，
お產の後も，コリヤいつそ
此處で住もう……」と云いながら，
ハ，よいとこせと横になり，
庭を眺めて，しみじみと
「夏になつた……」と云いました。

「夏になつたもねえもんだ，
いけ圖々しいスペタめが，
無斷で人の留守中に
のさばり込んで來やがつて！
あんたはいつたいどこの人？」

言われて顏をあげますと，
番犬らしい眞白な
いきなすがたの牝犬が
窓からのぞいておりました。

「あらマア，どうもすみません，
いえナニ，ちよつと此の前で
めまいがしそうになつたので
腰をおろしたばかりです，
臨月なので……」と腰をあげ，
「まことに失禮しました」と
あやまりながらおとなしく
出てゆくすがたがあまりにも
しおらしいので番犬は
つい氣の毒になりまして，
ほんのひとことお愛想に
やさしい言葉をかけたのが
そも過ちの第一歩，
この一言さえなかつたら
おのが棲家を奪われて
路頭に迷うというような
目には遭わずとすんだのです。
いつたい女の過ちは
すべて口から出るもので，
犬の社會も此の點は
人間社會と同樣です。
お愛想にせよ何にせよ，

女同志のひとことは
多くの場合二言で，
その二言は三言ゆえ，
四言になるのは當然で，
五言六言はベラベラと
七言八言に發展し，
「アラもう何時頃でしよう，
どうもお邪魔をしました」と
お辭儀をしてまたひとしきり，
そのひとしきりがサア長い！
とうとう晩になりました。
ところが廣い世間には
晩になつても歸らない
お客がたまにはありますが，
今日のお客はお相憎そういうお客だつたので，
ウンザリしながら夕飯の
仕度にかかると，此のお客
產氣がついたと言いはじめ，
さあモウ大變，さするやら
押さえるやらの大騒ぎ，
そのうちヤツト產みおとした
仔犬がなんと十二匹！
クンクン，ケンケン，キヤンキヤンと，
いやモウ，どえらい騒ぎです。
「マア御安產でおめでとう，
ではモウ早速出て下さい，
はいサヨウナラ」と簡單に，

ほり出すわけにも行きません。
一晩とめてまた一晩，
また一晩とたつうちには，
「すみませんね」と事毎に
言つていたのが言わなくなり，
四日目五日目あたりには，
あんまり子供がうるさいので，
ひとつは親へのあてつけに，
表で寢ようとしかかると，
「こちらに場所がありますよ，
ちらかつていてなんだけど
およろしければどうぞ……」など
どつちが主人かわからない
妙な話になりました。

いつたい女というやつは，
なにか氣にくわなくなると，
決して默つちやおりません。
「わたしは氣にくわない」という
示威をはつきり致します。
ところが示威と解決は
別問題でありまして，
解決しようと思つたら
示威をやらない方がよく，
示威をやろうと思つたら
解決しない方が好い。
だつてそういうわけでしよう？

奥さん連中，どうですか！
女は示威がしたいので，
解決したくはないのです。
ほんとに解決したいなら，
餘計なことは云わないで，
今からすぐに出てくれと
ひらき直つてしまえば好い，
酢のこんにやくのとぬかしたら，
仕方はいくらもあるわけで，
たとえば近所の雄犬を
引つぱつてきて，腕づくで，
親子合せて十三匹，
一匹一匹順々に
つまんで出せば好いわけです。
ところがそうはしたくない，
なぜそうしたくないのでしよう？
それは卽ち，そうすると
事件が「解決」するからで，
女は事件の「解決」を
望むのではなく，あべこべに
とにかくなるべく厄介に
こみ入ることを望みます。
望むわけでもなかろうが，
結果を見るとチヨツトまあ
そういう形になるのです。
こうなるとまあ要するに
つまりは趣味の問題で，

批評はできないわけですが，
しかし皆さん，どうでしよう，
御婦人趣味というやつは
隨分しつこい，ややこしい，
うるさい趣味ぢやないですか！

要するにです，此の牝犬
なすべきことは何一つ
爲さないでいて，その代り，
向う三軒兩隣，
背中合せの犬にまで，
「まあ聽いてくれ腹が立つ，
こういうわけだ」と居直つて，
さながら當の本人に
直接談判するように，
とにかくえらい鼻息で
饒舌つて廻つたものですから，
こんどは相手が承知せず，
そういう風に云われては
わたしの立場がなくなる，と，
これまた示威を開始して，
向う三軒兩隣，
背中合せの犬どもに
ある事ない事つきまぜて
此處を先渡と逆宣傳，
するとこういういざこざに
必ず一役買いたがる

何とかさんが飛んで出て
あつちやこつちを搔き廻し，
いよいよ以て問題を
紛糾惡化せしめるなど，
いろいろ事件が派生して
結局どつちが惡いのか
わけのわからぬ事になり，
仲裁役をたのまれた
年寄犬もあたまを搔き，
「そうですなあ……」と云つたまま
苦笑いしていましたが，
そのうち遂に或日のこと，
本人同志が衝突し，
「家を出てくれ」，「いや出ない」，
「いや出ろ」などということに
なつて來たので仲裁役，

「双方ともに言い分が
おありになるからコリヤちよつと
そう簡單には裁けぬが，
いずれにしても或點で，
妥協をしてはどうですか。
あなたの方も大勢で
割り込んでいる立場ゆえ，
なんと理窟をおつしやつても，
喧嘩となれば分がわるい，
いますぐにとは云わないが，

なるたけはやく立ちのいて，
お禮のひとつもした方が，
人のところにいつまでも
厄介かけているよりは
氣持ちが好いぢやないですか。
しかしあなたもあなたです，
せつかく今日まで親切に
面倒をみておきながら，
今さら急にばたばたと
追い出したのでは，これまでの
好意がすつかり水の泡，
それに氣持もわるかろう。
ながくと云はぬ，マアせめて
仔犬が立派にそだつまで
氣いよく置いてあげなさい。
犬の子だからわけはない，
三月もたてば一人前，
そうなりやわたしが立會つて，
みんなの前で出てもらう。
どうです，異議がありますか？
異議がなければ大體まあ
そういうことに決めましよう。」

「いやもう出てくれさえすれば
文句はない」と云うわけで，
そういうことに決めました。

けれども，なにしろ犬の仔が
十二匹いて騒ぐので
小舎の中にはいたたまらず，
あつちやこつちへ避難して
仔犬が大きくそだつのを
しばらく待つておりますと，
仔犬は立派にそだつたが，
出て行く氣配は見えません。
そこでいよいよ口利きの
年寄犬を先に立て，
向う三軒兩隣，
背中合せの犬どもを
總動員して出かけたら，
向うはなにしろ十三匹，
ちよつとこちらの二倍です。
追いだすどころの騒ぎぢやない，
逆にこつちが追い出され，
尻尾をまいて總退却，
騒ぎが一應しずまると，
小舎の中では親犬が，
「ああ邪魔くさい，此の邊は
ずいぶんうるさい近所だこと。
へ，よいとこせ」と横になり，
庭をながめてしみじみと
「秋になつた……」と云いました。

（芸苑　第四巻・第一号　昭和二十二年一月号掲載）

ラ・フォンテーヌ翻案

關口存男

驢馬を賣りに行く話

昔々ある所に
祖父と孫とがありました。
ある時ロバを賣るために
町へでかけて行きました。
賣り物ですから，なんとかコウ
元氣な所を見せようッてんで
歩かせないで，四足を
一つにまとめて縛り上げ，
逆さに釣して棒に掛け，
ワッショイ，ワッショイ，ワッショイ，ワッショイと
擔いで家を出ましたが，
おどろいたのは村人ども，
『おいおい，氣でも狂つたのか，
　どうするつもりだ，川へでも
　捨てに行くのか，殺すのか?』
『イヤイヤ別に殺しはせぬ，
　川へも捨てるわけじやない，
　町まで賣りに行くところだ』
『賣りに行くのにおまえさん，
　せつかく足のあるものを

かつぐと云う手はないでしよう。
あんた方にはウッカリと
リヤカーなんか貸せないね。
ゴム輪を外して其の傳で
ワッショイ，ワッショイ，ワッショイと
擔がれたんぢや叶わねえよ！
車にひずみが來るからねエ！』
言われて見れば爺さんも
成る程そうだと氣がついた。
そこで一息入れたのち
縄をほどいて其の驢馬を
二人で追つて行きますと，
やがて途中で行き合つた
すこぶる性の悪そうな
どこかの婆アが言いました。
『ヤレヤレ，マアマア，ホントになあ……
長生きするといろいろと
變つたお方に逢いますわな。
よくマアこんなにお目出度い
お方がそろツたものぢや喃。
せつかく驢馬を連れながら，
乘りもしないでノコノコと
後からついて行きなさる！
あきれたもんぢや。御らんなさい。
後からバスがやつて來た。
どうです！何ならあのバスの
うしろに附いて走つたら？

デーと走つてごらんなさい！
なかなか骨が折れますよ。
そうして向うへ行きついたら，
車掌にお錢を拂うんだね。
なんだか一向わけのわからんような
顏をしていなさるが，
それはつまり物のたとえなんだよ。
お二人さんで其の驢馬の
うしろについてノコノコと
歩いて行つてその上に
おまけに餌まで食わせてやるのと
おんなじこつちや』
と此の婆さん
言いたい放題言つたのち，
『ハイさようなら』とお辭儀して
横丁へ曲つてしまいました。

斯う云う風に言われると
なるほどそうに違いない。
『ではおまえでも乘るんだな』と
爺さん孫をロバに乘せ
自分は轡を手に取つて
しばらく路を行きますと
野良に出ていた百姓が
聞こえよがしに獨りごと。
『ショのねえ野郎だ，あの餓鬼アは！
どけえ行くだが知んねえが，

大きなくせしてヌーヌーと
手前ばかりが樂をして
ヨボヨボ爺を歩かせて
おまけに轡を取らせるたア
アンちゆう仕様のねえ餓鬼だ!
いつたい學校の先生は
ああ云う事を教えるだか?
それともああ云う事がハア
近頃流行りのデモクラだか?』
こう云う風に云われては
子供心に恥かしく
乘つてをれなくなりまして,
『爺ちやん,僕は歩くよ』と
とうとう泣きべそかき出して
孫は驢馬から降りました。
『誰が乘ろうと同じだのに,
うるせえ事をぬかしやがる,
ヨシ,そんならわしが乘る!』

こんどは爺いが乘つかつて
行こうとするとうしろから
これまた何處かの爺さんが,
追つついて來て,少年の
頭をやさしく撫でながら,
『お孫さんか?』とききました,
『ええそうです』と云いますと。
『可哀相に!』と此の爺さん,

二人をジロジロ見くらべて
時々溜息つきながら,
ポツリポツリと何だかコウ
氣持の惡い,アイマイな,
おかしな事を申します。
ハツキリ云つてくれないから
詳しいことはわからんが,
要するにマア,誰だつて
孫ほど可愛いものはなく,
たとえ世間に笑われても
孫には樂をさせようと
考えるのが人情だ,
それにあんたの爺さんは
自分がロバに乘つかつて
孫をしよぼしよぼ歩かして
涼しい顏をしてござる,
あきれたもんぢや…… とまあ大体
そう云う意味のことらしい。
だんだん相手の云う意味が
わかつて來ると爺さんは
乘つておれなくなりまして,
黙つてロバから降りました。
すると相手の爺さんは,
『エヘヘ』と笑つて『こりやどうも,
惡い事を言つてすまなんだ,
マアマア乘つてござらんしよ,
エッヘッヘッヘ……』と云いながら,

どんどん行つてしまいます。
後に殘つた爺さんと
孫は途方に暮れました。
サア，こうなると後はもう
二人で乘るしか仕様がない。
それでは二人で乘ろうかと，
二人で乘つてみましたが，
乘つたとたんに氣がつくと，
すぐ眼の前の路ばたに，
青年會の若い衆が
大勢詰めておりまして，
なんだか馬鹿に叮嚀に
ビラを一枚呉れました。
見ると『動物愛護デー，
農村漁村の皆様方，
牛馬を愛護致しましょう！』

書いてあるから仕様がない，
あわてて驢馬を降りました。

サアモウ，いよいよこうなると
何が何だかわからない。
流石に気の好い爺さんも
到頭怒り出しちやつた。
『默つて聞いてりや方図もない
勝手な事をぬかしやがる！
ナナナナナナナ何だとバカヤロウ共めが！

爺が乘るのも違つてる，
孫が乘るのも宜しくない，
二人で乘るのは猛不可ん？
乘らずに歩けば馬鹿野郎，
擔げばなおさら間抜けだと？
それじゃあ一體どうするのが
本當なんだバカヤロウ共め！
驢馬と孫とが此の爺に
おぶされとでもいうわけか，
それとも孫に此の爺と
驢馬とが乘つかるわけなのか？
それとも子供を縄でつるして
爺とロバとが擔ぐのか？
それとも爺をブラさげて
孫と驢馬とが擔ぐのか？
乘つかりもせず擔ぎもせず，
歩きもしないで歩かれるかバカヤロウ！

サアモウ何とでもぬかせ！
云いたいことを言わせてやる！
わしの方でも其の代り
やりたいことをやるきりだ。
わしに氣兼ねをさせたけりや
世間もわしに氣兼ねしろ，
指圖をするのは勝手だが，
ついでに尻も拭いとくれ。
尻まで拭けぬと云うのなら，
指圖もしないでおいとくれ！

語學をやる覺悟

關口存男

△本当に語學を物にしようと思つたら，或種の悲壯な決心を固めなくつちやあ到底駄目ですね。まづ友達と絶交する，その次には嬶アの横つ面を張り飛ばす，その次には書齋の扉に鍵をかける。書齋の無い人は，心の扉に鍵を掛ける。その方が徹底します。

△意地が汚くなくつては駄目です。慾張つてゐなければ駄目です。うんと功利的でなければ。猶太人が金をためるやうに。なるべく執念深く，しつこく，うるさく，厭く，諦め悪く，非常識に，狂じみて，滅茶苦茶に，がつがつと，居候が飯を食ふやうに——兎に角しつこく，しつこく，しつこく。

△あつさりした氣持を持つた亡國的日本人なら其の邊にいくらだつて轉がつてゐます。併しそんなのは何人ゐたつて仕樣がない。ちつと『しつこい』のがゐなければ。挺でも動かないのが。諦めの悪いのが。往生際の悪いのが。がつがつした下品なのが。

△斯う云ふ事をいふと，頭つから反感を持つ人があるかも知れません。よろしい，反感をお持ちなさい，但し學問はおやめなさい。殊に語學は。(語學だけではないでせう?)

△たとへば，子供が御飯をたべるのを見てゐて御覽なさい。傾向が二つあります。或種の子供は，好いおかずだけ先に喰べてしまつて，あとをお茶漬にして好い加減にすましてしまひます。ところが，十人に一人位は，好いお菜だけ窃と横へ取つておいて，まづ不味い方のおかずから喰べ始めるのがゐる。

——斯う云ふ風なのは，それを側で見てゐると，心事が陋劣で，乞食のやうで，とても正視できない。ところが，かういふ風なのが尊いのです。學者になるメンタルテストだつたら，私は此の方を採用したいと思ひますね。學者ばかりとは限りません。

△意地は汚いほど宜しい，諦めは悪いほど結構，凝り性で，業慾で，因業で，頑愚で，意地つ張りで，人に負けるのが大嫌ひで，野心家で，下品で，交際ひ悪くて，可愛げがなくて，『こんな奴と同居したら嫌面白くなからう』と云つたやうな性格……私はそんなのを尊びます。かう云ふ一面を持たうと欲しない人は，本當に勉强はよしたが好い。殊に語學は。殊にドイツ語は。

△勿論人に好かれない事は覺悟の前でなければなりませんよ。人に好かれてどうなるものですか。人にだけは好かれない方がよろしい。そんな量見だけは決して起こす可からずです。餘計なことですからね，『人に好かれる』なんて，人に好かれるやうな暇があつたら，その暇にしなければならない事はいくらでもあります。

△今日の社會は(今日の社會には限りませんが)決して價値ある個人を欲してはゐません。だから，社會の欲する無價値な人間になるか，社會の欲せざる價値ある人間になるか，問題は此處です。

世間はどんな人間を好むか?『交際ひ好い』人間を好みます。つまり，一緒にお茶でも飲める樣な人間をですね。一緒にお茶が飲めなくつちや仕樣がありませんからねえ!

ところで扨て，世間樣と御一緒にお茶を飲むためには，やはり世間樣と御一緒にお茶を飲むやうな人間である事が必要です。さうでない人間は何處か斯う煙たくて，しんみりしませんからねえ。頭の中にお茶話以上の考へを持つてゐる人間な

んてのは，どう見ても人に好かれる方の型ではありません。努力しつつある人間なんてのは，まつたく興ざめですからね。座が白けますからね。

△世間はそんなものです。さういふ世間の真只中にあつて，殊に獨逸語でも一つ叩き上げようと云ふ時には，実際一つの悲壯なる決心が必要です。

獨逸語も，今日では，もはや數年前の或種の過渡期を通過して，今はもう殆んど英語と同じほど一般的になつてきました。ちよつと嚙つたからと云つて，それでもう一かど獨逸語を心得たやうな顏の出來る時代は，もう一寸過ぎ去つたと云つても好いのではありますまいか。

『俺は勿論語學者なんぞに成らうとは夢にも思はない，俺にはもつと高尙な對象がある，その單なる手段として語學をやるのだ』——そんなやり方では到底駄目です。

△既に先進國を前に控へた新興國の新興時代は，すべての人が語學者でなければならない。——過去を見ればわかります，漢文が出來なくて支那印度の精神文化を受け入れ得た學者があつたでせうか。

△要するに，そんな言ひ草は通用しません。『ちよつとやつて見る』とか，『手段としてやる』なんてやり方はありません。『やる』以上は『やる』。やるに二つはありません。

△凡そ，時間の上から考へても，エネルギーの損失の上から考へても，また自己教養の立場から考へても，さう大して深入りするつもりでも無い物を一寸した興味でやつて見るほど馬鹿馬鹿しい努力はありません。一寸やつて見るための對象としては，獨逸語なぞは恐らく最も不適當なものでせう。

△乃木將軍の失敗談を御存じですか？ 彼は旅順を强襲によつて一息に乘取らうとして失敗しました。澤山の人命を犧牲にしたのち，やつと『打算と耐忍と根本的な態度』とによつて，

ぢりぢりと迫らなければ駄目だといふ所に氣がついたのでした。

獨逸語は持久戰です。まづ腰をおろして考へませう。中腰の考へと，胡坐を組んだ上の考へとでは，考へがおのづから違つて來ます。坑道を掘つて敵塞の『下』に迫りませう。大岩層に逢着したら，コツコツと，一片また一片と岩を崩して行きませう。相手は岩ですよ。敵ではありません。敵だの勝利だのと云つたやうな事はもはや當分の間問題ではありません。それはもはや戰爭ですらもありません。仕事です。涯しなき勞作です。無限の穿掘です。試練です。凝視です。根くらべです。

目標は無限の彼方にあります。そして鼻の先は岩です。そして岩の背後は岩です。そのまた背後も岩です。岩，岩，岩，岩，當分は岩です。

掘りませう！

獨逸語大講座月報（第一）（昭和六年六月「獨逸語大講座」（全六巻）の第二巻附録）

くそ勉強に就て

關口存男

ただモウとにかく机にかじりついて，遮二無二，馬車馬のように，人に笑われようが，頭の好い人たちにどう批評されようが，そんな事には一切お構いなく，めくら滅法に，とにかく勉強勉強また勉強，「あの男少し頭がどうかしてやしないか」と云われるほど勉強に凝つてしまつて，友達には少々敬遠され，親兄弟にはトツクの昔に見離され，學校の先生には苦笑とも微笑ともつかぬ或種の非常に特殊な表情を以て注目され，役人とか，警官とか，新聞記者とか，犬とか，自動車とか云うような現實界の不可抗力からは，時々剣つくを喰つたり，どなられたり，尋問されたり，吠えつかれたり，突きとばされたりしながら，それでも感心に乘るべき電車にはチヤンと乘つて，家から學校へ，學校から家へと，マア大體無事にたどり着き，たとえば決して列車のホームを間違えたために月世界や火星まで行つてしまつて，着いてからはじめて氣がついた……なんて失敗はしたことがないと云う……(これが實に大變な努力なんで，あらゆる夢遊病的行住坐臥にもかかわらず，こういう些細なところにも如何に懸命の努力が拂われているかという所にも注目して頂かないと，私が今から紹介しようとする或種の特種な市民タイプは，神にも佛にも見離された上，おまけに同胞人類にまでのけ者にされる危險があるのです!) ……

エート，文章が暴走しちやつて，どういう副文章で書き起したのか思い出せなくなつちやつたが，とにかくマア，そういう型の人間があるということを云おうとしたのです。稱してクソ勉強と云います。あんまり體裁の好い型じやありません。どつ

ちかと云うと滑稽な型です。滑稽と云つても，落語の種になるような滑稽ではなくて，「苦笑」という型の滑稽ですな。つまり，おヘソが宿換えしたり，お腹の皮がよじれたりはしない。むしろ「顔がゆがむ」と云つた方が好いかも知れない。顔はたしかにゆがみます。普通よく「顔まけ」ということを云いますがこれも或いは此の型の滑稽に面した場合の苦しい微妙なおかしさのことを云うのでしようか？顔にも勝ち負けがあるということには今はじめて氣がついたが，なるほどそう云えば人間社會という所は，何處へ行つても，顔と顔とが張り合つてむしろ顔ばかりあつてそのうしろにはなんにもないことすらあります。あると反つていけないらしい。とにかく，つぶれるのも顔，立てなくちやならんのも顔，賣いのも顔，買るのも顔，かかわるのも顔であつてみれば，「負ける」ということは實際考えられますね。甘い氣持で相手を見くびつていると，實際がこつちの思つたような月並な相手なら好いが，勝とうと思つてわざわざ内緒で準備したり訓練したりして來た相手であつた場合は忽ち負けることがあるように，顔というやつも，月並な世界で月並に張り合つている月並な關係においてのみ持ちこたえられるので，この「月並み」というルールを守らない相手に相對するというと，たちまちどつちの方へ向けたらいいかわからなくなつて，女の人だと大抵下へ伏せる，男だと下と横との中間，即ち兩方から約四十五度ぐらいのところへ伏せて，それでもまだ恰好がつかないと右手を頤あるいは頬の下の所へ持つて行く。女の人だと，肩と頸とを一ミリか二ミリばかり乳房の方に向つて收縮させます。——此の表情は，あきらかに「私とあなたとは，顔は兩方とも普通の人間の顔をしているから，實は今の今まで安心してつき合つていたのだが，あなたの顔のうしろにそういう正體がかくれていたとすると，これはもはや今までのように無邪氣にあなたと一緒に顔をならべているわけに行きませんか

ら，さしずめ先ず方向を變えることによつて，戰列を脱落し，戰闘不能に陷つたことの表示と致します」という意味で，つまり白旗と同じ，要するに「負けた」のです。

ひどく厄介な詮索になつてしまいましたが，これから實はクソ勉强の讃美を一席やろうと思うので，前座として先ず惡口を云つたわけです。

社會は月並み——汝は月並みなところで引つこむべからず！

泥坊とか詐欺とか云つたような，いわゆる「わるいこと」をしようと思つてかかつている人間仲間に云わせると，社會というやつは，とにかく隙だらけなんだそうです。そうでしよう，まさか人を見れば泥坊と思つて朝から晩まで用心して歩いている人間は千人に一人といない。九百九十九人までは，人を見ればやはり人だと思つて歩いている。大事なものは抽斗に入れて錠をかけるが，机ごと持つて行く手があるという所へまでは氣がつかない。要するに，犯罪者から見れば，世間というやつは甘いものです。月並みの一段下を行く人殺しや泥坊にはどうせかないません。殺されてから後になつて急にさわぎ出すぐらいなもので，殺されない方法という奴は絶對にないらしい……

泥坊や人殺しばかりではありません。金を溜めて出世する，いわゆるガツチリした男に云わせても同じで，世の中というやつは實に隙だらけで甘いもんだそうです。もつとも，御自分が隙だらけでお甘い人間は，儲けただけで直ぐ飲んじやつたり，「旦那」と云われて喜んで飲み屋へ引つぱり込んで振舞つたりなんかするから金の溜りようがありませんが，本當に金を溜める男は「旦那」ぐらいでグニヤツとならない。「おれは旦那じやねえんだ，何をこきやがる!!」と思つて掛かつているから，料見が全然ちがいます。普通の人間みたいな顔をしているから普通の人間だろうなどと思つて尻尾を振りながら附いて行くと，何處

へも寄らないで，市電の停留場でさよならと來る。一緒に乘つたつてダメです。切符を二枚買わされるぐらいなもんですからな。こんなのが社長になつたら大變，——そういう會社に使われている社員らしいのがよくおでん屋で飲んで社長の惡口を云つているのに出くわしますが，私は隣で聞いていて，「君がたは甘いね……」と云つてやりたくなる……

これを『頭でやる仕事』の世界へ置き移して考えてみても，道般の關係は全然同じで，その事をこれから書いて見たいと思うのです。

人が普通やりそうなことを普通にやつて，そうやつているうちに何かの間違いで成功しよう，という行き方……これも一つの行き方であることは，小生充分にみとめます。ただ，この行き方で行くと，とても競爭者が多くて，ちよつとその邊を見渡しただけでもあんまり大勢ゴロゴロいるからイヤになつてしまいます。日本だけでもチヨツト八千萬人ばかりの候補者があつたんじやあ，こりやあチヨツト當選の見込みがありませんな。よほど自信でもあれば格別，僕なんかとてもそんな自信はないです。おそらくは，そういう行き方でやつている人は，とても自信があるのでしよう。天才型というのはおそらくそういう人達のことを云うのだろうと思います。八千萬人の天才を擁する日本……日本もまた萬歳なるかな，ですな。

氣の弱い普通の人間は，卽ち凡才は，そういう風には考えないでしよう。凡才はどうせ何かこうウント凡才らしいことを考えます。自分に自信がないから，世間をそう甘くは見ないのです。そして，「おれは世間を甘くは見ないぞ！」という決意を以て世間に相對峙すると，どうでしよう，ここに世間という奴の本質があるのじやないかと思うのですが，「ナーンダ，世間てものはこんなにも甘いものか！」というところに忽ち氣がつくのです。

正業を捨てて犯罪者の仲間に身を投じた男が振りかえつて此の月並みの正業の世の中を打ち眺めた瞬間,——人間をやめて單なる財產集積機として居直つた男（たとえば貫一）が腕によりをかけて，よりの掛からない腕だらけの此の月並み社會を打ち眺めた瞬間,——通り一ぺんの勉强家であることをやめて，一萬人に一人もない「クソ勉强家」であるべく決心した男が，そのへんの普通の勉强家ばかり寄り合つた毒にも藥にもならない學校とか何とかいうところを打ち眺めた瞬間,——この三つの瞬間には，期せずして共通なものがあります。それはとりもなおさず「世間というやつは，實に甘い，到る處隙だらけだ。」という此の認識です。

もつとも，人殺しや泥坊の場合にあつては，甘いのはほんの一時で，あとになると可成りからいことも起つてきます。ところが，金を溜めるのと勉强を溜めるのとは，溜めては不可んと云う法律がまだ出來てないせいですか，いつまで溜めても新聞も騒がず警察も動かない。お話にならないほど甘いというのはつまり此の點です。

ただ人殺しには滑稽な一面は附き纏わないが，ガツチリ屋というやつには，必ず多少滑稽な一面が附きまといます。これだけが缺陷と云えば缺陷ですな。しかし，これはやむを得ません。八千萬人の競爭者と同條件で肩を並べても凹たれないという自信たつぷりな八千萬人の天才から見れば，ガツチリ屋とか貧勉强家とかいつたような地下にもぐるタイプは，もちろん滑稽千萬な代物であるに相違ありませんからな。とにかく，天才には何と云つたつてかないません。八千萬人もいらツしやると，なおかなわない。まあ，默つて笑われておくことですな。

そもそも人間が手足を勞して成し遂げる仕事，即ちいわゆる筋肉勞働というやつには，おのずから限度というものがあります。どんな精力家だつて，まさか人の三倍働いて三倍のお給金

世間は，筋肉勞働に對しては實にせちがらい——精神勞働に對しては實に低能と云つていいほどお甘い。

を貰うことは絶對に不可能です。また，三倍働かなければ三倍の給金が貰えないというところに致命的なせちがらさがあります。ところが，精神勞働の方はそうではない。たとえば技術者や學者や藝人などになると，人よりもほんの少し傑れているというだけで人の三倍も四倍もの收入があることになる。

それはマア話があんまりロコツだが，實際のところそうなんです。つまり世間というやつは，學問とか腦力とか藝能とか技術とか經驗とか識見とか肚とか信用とか名望とか，とにかくそう云つた精神的な即人格的存在に對しては，だいいち計量も單位もなければ標準もないものだから，實に何と云つて好いかお話にもならないほどチヤンリンなんです。チヤンリンというのは親馬鹿チヤンリンの後半部を切り離した新造語ですが，單に「おめでたい」と云つたのではとても云い足りないから「チヤンリン」とでも云うより仕方がありません。

乘ずるべき隙は此處にあるのです！否，乘ずるべき隙は此處にしかないと云つた方が好いでしよう。

ひどく實利的な見地だな……と云つて，そもそもこうしたゲスな考え方をすることに對して反撥するお上品な人も相當多いと思いますから，此の際ついでにハツキリ申し上げておきますが，そもそも人生哲學なるものは，たとえば生理學教室と似たところがあります。交接と姙娠の生理を說こうという時に，壁に大きく生殖器の圖を揭げるのはあたりまえじやありませんか。これをワイセツだという人があるとしたら，その人の方がむしろワイセツなのではないでしようか？生殖器があつて初めて人生のあらゆる美しい上層建築がその上に盛り上がる——實利的見地と生存競爭に勝ちぬく心構え，即ち健全なたくましい

利己主義があつて初めて，健全なたくましい道義の世界がその上に築き上げられるのです。(お上品なヒヨロヒヨロした道義の世界はどんな物の上に築き上げられるか，私は存じません。)—その道ではありません！たとえば美しい男女関係を基礎として其の上に生殖器が築き上げられたり，高遠なる理想を基礎として其の上に健全なる實利的見地が乘つかたりするなんてことは私には考えられない。

要するに，乘ずるべき隙は此處にあります！世間は，筋肉勞働というやつに對してはとてもせちがらくて，5に対しては5，6に對しては6を酬いるきりです。うつかりすると6に對して5で酬いようとすらします。ところが，精神勞働に對しては規準も何もない。凡庸だと見るとハナもひつかけないが，凡庸を少し抜いていると見るとモウすつかり天才扱いにする。數學的に表現すると，たとえば65點か66點ぐらいのところまでは0點と同じ扱いをするが，70點となると，もう80點90點100點と殆んど同じに見るのです。つまり入學試驗と同じことです。だから，たとえば技術者か學者になつたとすると，69點の頭の男は落第で一家心中，それより1點上の70點の男が斯界の權威として威張れる……ということが生じるわけです。すると，その1點か2點の差をどうして稼ぐか，ということが切し迫つた大問題になつて來ますが，これが私の此の記事の中心眼目なんですから，まあ焦らずにゆつくり話を聞いて下さい。

要するに，更に申しますが，乘ずる可き隙は此處にあるのです。筋肉勞働の側から見ると，社會の提供する可能性は，たとえば職業紹介所の帳簿に載つているだけの數しかない。それ以外はパンパンになるぐらいのものでしよう。ところが，頭でやる仕事となると，誰もコントロールしていないから（またコントロール出來るものじやありませんから）何處を見ても無限の可能性が提供されています。無限の可能性といえば，しばらく

前までアメリカ大陸のことを歐洲人は Das Land der unendlichen Möglichkeiten (無限の可能性の國) と呼んでいました。今ではモウだいぶん押しつまつて，必ずしも無限ではないかも知れませんがとにかくアメリカという國は，天然資源にも惠まれ，その割に住んでいる人間は少なく，社會層は動いており，多少とも頭の働く人間なら，どこへでも進出でき，あてずつぽうに三つの扉をノツクすればその一つは必らず開かれる……といつたような國だつたから，そう呼ばれていたわけです。今ではもう，世界中どこへ行つたつて，無限の進出可能性を提供している國なんてのは無いでしよう。もしあるとすれば，それは「精神勞働の世界」です，「頭の國」です，「學術の分野」です，「一藝一能の社會」です。

アメリカは遠い。しかもモウそろそろ無限の可能性はおしまいです。——「一藝一能の國」は近い。あなたの鼻の先にぶら下がつている。しかもその無限の可能性は，だらしなく開放されて，謂わば此の世智がらい世の中の只一つの盲點を成しています。此の盲點を狙わないという手はないでしよう。どうです！

結論：何でもとにかく，はたの者が苦笑するような行き方をせよ！學術の世界においては，それは即ちクソ勉强である。

では，此の盲點をどういう風に狙つたら好いか？

普通で行つたのでは駄目だということは，すでに先程云つた，69點だと社會の下積みになつて一家心中，70點だと斯界の權威者というハツキリした一線が劃されていると云う事實からも直ぐわかると思います。ところが，幸いなことには，あなたの競爭者の大部分は，みんな「普通で」行こうと思つている人ばかりで，特別で行こうなんて思つている人は極く少數です。思つている人が極く少數なところへ持つてきて，實際やる人に至つては一萬人に一人あるかなしですから，此處にも亦第二の乘ずべき隙があります。

社會は甘い，と云つたのはつまりこういうところなんです。これを舐めないという手はない。どうです！

特別で行く，というのは，たとえば，勉强の場合で云えば，要するにクソ勉强の道をえらぶことです。何でもとにかく人が見て苦笑するようなことを平然として，ケツをまくつてやつてのけるのです。一度や二度やつてのけたつて駄目ですが，十年つづけてやつてごらんなさい。はたの人は，はじめの中は苦笑しているが，そのうちには，やがて笑えなくなる時がやつて來る。笑えなくなつた時に，ちよつと其の顏をこちらから拜見すると，失禮な云い方だが，實におもしろい。此のおもしろさだけのためにでもチヨツト十年間茶目いたずらにやつて見るだけの値打ちは確かにあります。苦笑がすつかり解消してしまつた後は，見直されたり，お世辭を云われたり，尊敬されたりで，また例のくだらない世間的なてんやわんやに移行するだけの話で，むしろ馬鹿々々しいことになつてしまいますが，苦笑がスカを喰つて宙に浮いた瞬間，すなわち所謂る「笑えなくなつた瞬間」というやつだけは實に溜飲が下がるほど面白い。人間として生れてきた以上，これだけは是非一度自分も滿喫し他人にも滿喫させてやりたいものですな……

以上がクソ勉强の序論，あるいは初級篇です。次は中級篇で，クソ勉强の實施法，並びに「頭がよくなる方法」を說きます。頭の外部にパーマをかけるのは，これは美容院の方へ行つて頂かなくちやなりませんが，頭の中にパーマを掛けるのはどうしても次の方法に依るの外はないのです。

實勉强によつて冴えた頭が本當の頭である。

これからの話は，なるべく直接間接に語學に關係して述べることにします。但し「なるべく」です。嚴密に語學だけに關してではありません。

覺悟と決意とを以て坐れ！
（毎日が試驗の前夜）

勉强と戰爭とは甚だ相似たものがあります。昔は，國家總力戰なんてものはなかつた。今は勝つためには凡ゆるものを動員します。科學も底の底まで動員するし，經濟も底の底まではたく，思想も女の貞操（スパイなど）も，苟しくも利用價値のあるものは全部動員します。思想と女の貞操だけは遠慮して動員しなかつたなんて國があつたら，その國は，思想と女の貞操を動員した國には覿面に負けるというのだから，おそろしい世の中です。

ところが，勉學の世界となると，このおそろしい現實の可能性に對してハツキリした認識を以て臨み，最後の最もエゲツない手段に訴えても人に勝つという心構えでもつて自分の心境をスツキリと割り切つてしまうだけの冴えた頭を持つている人が存外すくない。すくないだけに，虛を衝いて進出するには絕好のチヤンスです。

まず，早い話が，毎日毎晩を學年試驗か入學試驗の前夜だと思つて勉强することです。はたの人々にはずいぶん迷惑も掛かることと思いますが，その點はモウ，多少心を鬼にするしかありません。あたりまえの事をやつていたんじやあ，あたりまえにしかならない，おれは特別で行くんだから，長くとは云わない，マア十年辛抱して見ていてくれ，……と，マアこういう風に云つて當分我慢してもらうんですな。

ボンヤリと机に向つた一時間と，覺悟と決意を以て坐つた一時間とは大變な相違です。一年に統計してごらんなさい，五年に統計してごらんなさい，いや，十年に統計してごらんなさい！十年後には，凡才と天才の違いとしてその差がはつきりと現われます。

根氣がつづかない，という人があるかも知れません。そもそも人間の本性から考えて，そうした，毎晩試驗の前夜と思つて

眼の色かえていきり立つなんて無茶なことが，一週間と續くか……と云う人があるかも知れません。そういう事を云う人に對しては，ハツキリと次のように云うことができます：『それは決意の深さによつて決する問題です。たとえば，あなたのような疑問をお抱きになる方だつたら，おそらく三日とは續きますまい。三日續いたら僕が十萬圓の小切手を切ります。』と。——それに，そもそも，意志薄弱な人間がこれからの日本に一人前に生きて行けると思うのがとんでもない間違いでしよう。現在の狀勢から行けば，末はどうせ一家心中ですから，罪もない妻子を殺したりなんかしないで，若いうちに早く何處か其のへんの枝ぶりの好い松にバンドをゆわえて首を釣つた方が，はたも助かるし本人も助かるでしよう——とにかく意志薄弱という奴だけは困りものです。世に凡そ同情の餘地なき病氣があるとすれば，それは卽ち意志薄弱だと私は云いたい。

しかし勉强は勉强，頭は頭。
（人生の苛酷な現實）

ここで少々不愉快な雜音を入れますよ。そして，この雜音の征服が此の稿の目的とする最後の輝かしい結論に直結して來るのです。

婦人を見て，頭つから考えることは，美人に生れた人と，そうでない人との間に存する，儼然たるハンデイキヤツプです。ほんとに神さまというものがあつたら，こうはならないだろうと思うほど，その殘酷さには心を打たれます。同じことが好い頭と惡い頭との差についても云えます。この方は目に見えないだけに，考えれば考えるほど，問題が根本的で，厄介です。

すると，頭の惡い人間は，いくらクソ勉强をしたつて高が知れている，頭の好い人間が少し勉强するのと，同程度か，あるいはそれより少し下廻つた結果しか得られないのじやないか……という疑問がおこつて來ます。また世の中の大抵の人は現にそうしか思つていないようです。クソ勉强は，つまり頭の惡

い人間が，頭の代用としてやる行き方ではないか？「足りないところを努力でおぎなう」という通り言葉もある通り，クソ勉强というのはつまり，そう云つた意味の代用品ではないか？

大抵の人はどうもそう思つているらしい。だからつまり苦笑するのでしよう。ところが私の云うのはそんな消極的な意味ではありません。クソ勉强は，むしろ頭がよくなるための（一方便ではなくて）唯一の方便であるということを云おうとしているのです。もし紙面の餘裕があつたら，生れながら好い頭なんてものは學問界では上へ行くほど用をなさなくなる，クソ勉强に依つて冴えた頭でなければ本當の頭ではない，という最後の問題にも觸れてみたいと思います（が此の方は紙數の上でどうかな……？）

然し，そうした結論に達する前に，此の「勉强は勉强，頭は頭」で，兩者は全然別物であつて，當面何の關係もない，という苛烈な現實の姿を，モウ少し深く見きわめて頂かないと，私のいわゆる「頭の素質を根本から變える方法」というやつは，なかなか腑におちないだろうと思うのです。

勉强と頭の間には，たとえば寫眞機でいうと，レンズと乾板との間に於けるような關係があります。「記憶力」と一口に云いますが，物を覺えるときに我々の頭がどう働くかということをよく考えて見ますと，覺える瞬間の「注意力」はこれは寫眞で云えばレンズのようなもので，いくら頭のよい人でも，レンズがボンヤリしていたり，ピンボケになつたりしたのでは，ハツキリした寫眞は撮れますまい。それとは反對に，いかに好いレンズを用い，いかにピントをよく合わせても，背後にある乾板が駄目だつたら，これはモウ全然寫眞にならない。卽ちどんなに志を立て，どんな決意を以て机に坐り，每瞬每刻どんなに緊張して書物を睨んだところで，意識の背後に控えた乾板，すなわち「あたま」と俗に云うやつが藥が惡かつたりインチキ乾板

だつたりした日には，勉學の意氣壯なりとは云え，生得の鈍根如何ともすべからず，マア，大した効果は擧りますまい。

つまり，クソ勉强クソ勉强と云つたつて，クソ勉强は結局寫眞で云えばレンズのピントを一生懸命によく合わせるというだけの話ではあるまいか？決意決意と云つたつて，それは結局レンズを取りかえろ，というだけの話ではあるまいか？——いちばん肝心な，うしろの乾板をとりかえる方法が發見されなければ何にもならないのではないか？たとえレンズをどう取り變えたつて，まさかレンズがよくなつたために乾板までよくなるということはないだろう？……

ごもつともです。レンズをいくら取りかえたつて，ピントをどんなに一生懸命に合わせたつて，そんなことによつて背後の乾板に何等かの好い影響を與えることの不可能なことは，たとえば氣溫計の水銀を下げることによつて大氣そのものの氣溫を下げんとする，あるいはガラス板の外部から叱咤激勵することによつてパチンコの玉を思う穴へ入らせようとするのが不可能なのと大體マア同じことです。但し「寫眞機」のレンズと，「寫眞機」の乾板とに關する限りにおいては，ですよ！人間の頭の場合はちがいます！

人間の頭の「意識」というレンズと，その背後に潜んでいる潜在意識という暗室の中の「記憶力」という乾板との間の關係は，這般の模樣が多少ちがつているように思われます。話は多少大きくなるが，だいいち人間がまだ高等動物でなかつた時代，即ち昆蟲とか魚とか，或いはモツト過去に遡つてアメーバであつた時代のことを考えてごらんなさい。最初はレンズに相當する物もなく，乾板に相當するものも勿論なかつた。そのうち，だんだんと發達して，何が最初に出來たかというに，私は，それはまず不完全なレンズと，不完全な乾板であつたと思います。その次に，レンズが段々と完全になり，乾板が段々と精巧の度

を加えるに至つたのは，決して寫眞機の場合に於けるが如く，別に技術者みたいなものが居て（すなわちたとえば神さまとか何とか云つたような者が別に居て）横からレンズを取り替えたり乾板を入れ替えたりしたのではなくて，ただ極く自然の勢で，レンズが乾板に作用し，乾板がレンズに影響し，兩者がお互いに揉み合い苦しみ合い惱み合い曲げ合いいきみ合つた擧句現在のようになつて來たのではないかと思います。

勉强と頭とははたして別物か？

もちろん，そうした進化論が，そのまま個人の五十年六十年の一生涯にあてはまるわけではありません。けれども，「すべては流る」と謂われる此の世の中の一角である以上，比較的固定したかに見える「個人」という生體といえども，「動きつつある何物か」であるという點に於ては，やはり一般進化論の理法に服するはずです。十年たてば世の中もずいぶんと變るように，十年たてば個人も相當「素質」そのものが變るのです。四十五十になつた中老ではもう駄目ですが，二十代三十代の人ならば，十年たてば，鈍才が天才になり，天才が鈍才になるくらいの事は，お茶の子さいさい，朝飯前のことと思つてよろしい。しかもそうした素質の變化が，大抵の場合，成り行きのままに打ちまかされている！これは實におもしろい事實です。

要するに，若い頃の決心如何によつて，人間は，天才にでも凡才にでも，どつちでも好きな方になることができる。その點に關して責任を持つて指導するのが本當は國家の教育なるものの任務なのでしようが，それは單なる理想で，社會の現実としては，そんなことは此處一萬年や二萬年の將來には到底望むべくはない。また，社會や國家がそんなことをして呉れるのを待つていた日には，かなり待ちでがあるでしよう。——此の點は，現在の社會においては，全部「本人自身」の決心に任されているのです。國家はあなたが天才になることに對しては，贊成も

していない，反對もしていないのです。その代り手傳つてもくれません。

頭は勉强によつて冴える

とにかく，敢えて進化論まで引き合いに出すまでもなく，吾人の頭というやつは，決して固定した宿命的なものではなく，長い年月の間には，だんだんと變つて行くものだということは，長い眼を以て自分自身を觀察し，また自分の周圍の人間の生長を見守つていれば，ハツキリわかる現實の事實です。「變つて行くもの」であるなら，意圖を以て之れを「變える」ことも出來るはずです。まさか青のものを赤にしたり，白のものを黑にするということはできないかも知れませんが，鈍いものを鋭くしたり，狹いものを廣くしたり，濁つたものを澄ませたり，沈滯したものを活潑にしたりすることは出來ます。一年や二年では出來なくても五年十年の間には出來ます。

此の『一年や二年では出來なくても，五年十年の間には出來る』という或種の領域に，冴えた眼を凝と向けて物を考えようではありませんか。『點滴石を穿つ』とか『塵も積れば山となる』とか云うことを言いますが，私の云つているのは，そんな事ではありません。これらは單に量のことだけを考えて云つた金言で，塵が百噸つもつたら百噸の山になるなんてことは，別に改めて承わらなくたつて，阿呆にもわかることです。私の云おうとするのは，奇論みたいだが，塵が 99 噸つもつたら，それはやつぱり單に 99 噸の塵にすぎないが，もう 1 噸ふえて 100 噸になると，それはもはや 100 噸の塵でなくて，100 噸の金剛石であるということ……少し譬えが目茶苦茶かもしれませんが，要するにつまり，『量は質を變える』ということ……というよりはむしろ，量は，『或種の大量に達すると』質を變える，ということを云つているのです。

更に申します：『一年や二年では出來ないが，五年十年の間に

は出來る事柄が人生には存在する！』と。——それはどんな事柄か？それは，普通世間で『不可能事』と呼ばれている事柄です。或いはまた之れを『奇蹟』とも申します。兩方とも，名前に僞りはありません。如何となれば，一年や二年では本當に不可能事なんですから。如何となれば，五年十年の後に見ると本當に奇蹟なんですから。

現代に奇蹟なしと云う勿れ。『時』を味方とする者にとつては奇蹟があります。不可能，不可能と云う勿れ。『年月』と共謀して地下を潜行する者の辭書に不可能という項目はありません。

吾人が五十年の生を享けた此の宇宙，此の人生，此の身體，此の頭は，永劫の過去から永劫の未來にかけて，生者必滅，會者定離，萬象流轉，いわゆる『凡ては流る』の理法の下に，時々刻々，その根底から動搖しています。今日の吾人はもはや昨日の吾人ではないのです。明日のあなたはもはや今日のあなたではないでしよう。社會も，人情も，身も，考えも，眞理も，凡てが流れ流れて底止する所を知りません。我々はただその流れに押し流されて行くだけの話です——けれどもです！

けれども——此處に只一つの救濟の道があります——けれども，押し流されて行く者に共通な法則として，巧みにチヤンスをつかみさえすれば，これぞと思う流れに乘ることができます。一たんこれぞと思う流れに乘つてしまえば，あとはモウ自働的に推進されます。推進されまいとしても推進されないではいられないのです。『すべては流る……チヤカホイ……』と鼻唄を歌つてればよいのです。

乘つてからは樂ですが，問題は如何にして乘るかです。泳いでいる人間なら，ヒヨイと身體を變な具合にひねるでしよう。烈風に弄ばれる飛鳥もやはりなんだかそんな變なことをやつています。我々の當面の問題は「我々自身の心」というやつで，此の「心」というやつを，しかも「心」自身が，何の手がかりも

足がかりもない，われ自からの虚空の眞只中において，われ自からの力と「いきみ」と工夫とに依つて，その力自身であり「いきみ」自身であり「工夫」自身であるところの我れみずから其の者を變な具合にグイツとひねる……というのだから，ちよつと聞くと大變な話ですが，事實はとても簡單で，平つたく云えば要するに不退轉の決意を固めよ，というだけの事にすぎません。汝自身の横つ面を張り飛ばして起て，そうしたら大抵の事は出来る！

更に申しましよう：『一年や二年では到底出來ないが，五年十年の後には出來る事柄が人生にはある——ただそれには不退轉の決意が先決問題である』と。それは一たいどんな事柄か？それはたとえばクソ勉强によつて天才になると云つたような事柄です。一年や二年のクソ勉强は……要するにクソ勉强です。鼻持ちがなりません。なぜ鼻持ちがならないか？それは一年や二年だからです。これに反して五年十年の糞勉强は素質を變えます。——一年二年は量を變える，五年十年は「質」を變える。此處です。

最後にもう一度申しましよう：『一年二年では到底出來ないが，五年十年後には出來る事柄が人生には存在する——かるが故に汝自身の横つ面をはりとばして起て！』

記憶と理解の基礎は『關心』

語學はなにしろ量の征服が當面の問題ですから，記憶力の强弱ということが決定的重要性を帶びて來ます。理解力と感受性と創意力がその次に問題になつて來るのですが，記憶力のない理解力や感受性は，語學に於ては（語學だけではないかも知れません）大した効果は擧げ得ません。——そこで，糞勉强がどうして頭の素質を變えるかという典型的な一例として，まず記憶力の增進がどういう具合に行われるかということを考えてみ

ましよう。

よく物事をハツキリ考えない人は，人間の腦の中に「記憶力」という特殊な獨立機能があつて，それが人によつて强かつたり弱かつたり，時と場合によつて鋭どかつたり鈍かつたり，事柄によつて得意だつたり下手だつたりするように思つています。むろん，結果としてはそういう事になるかも知れないけれども，其處には，一段奥に潜む根本的事實が見逃がされている：即ち「關心」という事實がです。

手っ取り早い話が，ドイツ語の小説か何か讀んでいて，自分はどんな種類の單語はすぐその場で飛びつくように覺えてしまうか，どんな種類の語は何べん同じ語を辭書で引いてもまた直ぐ忘れてしまうか，ということに注目してごらんになると，おかしいほどよくわかります。とにかく，覺える單語は一度で覺えるが，覺えない單語は何べん聞いても忘れます。これは何故でしよう？偶然でしようか？單語そのものに，頭の中でよく掛かつてとまつてしまう，いわば鉤の手のようなものの出ている單語と，ツルツル滑つて出てしまう圓い單語との別があるのでしようか？まさか！——原因はあなたの頭にあるのです。關心のある單語は飛びつくようにおぼえる，どうでも好いと思つた單語は，單語の方でもよく知つていて，すぐ出て往つてしまうのです。問題は乾板です。

初級の教室で教えていると，hinstellen は「それへ・置く」だと云つても，誰も感興が湧かないと見えて，ただ漠然とした眼つきで此のスツキリしない艶文字を見送つている。關心がないらしい。ところがその次に Bahnhof（驛）というのが出て來た。これは普通の重要單語だ，と思つたかしら，あちこちの鉛筆が一齊にサツと動く。

中級或いは高級の教室。zum Stehen bringen は「立ちどまらせる」だと云つても，大抵の人は「何云つてやがる，立ちど

まらせたけりやァ勝手に立ちどまらせるがいい……」と云つたような顔をしている。その次に Dauerwelle というのが出て來た。『これがいわゆるパーマ，卽ち permanent wave です』と云つて笑うと，さあ大變，滿堂の聽講生（殊に婦人の全部）がサツと前に頭を傾けて「パーマ」と鉛筆で書き込むところは，なんてことはない，まるで稻田の上を秋風が撫でる樣……

ほとんど一言もわからないドイツ語のトーキーを見ている最中に，或る文句，たとえば zum Stehen bringen（とめる）だけがいやにハツキリ聽き取れて，しかもそれが，たとえば暴走する機關車に飛びのつて衝突の寸前に危うく zum Stehen bringen したところだつたりすると，一句がわかつた，という得意な氣持（關心!）のために，此の句はまるで石に刻んだように乾板に燒きつけられて，あたりまえなら百べん讀んでも百べんとも忘れてしまうはずのものが，一瞬にして記憶に印し，しかも一生涯忘れないでしよう。得意も關心です。

輪講などしているとよく起る光景ですが，友達同志よく議論をする。その際問題になつた文，句，語は，元來別に大して關心も何もなかつたものでも，偶然問題の焦點になつて，男の自尊心にかけて言つて爭つて……遂に負けた，なんてことになると，こいつも口惜しいから一生おぼえています。自尊心の對象となるものは，たとえどんなものでも關心の的となり，關心の的は，一週間試驗勉强で頭痛鉢卷したよりも以上に記憶に燒きついてしまうものです。

關心が如何に頭を鋭くするものかという實例は無限にありますが，なお一つ私自身の昔話をしておきましよう。陸軍士官學校にいたときのことですが，私はいつたいカンニングなんてことはやらない正直な生徒でしたが，たつた一回だけやつたことがあります。たしか築城學の試驗でした。全然本をあけてみたこともない課目なので，困つていると，あるおせつかい屋が，そ

んなら助けてやろうと云つて，自分の答案を二十分ぐらいで出して，教室を出て，私の教室のすぐ窓のところの大きな木の幹にかくれて，大きな紙に，大きな字で，1がこれこれ，2がこれこれ，と書いて，監督者の隙を見ては，その紙をこつちに向けて見せてくれるのです。ところが，長い間紙をこつち向けているわけには行かないので，監督の下士官が，向うを向いて歩いている間にちよつと見せ，こつち向きそうになるとすぐまたかくして樹の向うへ廻つてしまう。まあホンノ五六秒の間に相當の仕事をしなければならない……

けれども其の時に私はつくづく感じました，イチカバチカの試驗ともなれば，かくも頭がよくなるものかと！とにかく，五六秒のうちに，グツト緊張して，遠くの紙に書いてある文句を，しかも成るたけ速くサツと讀みおろしただけで，しかも一回讀んだだけで，しかも興味もなにもない初めての言葉や概念が，さながら待つてましたとばかり記憶に燒きついて，自信を以て立派に書きつらねられるのです！——とにかくよほど渾身の緊張をしたとみえて，四十年以上も昔の事なのに，その紙までハツキリ覺えています。

人間の關心（Interesse）という奴ほど正直なものはありません。橫着千萬というか，イケ圖々しいというか，とにかく箸にも棒にもかからぬほど正直で，恬然として持ち前の根性通りを丸出しにします。これが先に譬えとして引合いに出した「乾板」の正體なのです。潛在意識という暗室の中にある乾板です。——かるが故に哲學者 Heidegger は，「人間の本性は關心である」と云い切つています。(Heidegger は Sorge：„執“ または „慮“ „おもんばかり“ という語を用いているが，指す所は大體同じ見當です)

關心が向いている方面に對しては人間は誰しも頭がよくなるが，痛くも痒くもない事柄に對しては時とすると薄馬鹿と云わ

れても文句のないほど頭の働きが鈍い。學校では一向算數のできなかつた兒が，小僧に出されて，主人の金をゴマ化して嘘を吐く段となると，おそらくは學校の先生などには想像のつかないほど頭が働く。今までは友達づき合いすら碌にできなかつた男が，何かの機みでクラス委員にされ，みんなにおだてられて嬉しくなると，人の世話が面白くなつて，學校を出る時にはもう一廉の政治家になつている，などということは，私も約三十年ばかりの教師生活をしたおかげで度々見たことがあります。愛は盲目にし，嫉妬は炯眼にする，などというのもやはり同じ関係でしよう。

記憶と暗記力の問題になると，這般の關係はむしろあまりにも現金すぎておかしくなるほどです。試みに，毎日毎日接したり，紹介されたり，話したりする多くの人のうち，どんな人の名前を忘れるか，どんな人の名前がハツキリと記憶に殘るかを反省してごらんなさい。關心のない人の名前はすぐ忘れてしまうが，何か嬉しいことのあつた人とか，或いは反對に，何か不愉快なことのあつた人の名と顔はハツキリと記憶に印します。意識的にわざわざ覺えようなどと思つて努力した名前は，努力は殊勝であつたにしても，その割に覺えてはいないものです。要するにに吾人の潜在意識という暗室の中にある「關心」という乾板ほど正直な，現金な，横着な，いけ圖々しい，箸にも棒にもかからぬ，お里丸出しの，頑冥不靈な野獣はありません。人間は，表面の意識はどんなに發達しても，教養を積んでも，そもそも理性とか意識とか思惟とか云つたものはすべて前方のレンズにすぎず，背後の暗室は永久に本性丸出しの意馬心猿なので，殊に語學などと云うロコツに暗記と記憶が問題になる仕事では，最も致命的な「記憶の明確度」というやつが全的に此の暗室の方からして決定されるのです。

極言するならば，頭に良し惡しはない，關心に强弱あるのみ，

と云つてよろしい。天才とは，即ち，旺盛なる關心のことです。

關心の作法

そこでいよいよ關心の刺戟法ということが當面の問題になつてきます。如何となれば，人生はなにしろ非常に短かいのですから，いろんな事柄に對して鋭い關心が自然と生ずるのを膝に手を置いて待つて居た日には，到底急の間には合いません。なんとしても，みずから進んで自分自身の關心を自力によつて作興しなければなりません。これをしないと，萬象流轉の流れに押し流されるきりで，語學に關して云えば，如何にレンズのピントを合わせても，いわゆる「印象的」な單語はすぐ覺えるが，覺えにくい單語はいつまで經つても覺えられない，要するに八千萬人の日本人と同じコンディションの乾板で寫眞を撮つて行くとなると，こいつは實に馬鹿々々しい競爭で，日に5時間勉强した伊藤さんは日に3時間勉强した山本さんよりも必ず2時間の長を持つことになり，すべてが量で規定されることになる。こんな馬鹿々々しい競爭はありません。同じ3時間机に向つて勉强しても，伊藤さんのは3分間の効果もあがらないが，山本さんのは10時間に等しい威力を發揮する，というのでなくてはならない筈です。「關心」の度が强くなれば，現にそういう風になるのです。

關心の人爲的作興法は，愚見によれば，大別して二種類あるように思われます。第一は，『或る方面に對して一括して責任を持つこと』であり，第二は，これが此の記事の題目たる『クソ勉强』，或いは『何クソ勉强』です。

まず第一の方を述べますと，たとえば，『何でも自分のこととなるとほつて置けなくなつて急に頭が働き出す』という此の生存競爭裡の一大理法がそれです。人生のたとえどんな方面のことにせよ，その方面に對して，人に向つて斷乎責任を取らざるを得なくなると，その事柄に關しては忽ち全面的に關心が生じ，また頭もよくなるものです。たとえば，どんなにドイツ語の面

白くない人でも，之れを人に敎えるとなると，忽ち面白くなります。——

これはマアーばん安あがりの關心刺戟法で，語學以外の學問（法律，政治）では時とすると致命的な重要さを持つことがありますが，語學などとなると，そう大した効果も伴いません。なるほど，人に敎えるとなると，面白くなり，關心が生じますが，その關心というのは，當面的には，單に學生を感心させたいとかよく知つていると思われたいとか，過ちを指摘されてあわてるとか，そういつたクダラない關心のことが多く，語學そのものに對する，或いは語學の理解と創意と蘊蓄に關する人生諸般と關係した本當の深い關心ではありません。

語學というものは，御存じの通り，人生諸般の問題に關係して來ます。そもそも言語とは何でしよう？言語とは，或る民族が何千年かの間，およそ人間として考えられるだけの「凡ての」事を考え，觀察できるだけの「凡ての」ことを觀察し，愕ろき得るだけの「凡ての」事を愕き盡し，喜こび得るだけの「凡ての」ことを喜こび盡し，悲しみ得るだけの「凡ての」ことを悲しみ盡した生々しい痕跡です。私が特に强調して「凡てのことを」と言う點をよく考えて下さい。二十歳前後の若い人が，人生の入口に立つて，たとえばドイツ語などというものに相對する時，たとえ其の人がどんなに苦勞をしたことのある人であつても，まだまだどうして人生の凡ての事に對して鼻が利き眼が利く，いわんや關心が働くとは申せますまい。ところが語學はそれを要求するのです。人よりも以上に進步し，殊に人よりも以上に速く言葉を覺えようという時には，それが必要になつて來るのです。面白いと思つた語は一瞬でおぼえるが，どうでも好いと思つた語は覺えられないから，問題はすこぶる簡單で，「どうでも好いと思わないようにする」という心術が必要になつて來る，しかも「人生のあらゆる方面のことがらが，どうで

もよくはなくなる」ようにする心の修養，もつとはつきり云うと，「凡てが面白くなること」が必要になつて來ます。

ちよつと斷わつておきますが，「凡てを面白く思おうとする」のではありません。それはレンズの方の働きです。「凡てが面白くなる」ことです。

面白いとか面白くないとか云う問題は，これが卽ち關心で，意識的にはどうにもなりません。面白い事は面白い，面白くないことは誰が何と云つても面白くない。面白くも何ともない事を，勉强の上で必要だからと云つて，强いて面白いと思おうなんて，そんな馬鹿な事はない。思つたつて，心は正直なもので，事實として面白くもなんともならない！

よく見かける圖ですが，たとえば，縱から見ても橫から見ても，およそ哲學などとは何の緣もなさそうに思われる徹底的な俗物が，語學をやる以上は哲學もわからなければ……というので，どえらい哲學書を開いて，「何とか面白くなるように……」と云つたような顏をして讀んでいる。苦笑ものですな。

讀者諸君，我々はいよいよ最後の鐵壁に突きあたりました。吾人腦中の暗室とその乾板の正體が關心というものであるとなると，これはもはや意識的，人爲的にはどうにもなりません。頭の良惡が關心如何によるとなると，勉强によつて頭の質を變えることも出來なければ，その他凡才を化して天才とする術は絕對に無さそうです。現にそんな術は未だ嘗て敎えた人もなければ敎わつた人もない。結局すべてを運に任かせるの外はない。

決心しても駄目，勉强しても駄目，修養しても駄目，その他何をしても駄目なことはわかり切つている。

これで大體，突きあたる所へ突きあたつてしまつたわけですから，ではママ大體此の邊を結論として話を打ち切つて好いのじやないでしようか？

結論：自分の力で自分の頭をよくする方法はない。勉強しても頭はよくならない。

この結論はもはや絶對に覆えす餘地のない絶對眞理です。凡才と生れた人はまあ，死刑の宣告と思えば好いでしよう。實にお氣の毒なことだと思います。

これから先は，もう大して申し上げるほどの事もありません。青酸加里の入手法でもお講じになるか，或いは，氣が向いたら，これから一寸最後に附言する次の點に御注意なさるかの どちらかです。

それは何かというと，斯ういうことです。

萬策盡きた狀況の下に於て人間は何をするでしよう？いよいよ死刑と決まつた男には……たとえば破獄を企てるという最後の一手が殘されてはいはしないでしようか？變な例になるが，これが此の際色んな意味で一番ぴつたりあてはまるからやむを得ず申しますが，たとえば，女を口說き落そうとかゝつた男は，お上手を云つても駄目，脅迫しても駄目，泣いて嘆願しても駄目，金で釣つても駄目，要するに萬策盡きたとなると……どうするでしよう？萬策盡きた後には，萬策以外の「强姦」という最後の一手があるのじやないでしようか？

どんなに勉强したつて惡い頭を良くする方法は絶對に無い——では我れと我が頭を强姦する，そのためには先ず關心を强姦する，（もつと詳しく云うと「レントゲンを以て乾板を强姦する」）すなわち「クソ勉强」という，全然無茶苦茶な，天地の理法を無視した，犯罪的一手が後に殘されはしないでしようか？誰でも考えそうな，最もあたりまえの無策にして無謀なる，たくましくも直截なる此の一手が？

（さあ大變なことになつて來た！殺人に譬えられ，貫一に譬えられ，戰爭に譬えられたあげく，とうとう强姦に譬えられるに

至つては，クソ勉强たるもの，以て冥すべしです。本望でしよう）

事實，クソ勉强は，いろいろな意味に於て强姦に似ています。ただ一つだけ，後者が瞬間の快を得んとして，欲せざる結果を後に殘すに反して前者は其の逆である點がちがつているきりで，其の他の點は全然同じです。少くとも多少たりとも恥を知る人間ならば，考えただけでも眼をそむけたくなるような，無理無體の細部に分けて考えられる點も似ているし，意圖の如何にかかわらず後に儼然たる結果が殘つて，その結果がそれ自體の理法によつて生長して行くという點もそつくりだし，そもそも，たつたそれだけの事で，それが後になつてそんな重大なことになるという事實關係が，當事者自身はもちろんのこと，第三者にも，學者にも全然わからないと云う點もそつくりです。中でも特によく似ているのは，クソ勉强によつて生じた結果，すなわち廣汎英駿なる關心と天才的な頭腦という奴はちようど，强姦のために出來た兒が，普通の夫婦關係で出來た兒と何の差別もなくて，どんなに眼の利く人だつて，二人の子をならべて，こつちは强姦の結果，こつちは普通，などと云つて區別することができないのと同樣に，生得生粹の天才と全然同じ者なのです。否，持つて生れた天才よりは，クソ勉强で冴えた天才の方がずつと天才であるという範圍のことが人生にはたくさんあるのです。

窮餘の一策，などと云つてはいけません。窮餘の一策に碌な策はありません。——また强姦の話になるが，强姦は窮餘の一策ではありません。窮策を捨てた本策です。窮策極わまつて本策を生ずというやつです。すべてを失つた者にして初めて「すべて」が得られるという……これが人生の弁證論です。

また强姦の話になりますが，强姦しても子供が生まれるとい

うことは誰も認めますが，クソ勉勉が天才を生むという話は，どうもちよつと普通の常識ではうなずけない。私も，この點ちよつと疑問に思つて，神樣の所へ行つて質問したことがあります。『神樣，ちよつと伺いますが，クソ勉强によつて冴えた頭というのは，事實としてはたくさんあつて，むしろ天才といわれる人の大部分は實はそうなんじやないかと思いますが，どうしてそう巧く行くのか，私にはどうもよく譯がわかりません。どういう譯なんでしよう?』と私が問うと，神樣は『知らん』とおつしやる。そこで私は『それはおかしいじやありませんか！神樣が御存知なければ，いつたい誰が知つているんです?』と云つて，かなりはげしい口調で詰め寄つた。すると神樣の曰く：『時が知つている。』

最後に，くどいが，もう一度申しあげて此の稿を結びます：一年や二年では到底出來た話ではないが，五年十年の後には恰ら奇蹟の如くに實現する事柄というものが此の人生には儼然として存在する。あたりまえで行つたのでは結局あたりまえにしかならない。おまえだけは何か人のしないへんな事をせよ：汝自身の頭を强姦せよ！

(1954 年 1 月)

語學の勉強法をあらゆる角度から

關口存男

第一問： 飜譯をすると語學の實力がつくでしようか？

答： つかないでしよう。日本語の言い廻しは上手になるかも知れませんが，外國語そのものは割合進歩しません。(嚴密を期するために，少し別な云い方をするとすれば：『飜譯することによつてつくような語學の實力は，それはまだ本當の語學の實力ではない』と云つても好いでしよう。もしこの解答が腑におちかねる點があつたら，いわゆる反譯家と云つたような筋の人たちに訊いて下さい。)

第二問： 辭書は，獨和など使うよりは，やはりなるべく獨獨を使うべきでしようか？

答： 獨獨を使つて充分わかるようになつたら，もちろんそれに越したことはありますまい。一語をしらべながら同時に多くの語に接するわけですからね。しかし，そこまで行くのはなかなか大変です。また，引こうとする語の種類によつては，獨和の方がずつと精確だということもあります。たとえば Ladenhüter (たなざらし), Diabetes (糖尿病), Einheit (單位), Eierpflanze (茄子), schieben

(横ながし) など。

第三問： 作文が重要だということは充分みとめますが，われわれには作文を練習する方法がありません。自分だけでデタラメに作つて見たところで，それは反つて間違つたことをおぼえてしまう位のもので，誤を訂正してくれる人がなければ駄目ですね？ 先生といえども，作文となると，うつかりした先生には信用がならない氣がします。そうかと云つて，外人につくなどということは，誰にもそうやたらにできることではありません。どうしたら好いでしよう？

答： 獨文をまず日本語にお直しなさい。そして，忘れた頃に，その日本語をもとの獨文に直してごらんなさい。これを「逆文」と申します。不自然な作文よりは自然な逆文の方がずつと効果的です。

第四問： 会話の練習のために西洋人につくということはどうでしよう？

答： つける人は勿論つくべきでしよう。けれども，欲を云うならば，あなたがお金を出して西洋人につくよりは，むしろ西洋人の方がお金を出してあなたにつく可きでしよう。—— 奇論をよしてわかり易く申しますならば，西洋人の個人教授を受けるということは，あなたがよほど上手に相手の先生を引つぱり廻さない限り，どうも大抵「話の種」が切れてしまつて，長つづきはしないものです。それに反して，何かどうしても意思を通じ合わなくてはならないような具體的な問題があなたと西洋人との間にしよつちゆう續發してくる

ような關係に立つというと，會話は否でも應でも上達せざるを得ません。だから，会話に上達したいとお思いになつたら，まず相當の實力を蓄えたのち，何等かの機會を作つて，相手が「これは重寶な男だ，利用してやれ……」とあなたに注目するようにお立ち廻りなさい。これより以外に，もし何等かの上達法があつたら，私は……燒ちゆうを五分間に一升飲んで見せます。

第五問： 音盤を利用することは有効ですか?

答： 有効です。但しこれには甚だ痛い條件が一つつきます。それは，音盤を本當に自分一人だけで使うことです。高價なものだから，これは甚だ痛い條件かも知れませんが，この條件でないと絶對にダメです。學校で買つたのをほんのたまに一寸きかせてもらつたり，友人のを一寸貸してもらつて一二週間聞いたりしたのでは，絶對に効果がありません。ラジオできくのも同樣です。—— 自分の部屋にそなえつけて，毎日毎日きいて，ほとんど全部を暗記して，たとえばマア例の「のど自慢」にでも出られるくらいに，流行歌のように練習してごらんなさい。非常な効果です。

第六問： 單語帳や單語カードは効き目がありますか?

答： あんまりないでしようね。—— 自分で單語帳を作つてみるということは，それをタンネンに書く時の効果だけはあるでしよう。あとは，たいてい風呂にもしてしまうものです。燃された單語は大抵の場合

煙突を通つて屋根から外へ出てしまうとしたもので，單語が熱と共に風呂釜を貫いて浸透し，それからあなたの膚にしみ込んで大腦にまで達する……ということはまだ科學的に立證されていません。

第七問： 讀破力をつけるには，短かいものを多く讀むべきでしようか，それとも一つの長い書物にあくまでも喰いさがつて行くべきでしようか?

答： 私自身の經驗から云うと，長いものをつづけて讀む方が實力がつくと思います。もちろん，書物には，文體の上から云つても，取扱われている問題から云つても，みなそれぞれ偏した固有癖があります。ある小説では，ある種の事ばかり出て來て，他の種のことは出てこない，ある論文では，ある一定の用語ばかり出て來て，それ以外のことはちつとも出て來ない……といつたようにです。これは一つの缺陷であると同時に，また一面に於ては，語學學習者にとつてはモツケもない絶好の進出チャンスを提供するものであり，云わば，さながら，ブラジルの密林にわけ入るために自然が作つておいてくれたアマゾン河にも似たところがあります。アマゾン河というものがあるのに，何を好んでわざわざ密林をわけて奥地に進む必要がありましよう?——というのは卽ち，こういう意味です。たとえどんなむつかしい書物でも，最初の五十頁をよく讀めば，あとは不思議なほどよくわかり出します。難儀は最初の五十頁にあるのです。つまり，その作家，その文體，その用語，その話の筋，その扱つてある問題，

その特殊な語法に慣れるのに暇がかかるのです。(初學者は往々にして此の難關を語學一般の難關と混同して考え勝ちです) それに慣れてしまえば，こんどは，その逆の現象が起つてきます。すなわち，その書の固有癖に慣れて，「その書」がわかり易くなつたということのために，學習者は，這般の問題を混同して，「そもそもドイツ語というものが」わかり易くなつた樣な錯覺を起してしまうのです。そして，此の（本當はチョットよくない）錯覺のために，かれの讀破力は破竹の勢を以て進歩します。進歩というよりはむしろ「上すべり」してしまうのです。しかも此の「上すべり」は非常に好い「上すべり」で，此の「上すべり」と，此の錯覺がなかつたら語學は絶對に進歩しません。知識は得られるかも知れませんが，力はちつともつきません。語學の底力，語學の實力というやつは，知識や明確な認識とは一寸別物です。

第八問： 講習會に出たりするよりは獨學の方が好いでしようか？ 講習會や教室の語學をどうお考えになりますか？

答： 講習會とか，教室とか，讀書會とか，輪講とか，研究會とか云つたものには，おのずから其の利害得失があります。どんな利害得失があるかというと，それらはすべて多勢の人，或いは數人の相手と共にやることですから，すべての「社交機關」に共通な利害得失を持つているのです。——誰じも自分の經驗に問うてみればほぼわかることですが，いつたい人間というやつは，一人きりで何かやるときの頭の働き方と，相手がある時の頭の働き方との間には「種類」の相違があります。人の話を聞いたり，自分でも喋舌つたりしている時(即ち對人關係)には，或種の事柄に對しては非常に敏感になつて，ひとりきりの時には考えもつかないような好い事を考えることがありますが，また，他の或種の事柄に對しては恐ろしく鈍感になつてしまつて，一人きりなら當然氣がつく筈の簡單なことが急には思い出せないなんてことがあります。それと逆に，一人きりで机に向つているときには，或種の事柄に對しては非常に綿密に頭が働きますが，他の或種の事柄に對しては，まるで低能兒かなにかのように，スッテンとぬけていて，肝心なことをすつかり忘れているということがあります。——これを要するに，對人關係の仲に入つて(教室などで)勉强するということは，ヒントを授けられたり，刺戟を受けたり，或種の問題を明確に考えたり，視野をひろげたりするにはもつてこいですが，眞の意味における實力を養成するには甚だ適しません。眞の意味における實力を養成するのは，何と云つても，やはり，獨學です。ひとりでムッと意識を集中して，多少獨善的になつてもよい，多少獨斷に陷入つてもよい，とにかく馬車馬のように，左右に目かくしをつけて，盲目的に猪突前進することです。これをやらない人にとつては，教室の授業は大した指導にならないでしよう。これをやる人にとつてはじめて教室は不可測の威力を發揮するでしよう。——獨學は地上軍のごとく，教室ガイダンスは空軍のごとし。進歩した現代の軍備が空軍

を持たないというのは重大な缺陥でしよう。しかし，第二次大戰の經驗によると，空軍だけでは絶對に敵國を攻め取ることはできません。やはり，速力のおそい地上軍が多大の犠牲をうけつつ，一歩一歩と敵を追いつめて行つてはじめて敵國を制することができるのです。

第九問： 文法というものは，どの程度まで必要なのでしよう？殊にドイツ語をやる者は，文法というものを非常に重要視する傾向があるようですが，これははたして正しい考え方でしようか？

答： 『文法がわからなければドイツ語は全然わかるわけがない——文法がわかつたところで，それでドイツ語がわかつたわけではない』—— まずこんなことになるでしよう。よく噛みしめて考えて下さい。

第十問： 自分の學力の程度よりも少しむつかしい位のものに噛りついて，小野道風式に，わかるまで根氣強くねばりついた方がよいでしようか，或いは，自分の學力より下のものを樂樂と澤山やつた方がよいでしようか？兩者ともその特長があるように考えられますが……？

答： お說の通り，一得一失です。その人の性格によつてきまるでしよう。どちらが自分に向くか，ということを，よく判斷する必要があります。この判斷は，なんでもないようで，當事者自身の內部からはなかなかむつかしい問題です。私が只今までに見て來たところでは，三人に一人，あるいは悪くすると二人に一人

位の割で，此の判斷を誤つている人を見受けます。そんなむつかしいものを机の上に置いて，ムツカシイ顏をして，眼を充血させて，便秘したり溜息したりしながら停頓していなくても，もつとやさしい物をドンドンと讀んだ方が性に合つてもおり，また進歩も早いだろうに，と思われるような人にかぎつて，何かヘンな野心にこだわつて，本人と書物とを見くらべると思わず失笑を禁じ得ないような，トテツもないむつかしい物と四つに組んで（死闘しているなら好いが）居眠りしている……そうかと思うと，もうこれくらい出來る人なら，ちつとは野心を振るい起こして，何かモツトむつかしいものと取つ組んで，今まで知らなかつた全然の別天地に身を置き移したら，我れと我が實力を見なおして，其處にもたらされた新境地のために，生れ變つたようなスガスガしい氣持がして，また改めて人生が生き甲斐あるものとなるだろうに……と思われるような人にかぎつて，いつまでも自分の氣持の惰性に引きずられて，現在の自分に充分わかることにだけしか興味が向かず，少しでもむつかしいものに對しては本能的な反感を抱き，その結果として或種の獨善的な心境に陷入り，その為に折角の勉强が何の効果ももたらさずにいるといつたような人も見かけます。——とにかく人間というやつは，何が本當に自分の為になるか，現在の自分には何が最も促進的であるか，ということに對しては，いわば積極的に心を閉ざさんとする傾向があるのです。（アラン・ポーは，この一つの面白い場合を The imp of the perverse „よこしまの

まがつみ"〔とでも譯しますか〕と名づけて，同じ題の短篇で隨筆風に鋭く描寫しています。)——以上は念のために申しあげたのですから，よく内省すると同時に，常識的立場から自分自身の振舞いを客觀的に批判して下さい。——ごく一般的に申しますと，初學者はなるべくやさしいものを多量に讀んで勇氣と自信をつける方が順序です。あんまりむつかしいものに喰らいついて，停滯してしまうことは，よくありません。密林をかき分けて，いばらに引つかかつたり，毒蛇にかまれて三ケ月入院したりするよりは，坦々たる國道をテクテク一ケ月歩いて廻り道した方が結局は時間の經濟かも知れませんからね。——但し，これには一つの例外があります。それは，前出の第七問に對する解答で申し上げた，一つの長い書物にあくまでも食い下がつて行く場合です。此の場合は，あなたの性に向こうと向くまいと，とにかく遮二無二，むつかしい密林を突破しなければなりません。自分の實力とは不相應な，なんなら一行に出て來る單語の九割まで辭引で引きながら，今日は一行，明日は二行，と此の段違いの相手と四つに組んで何ケ月でも頑張らなければなりません。

第十一問： 私は少し慾の深い方で，ドイツ語以外に，英語も，できることなら佛語もやりたいと思います。ただその方法なんですが，若い時から多少たりとも平行して三語をやる方が好いでしようか，或いはやはりドイツ語だけに專念して，これを相當マスターした後に英佛にとりかかつた方が好いでしようか?

答： 御質問の趣旨はよくわかりますが，そこには，あなた御自身がまだよく氣がついておいでにならない多くの根本問題が錯綜していて，なかなか厄介です。——たとえば，あなたは，ドイツ語以外に英佛をマスターしたいと仰言いますが，マスターするというのは，どんなマスターのし方のことをお考えになつての上での話ですか? もしそれが，新聞が讀めたり，手紙が書けたり，會話が出來たりする程度のマスターでしたら，また，英佛語とドイツ語を同程度に飜譯ができるという程度のマスターでしたら，この方は解答は割合カンタンです。但し，あなたの生活力の旺盛さと，あなたの素質とを知つての上でないと，一ぱん的には，チョット責任を以てはお答えし兼ねます。——けれども，一般的に云えることは，ゴク月並なことではありますが，やはり「うつかりするとアブ蜂とらずになるぞ」……ということ，或いは，「二兎を追うものは一兎をも得ず」ということです。月並みではあるが，これは永遠の眞理です。——ただしこれにも但し書はつきます。すなわち，もしあなたが非常に精力の旺盛な（というのは精神力のことです，體力には大して關係しません）人だつたら，これはまたチョット話がちがつて來ます。また，精神力の旺盛な人に對しては，ドチラを先にやつた方がいいかなどと云う問題に對しては解答する必要を認めません。何から先にやろうと，そんなことはどうでも好い問題で，ただとにかくやりさえすれば好いでしよう。また，やるなと云つても，やるでしよう。

——(終)——

(1952年7月)

海に潜る若者

F. シラー作・關口存男譯

「あいや者共，誰かある，　小姓たりと騎士たりと
われと思はん者あらば　いでこの淵に潜つても見よ，
これなる黄金の盞を　それ，この通り投げたが如何に，
大海原の鰐口が　あれ，一息に嚥みしを見よ，
われと思はん者は誰そ，　潜つてあれを拾うて參れ，
拾うて參つた其の者に　余は盞をつかはす可し。

かく呼ばはりて，涯しなき　大海原を瞰下しつ
さながら虚空を衝くがごと　そそり立つたる屏風岩
極まるところ絶端に　佇みありし國王は
波立ち騒ぐカリユブデに　見よ，盞を投げ入れぬ。
「重ねて問はん，誰かある，　われと思はん者は誰そ，
いで，此の淵に潜らんずる　勇ある者は打つて出でよ！」

綺羅星のごとく國王の　左右に侍る騎士小姓，
意外の言葉に氣を呑まれ　ただ默默とたたずみて
寄せては返す荒浪を　足下遙かに眺めつつ，
さらば拙者が頂戴と　罷りて出でん者も無し。
王此の樣に色を作し，　更に呼ばはり申すらく：
「どうぢや，返辭はまだ無きか，　いかが召された，各の各方。」

滿座いづれも聲を呑み　靜まる程に，思ひきや，
朋輩共を尻目に懸け　優しの眉宇に可憐にも
決死の色を濕らせ　やをら起ちたる小姓あり。
進み出づるや帶マント　決然かなぐり棄てければ，
並み居る騎士を初めとし　淑女の群に至るまで
此の姿よき若人を　ただ惘然と見やるのみ。

やがての事に絶壁の　眞際に近く降り立ちて
顎に似たる深潭の　樣や如何にと見下ろせば
既に先程カリユブデの　洞に吸はれし激浪は
此の時どつと溢れ出で　岩を嚙みてぞ咆え猛り，
見下ろす彼方ぬばたまの　闇に湧き立ち騷ぐ音は
谺に返す遠雷の　殷々たるにさも似たり。

湧き立ち返り，煮え沸り　どよめき騷立つ其の樣は
烈火に水を注ぐがごと，　壯絶言はん方もなく，
飛沫は遙か天に冲し　繁吹きの狹霧は眞白に棚引き，
押しのけ，掻き分け，揉み合ひ，重なり，　被せつ疊
　みつ湧き立つ潮，
組んづほぐれつ濺り溢れ，　湧けども湧けども湧けど
　も盡きず，
わだつみ更にわだつみを　產まんとするが如くなり。

さしも猛りし滿潮の　勢やがて衰ふれば，
雪なす泡の只中に　眼も昏む烏羽玉の
常夜の闇と瞬きて　豁と裂けたる岩狹間，

轉び墜つれば眞逆樣，　地獄の底にも至りぬべく，
地軸もとどろに鳴る汐の　吸はれ吸はれて滔々と
漏斗の口をひたぶるに　渦卷き降るぞ凄まじき。

時こそよけれ逆潮の　卷きて返さぬ其の程にと，
神明の手に我が命　托する新禱の一刹那，——
素破と微かに異口同音　滿座思はず立ちすくめば，
見るより早く退汐の　渦に呑まれて影も無し。
瞰下ろす足下千仞の　鬼氣漂はす水の面，
固く鎖して今ははた　行方知れずなりにける。

波靜まれる深潭の　水面は既に寂として
深きに潜む洞のみ　陰に籠りて轟けば，
我人共に胸逼り，　打ち戰きつ口口に
あはれ健氣の若人よ　今はさらばと呟くのみ。
洞なす奥に谺しつ　とどろとどろと絶え入る音は
待つ間苦しう遲滯きて　恐ろしと云ふもおろかなり。

よし我君が此の砌り　御冠をしも擲げ給ひ
拾ひ來たらん其者は　之を頭に戴く可し，
我に代りて萬乘の　位に卽けむと曰ふとも，
嗟誰か能くかりそめに　心惹かれて惑ふべき。
吠えたけぶ彼方淵の奥　そも何者ぞし潜みたる，
日の眼を仰ぐ生靈は　得も語らじと覺えたり。

そも往昔より此の渦に　船足絡み傾きて
水底深く墜ち行きし　巨船は多し，嗟，されど
なべてを呑みて默したる　墓穴を腕き出で來しは
打ち碎かれし龍骨か　挫ぎ折れたる帆柱か。
かくする程に刻一刻　迫る嵐の氣配して
いや益しつのるざわめきも　　今は眞近かに聽き取れぬ。

湧き立ち返り，煮え沸り　どよめき騒立つ其の樣は
烈火に水を注ぐがごと，　壯絶言はん方もなく，
飛沫は遙か天に冲し，　繁吹きの狹霧は眞白に棚引き，
押しのけ，搔き分け，揉み合ひ，重なり，　被せつ疊みつ湧き立つ潮，
闇なす奥の彼方より　雄叫び躍り出づる音は
谺に返す遠雷の　殷々たるにさも似たり。

さる程に，見よ，黑黑と　漲る潮の懷より
それと覺しく浮かび出で　眞白に搖らぐ物の影，
腕あらはれ，やがてまた　雪を欺く項見え，
力にまかせて波を切り，　浮きつ沈みつ跳けるは
まさしくかれが姿なり！　左手に高く擧げ持ち
悅び面に溢れつつ　打ち振り翳すは靈なり！

且つは淋々と息を吸ひ　且つはつくづくと息を吐き，
光のどけき現世の　渝らぬ姿なつかしめば，

人々勇み歡びて　皆口々に呼ばはりぬ：
「かれ恚なし！かれ生けり！　かれは虎口を遁れたり！
墓穴を後に水底の　渦卷く潮搔き分けて
九死の巷に一生を　奇しくも得しものかな！」と。

小姓はやがて諸人の　歡呼の聲に迎へられ
還り來るやおもむろに　王の御前に跪き，
擲げ給ひしは此の盞　あらため給へと差出せば，
王は則ち側なる　優しの王女さし招き，
珠と閃く美酒　波々とこそ注がせけれ。
若者之を受けたる後　王に語りて言へらくは：

「壽永かれ我君よ！　轉た惟ふにたまゆらの
いぶき通ひて天つ日を　をろがむ者こそめでたけれ！
日の眼に乖く彼の奥は　あな恐ろしの常夜かな，
人たる身もて神明に　楯突き挑むは曲事ぞ，
また神明の故ありて　夜見路の闇に秘め給ふ
ものの姿はかりそめにも　発くまじとぞ覺え候。

飛ぶ矢の如き勢もて　掠はれ墮ちゆく時しもあれ，
忽ち行手を遮切りて　岩間に開く深坑より
どつと潮の噴き出でつ　我を迎へて寄せ來るあり，
彼と是との反噬に　得も退かず得も往かず，
しばしが程は轉々と　眼も暈む速さもて
まんじ巴と曳き廻され　抗ふ術とてなかりしが，

萬策尽きたる今はの際　頼むは神の御力のみ
助け給へと神の御名　心に唱へし甲斐あつてか，
奈落の底より忽ちに　現はれ出でたる救ひの岩角，
むんづと之れに獅噛みつき，　九死に一生得て見れば，
ああら不思議や，壺も　珊瑚に懸かりて眞近かに在り！
此の枝一つに奇しくも　轉び落ちずてありけるなり。

如何となれば，見はるかす　彼方は今猶ほ幾千尋，
紫金の闇に閉されつ，　杳と霞みて見え辨ず，
耳元近くは閑寂と　寢ね靜まりて聲無きに，
まだ眼のみ慄然と　わななき見守る眼の下は
火蜥蜴，蜥蜴，山椒魚，　鰐，怪龍の蠢蠢と
犇めきのた打ち屯する　身の毛もよだつ洞窟なり。

見渡す限り眞黒に蠢き　物すさまじく塊り縺れて，
彼方に一群，此方に一山，　醜怪凄愴名狀し難き
逆棘立つたる雁木鱗，　色毒々しき蝶々魚，
寄らば突かんと身構へたる　異形の怪物擅木鮫，
闇に仄々笑みたる如く　牙むき出して蹲踞る
大海原の鷲狗　あな恐ろしの鱶の群！

かかる狹中に懸かりては　生きたる心地の候ふべき，
絶對無人の境なれば　助けを呼ばん方もなく，
魑魅魍魎の只中に　有情の胸のただ一つ，
神人共に見離せし　空おそろしの寄邊なさ，

人の語らひ世のさざめき　距つる闇の幾千尋，
咫尺の裡に相見ゆる　夜見路の涯なる荒ぶる神々！

如何はせむと打ち戰き　思ひ亂るる時しもあれ
百千の手足一時にうごめき　遁ひ寄り詰め寄せ，顎を開き，
矢庭にひらりと身を翻へし　飛びつかんずる氣配に仰天，
縋り持ちたる珊瑚の細枝　後先覺えず手離す折しも，
此の時忽ち奔馬の如く　渦卷く怒濤に身を攫はれぬ。
實に神助とや申すべき，此の瀬に卷かれつ浮びて候。」

一部始終の物語に　且つは訝り，且つはまた
打ち興じたる王の云ふ：「この壺は申すに及ばず
かてて加へて更に又　稀代の寶珠もて飾る
此の指環をも其方に　望みとあらばつかはさむ，
但し，ふたたび潜り來よ，　再び潜りて彼方なる
水底に見し事どもをば　つぶさに語り聞かせよかし！」

王の娘は之れを聞き，やさしの心や動きけむ，
冒葉巧みに云ひなしつ　哀れを乞うて申す樣：
「さりとは酷き御戯事　程よき處に止めませ，
余人の期せぬ生還を　遂げ來つること奇特なり，
思ひ止まり給はむこと　難しとならば詮もなし，
小姓わつばを何かせん，　いで騎士共に御命あれ！」

言はせもあへず國王は　矢庭に盞手に掴み
渦巻く怒濤の只中に　發矢と投げ入れ申す樣：
「この盞を爾もし　再び拾ひ來りなば，
元服其の場に差し許し，　騎士の頭と勅諚せしむ，
且つは爾に不憫を懸け　庇ひ立てする此の王女，
今日此の日妻として　爾に娶合せ取らさうぞ！」

聞くより若者なじかは知らねど　いみじき力に心をほだされ，
顏面相貌見る見る一變　不敵の決意に眼差し輝く。
ましてやその時，みめよき姿の　紅葉と染めたる可憐の顏，
忽ち色失せ悶絕する樣　眺めて何條ためらふ可き，
男と生れて今日此の刻　此の賞かち得で退くべきものかは，
生きなば生きよ，死なば死ね，　さらば，とばかり飛び込んだり！

岸打つ浪は音高く　寄せては返しまた寄すれど，
寄せ來る潮は地を搖がせ　とどろとどろと鳴り旺れど，
旺れば素破と身を屈め　探り見，あくがれ，眼を瞠れど，
潮は漲り，滿ち，溢れ，　打ち寄せ打ち寄せ盛り返せど，
上げ來る潮の騷ぎにも　退き行く潮の響みにも，
海に潜りし若者の　沙汰は聞えずなりにける。

抒情挿曲　序　　曲

H. ハイネ作・關口存男譯

むかしひとりの居士ありき，
　世をはかなみて物言はず
頬落ちくぼみ顏あをく
　ただ眼玉のみぎよろりとして
いぶせき夢にも息づまり
　暗き想ひにむすぼれて，
右によろめき左にのめり
　世をふらふらと渡りけり。
諸事間が抜けてお目度く
　ぶきつちよにしてへまなれば
あんよはお上手轉ぶはお下手と
　つまづきまろびつ過ぎ行く所
路傍の花も乙女らも
　面そむけてぷと吹き出しぬ。
家にかへれば薄暗き
　隅を求めて蹲踞り
世の常人のさかしらを
　しばしのがれて寛ろぎしが，

その時やをら動き出で
　　腕さしのべ長嘆息，
虚空を睨むことあれど
　　なに口走ることもなし。
やがて小夜更け丑満つの
　　頃ともなれば，あら不思議，
夜暗妖しく鳴動し
　　虚空に微妙の響あり——
頃しもあれや戸の外に
　　騰おどろかす敲扉の音。
現れ出でたる異形の姿は
　　人目を忍ぶ居士が懸人，
浪のざわめき飛沫の衣
　　纏へる海のもののけなり。
嬋娟として薔薇のごとく
　　窈窕として小百合のごとし。
被衣の輕羅燦々と
　　金銀珠玉にきらめきて，
その撫で肩に柳腰に
　　金髪亂れまつはれり。
海姫細眼に打ち笑ひ
　　悩殺一瞬，さてやをら

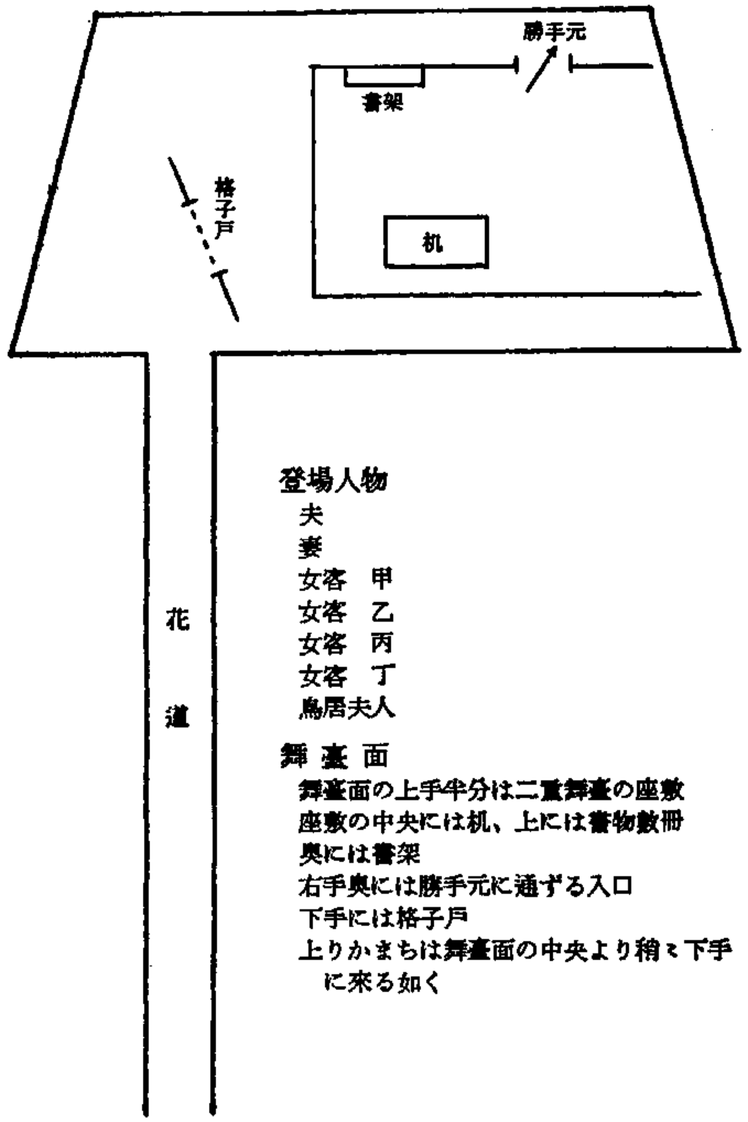
引き寄せられつ抱き寄せつ
　　ふたりはむんづと相擁しぬ。
居士愛欲にいきり立ち
　　身も世もあらず掻き抱けば，
撲仁人殿見る見る皮剝げ
　　全身炎と燃へ立つ鼻息，
青菜に鹽殿，顔面紅潮，
　　夢作殿，すわ迷夢一擲，
愚圖殿たちまち活氣に漲り
　　圓轉洒脱の妙なる振舞
戯れかかれば相手もさる者
　　挑みに酬ゆる挑みの戯れ事
雪をあざむく白妙の
　　被衣の輕羅打ちひろげ
頭の上からすつぽりと
　　かぶせつ居士を生擒つたり。
その輕羅の蠱により
　　身は一瞬に羽化登仙，
白皚皚たる深海の
　　水晶宮に遷されぬ。
その玲瓏に莊嚴に
　　金銀珠玉のきらめきに

呆氣に取られて言葉なく
　目をしばだたく居士殿をば
あないとほしや可愛いやと
　抱きて離さぬ海の姫，
居士は花婿，水精(ニンフ)は花嫁，
　今宵は晴れの婚禮よと
海の乙女等寄り集ひ
　妙(たへ)なる樂を奏で始めぬ。
妙なる樂の音(ね)につれて
　歌ふ人魚の玉の聲，
歌に調べに浮き立ちて
　競ふ百千(ももち)の踊り足，
舞に歌謡に昔曲に
　魂(たま)も奪はれ眼も眩(くら)み
狂氣の如く海姫を
　擁(いだ)きに擁(いだ)く戀の居士——
此の時燦(さん)たる不夜城は
　忽焉(こつえん)として掻き消えぬ。
茫然あたりを見廻せば
　いぶせき舊(もと)のわび住居，
泣いても笑ても怒つても
　三文文士の下宿なり。

一幕の喜劇

首相の親友

関口存男作



登場人物

夫
妻
女客　甲
女客　乙
女客　丙
女客　丁
鳥居夫人

舞臺面

舞臺面の上手半分は二重舞臺の座敷
座敷の中央には机、上には書物數冊
奥には書架
右手奥には勝手元に通ずる入口
下手には格子戸
上りかまちは舞臺面の中央より稍々下手に來る如く

幕が開くと玄關の外に立つた三人の女客と，玄關に立つた妻君とが別れの挨拶を交してゐる。座敷では夫が煙を吹いてゐる。

1 女客甲　どうも大變長居を致しまして……
2 女客乙　(同時に) どうも長い間お邪魔致しました。
3 女客丙　どうも色々と……
4 妻　いゝえ，どう致しまして，何のお構ひも出來ませんで……
5 女客甲　では失禮致します，さやうなら。
6 女客乙　(同時に) では御免下さいませ，さやうなら……
7 女客丙　(同時に) 御めん下さいませ。
8 妻　失禮致しました。此の邊はどうもひどく埃が立ちまして。
9 女客甲　いゝえ

女客達は甲，乙，丙の順で花道を歩つて行く。妻は格子戸を九分通り締め，あとの一部の隙間から後を見送つてゐる。

10 女客甲　(途中でとまる。女客乙の腕をポンと叩いて) 片山さんてこんど總理大臣になつた片山さんのことかしら。
11 女客乙　勿論さうでせう。
12 女客丙　勿論さうよ，あなた。だから (と天狗のまねをして) これなのよ (と女客甲の肩を打つ)。

女客達は花道を退場
女客丙のセリフが終ると同時に，妻はピシヤリと格子戸を閉め，クルリとうしろを向いて云ふ。

13 妻　あなた！
14 夫　(煙を叩きながら) あ？
15 妻　あなたは失禮な方ですね。客の前であんな事を仰言るものぢやなくつてよ。

16 夫　あんな事つて？

17 妻　だいいち，あなたのところへ來たお客ぢやないでせう？餘計な口出しはしないで下さい。

18 夫　あんな事つて，いつたいどんな事を言つたかなあ。

19 妻　いちいち覺えてもゐませんけれども，とにかく來客の前で妻に恥をかかせるといふ事は，夫として妻に對する道ではないでせう？

20 夫　えらいむつかしい事になつて來たなあ，まあ好いよ。

21 妻　まあ好いよぢやありませんよ。

22 夫　あゝさうか。片山さんの問題だらう？あれは仕方ないさ。正當防衛だからね。だつて，默つて聽いてゐると，段々僕が片山首相の親友だといふことになつて行くからこいつは大變だと思つて，さうぢやないと云ふことを言つたんだよ。

23 妻　親友だと言つたつて好いぢやありませんか。

24 夫　さあ，そんな事を言ふから話が違つて來るといふんだよ，僕と片山さんとは何の關係もありやしないぢやないか？片山さんと親友だといふのは，それは齋藤君の話だらう？その齋藤はなるほど僕の親友だけれども，片山さんと僕との間には何の關係もありやしないぢやないか。

25 妻　だつて親友の親友でせう？

26 夫　親友の親友……！

27 妻　親友の親友なら，やつぱり親友ぢやありませんか。

28 夫　馬鹿な事を云ふなよ！そりや親戚關係の話だらう！親戚関係の話なら，僕と齋藤とが親戚で，齋藤と片山さんが親戚だつたら，そりあ或は片山さんは私の親戚ですと言つたつて好いかも知れないけれども，親友關係はさう行かんだらう？

29 妻　詳しく云へばさうでせうけれども……

30 夫　詳しく云はないで，その邊をゴチヤゴチヤッとみんな一緒に親友にしちやふか？そりやあ一寸無理だらう。さうはいかん。それに齋藤つて男の話はあてにならないよ。齋藤は或いは片山さんを知つてゐるかも知れない。けれども片山さんの方で齋藤を知つてるかどうかは，こりやあまた別問題だ。

31 妻　だから私，別にさうハツキリとそんな事を言つた覺えはないわ。

32 夫　さあ其處なんだよ。問題は！さすがに多少良心がとがめると見えて，さうハッキリしたことは言はない。上手にぼやかして云ふ。其處なんだよ問題は！さういふ言ひ方が側で聽いてゐて実に氣持が惡いんだ。あゝいふ時にはむしろハツキリと嘘をついて貰つた方が氣持が好いね，だつて結果はどうせ同じことになるんだらう？結局はつまりなんだらう。なんとかして片山首相が自分の旦那さんの親友だといふことにしてしまひたかつたんだらう？え？

33 妻　(急に茶碗をガチヤガチヤと片づけ始める。)

34 夫　(顔をのぞきこむやうにして) さうだらう？え？ところが詳しく云ふと，どうもさういふ事にならないものだから途中でだいぶ手を燒いたわけなんだらう？さうだらう？

35 妻　(茶碗を盆にのせて起ち上る。)

36 夫　(引きとめて) まあちよつと待てよ，さうだらう？

37 妻　お盆がひつくり返るぢやありませんか！

38 夫　(手をはなして) ね？さうだらう？

39 妻　さあどうですか。(勝手元に去る)

40 夫　（ついて行く）さうなんだよ。だから話が時々なんだかゴタゴタしちやつて，聽いてゐられなくなつちやつたのさ。（勝手元の入口に立つて）お客樣の方でも，何と云つて相槌を打つて好いかわからなくなつたと見えてとうとう三人とも默つちやつたらう？だから僕が皮肉つたのさ。御當人にだけわかつてゐる話といふやつはちよいちよいきくが御當人にもわからない話といふ奴は今日はじめて聞いた。

41 妻　（勝手から出て來る）もうそんな事はどうだつて好いぢやありませんか。（机をふきはじめる）

42 夫　さうだ！ハツキリした事は何一つ言はないと云つたが一つだけお前はハツキリと嘘をついたよ。

43 妻　（拭く手を止めて）何ですつて？

44 夫　「よく遊びにいらつしやる」と云つたからね。

45 妻　（再び拭きはじめる）あれは齋藤さんのことを言つたんですよ。

46 夫　いやさうは聞こえなかつたよ。嘘だと思ふなら歸つて行つた人達に聞いてごらん。

47 妻　だつて齋藤さんはしよつちゆう遊びにいらつしやるでせう？

48 夫　だから齋藤は來るさ，齋藤は來るが——片山さんは來ないだらう？

49 妻　だから……

50 夫　だから其處の所をゴツチヤにしちや不可ンと云ふんだよ。お前の話はしよつちゆう片山さんと齋藤がゴツチヤになつてゐたがその「よく遊びにいらつしやる」といふ話もさうだつた。齋藤さんが遊びにいらつしやるやうでもあり，片山さんが遊びにいらつしやるやうでもあり，またどうかすると片山さんと齋藤さんとが二人で遊びにいらつしやるやうでもあり……なんだか妙な話だつたよ。

51 妻　（激しく起ち上つて）もう好いですよッ！（勝手元へ行く）

52 夫　とにかくお前のは……（としばらくニヤニヤ笑つたのち）ちよつと變つてるよ。個性だね。とにかく，かうだと好いんだがな……と思ふと，何の反省もなく，極く無邪氣に，ふツとそれが口に出るんだ。つまり（と口を指しながら）此の邊の構造が極く簡單に出來てるんだね。そして，口に出た瞬間には，もう心で半分さう思つちやつてるんだから叶はない。別に惡氣はないんだ。口ばかりぢやない，手もさうだよ。僕と將棋をさす時だつてさうだらう？取られさうになると「此の駒はこつちにあつたのぢやないかしら……」なんてツて指でちよつと横へ押す。お前は押したつもりぢやないかも知れないが，指が自然と動いてるんだ。押せば，駒は輕いものだから押された方へ動く。さうするとお前はそれを見て「さうだわ，これはやつぱりこつちにあつたんだわ」なんて云ひながら，とうとうこつちにあつたことにしてしまふ。ずるいツてんだか，あつかましいツてんだか，無邪氣ツてんだか，とにかくお前のは意識そのものが無茶苦茶なんだよ。ずるい事をしながら別にずるいとは思つてゐないんだから，喧嘩しようにも喧嘩の相手がないわけだ。

53 妻　（再び出て來て坐蒲團を片づけはじめる）將棋の話はそれは少し話が違ふでしよ？

54 夫　ちがはないよ。
55 妻　ちがひますよ。
56 夫　ちがはないよ。
57 妻　ちがひますよ。

妻は座布團をすつかり片づけて部屋の一隅につみかさねた後，改まつて夫の前に坐る。

58 妻　それはそれとして，私の言分も聽いて下さらない？私ちよつとあなたにお願ひがあるの。
59 夫　(蠅を探しながら) 何だ。
60 妻　(蠅叩きを取りあげて) まあちよつとこちらをむいてちやんとお坐りなさいよ。
61 夫　(坐る)
62 妻　私はどうせさう頭の好い女ぢやありませんからね。頭の好いあなたにはかなひませんよ。そりやもう，あなたがそばでお聽きになつたら，どうせ穴だらけに違ひありません。だからお客樣のお歸りになつた後で御注意下さる分には，いくら御注意下さつても一向差支へございません。むしろ大いに注意して頂きたいと思ひます。その代りどうかお客樣のゐらつしやる前では絶對に口出しをなさらないで下さいな。わたしもあなたのお客樣がいらつした時には絶對に口出しをしませんから，ようございますね？
63 夫　ハツ！御命令通りにするであります！
64 妻　冗談でなく。
65 夫　はいはい。(蠅を叩きはじめる)
66 妻　もし約束が違つたら何を買つて下さる？
67 夫　何も買つてやらないよ。
68 妻　ピアノ買つて下さる？

69 夫　(びつくりして) ピアノ？
70 妻　齋藤さんがしきりに賣りたがつてたでしよ？少し古いけれども好いピアノよ。トラツクで運んでくれるさうよ。
71 夫　(傍白) うるさい男だなあ。此の齋藤つて男は！
72 妻　ね？いいでしよ？
73 夫　(吐き出すやうに) あゝあゝ何でも買つてやるよ。
74 妻　(手をつかむ) 指切り。
75 夫　約束をたがへたらだよ？約束もたがへないのに買ふと思つちやあいけないよ。
76 妻　えゝ，そりあわかつてますよ。指切り。(と無理やりに指切りをする) ぢやああなたが約束をおたがへになるのを待つてますから。
77 夫　絶對に口を出しちやあいけないのか？
78 妻　さう，絶對に駄目よ。

妻は本箱からアルバムを出し，机の上に置き一ケ處を開けてしきりに眺めてゐる。

79 妻　(やがて) あなた片山さんとは本當に何の關係もおありにならないの？
80 夫　何の關係があるもんか。
81 妻　(やや顔を上げて相變らずアルバムを眺めたまま) では此の……あなたのうしろに立つてゐる人は…これは誰？
82 夫　(蠅をねらひながら) 何？
83 妻　片山さんぢやないんですか？
84 夫　(蠅を叩いた後，近づきながら) 片山さん？どれがさ。
85 妻　(指して) この人。
86 夫　(見た後傍を去る) 馬鹿な！

87 妻　ちがひます？

88 夫　ちがふよ！それは竹屋ツてツて，前橋で開業してゐる歯醫者さんだよ。馬鹿だなあお前は！（また近づいて見る）なるほどよく似てる！はツはツは！（そばを去る）

89 妻　そつくりだわ！

90 夫　（笑ひながら）しかしなんだよ。そんなものを見せて，これが片山さんですなんて言ふんぢやないよお前，え？（直感でハツと感づいて俄然緊張しながら）それとももう云つちやつたのか？（激しく起ち上つて）もう云つちやつたな？

91 妻　（アイマイな聲で）え？……えゝ……まあ……

92 夫　（一歩近づいて激しく）言つちやつたのか！

93 妻　えゝ。

94 夫　ウエ……！

95 妻　私からさう云つたわけぢやありませんけどね。渡邊さんの奥さんが『これは片山さんですね』と仰言るから，私つい『えゝ』と言つちやつたわ。だつて仕方がないでしよ？

96 夫　（蠅叩きをなげ出し，ごろんと仰のけになつて）あーあ！かなはねえなあ，まつたく！

97 女客甲　（戸の外で）御免下さいませ。

戸の外には女客甲，乙，丙及鳥居惠子女史が立つてゐる。
夫は起き上る。妻は急いでアルバムを元のところへ直し，玄關へ行つて戸をあける。

98 妻　あら，いらつしやいませ。

99 女客甲　御めん下さいませ（速口に）あの……またお邪魔に上りましたのよ。實はね，途中で鳥居さんに……

あゝ御存じでいらつしやいますかしら，こちらは鳥居さんと仰言つて婦人會長をして，おいでになる方ですが……

100 妻　あ，さやうでいらつしやいますか……

101 鳥居　鳥居と申します。どうぞ何分とも宜しくおねがひ致します。

102 妻　いゝえ，こちらこそどうぞよろしく……

103 女客甲　途中で偶然お會ひいたしましたのよ。そしたら…

104 妻　さ，どうぞお這入り下さいませ，さどうぞ！（と座敷へ行く）

105 女客甲　そしたら，ちよつとした相談が持上つたものですから……

106 妻　（座布團を出す）どうぞこちらへ！

女客達はお互に一言二言云ひ合つたのち，うなづき合つて這入る。

107 妻　どうぞお上り下さいませ。こんなところで失禮ですけど。

客はちよつとためらつたのち上る。主人とは輕く挨拶を交す。

108 女客甲　（主人に）どうも度々お邪魔を致しまして。

109 夫　いゝえ，どう致しまして。

110 女客甲　（紹介して）こちらは婦人會長の鳥居さんと仰言います。

111 鳥居　はじめて　お目にかかります。

112 夫　あ，さうですか……　はじめて……

113 鳥居　どうぞよろしくおねがひ致します。

114 夫　どうぞ宜しく。

上のセリフと同時に次のセリフが交される。

115 妻　さ，どうぞ，お敷き下さいませ，どうぞ！（勝手元へ行かうとする）

116 女客乙，丙　（起つて行つて妻をとめる）

117 女客乙　あの……奥さま，どうぞもう本當にお構ひ下さいますな。

118 女客丙　奥様，どうかもう決して……

119 妻　でも……

120 女客乙　實はちよつとおねがひがあつて引き返して參つたのですから……

121 女客丙　すぐ失禮致しますから……

122 女客乙　ほんとうに……

123 妻　さうですか？（坐る）

一同着席

124 妻　ほんとうに皆さまよくいらつして下さいました。

125 鳥居　（あたりを見廻して）結構なお住居ですこと。

126 妻　いいえ，むさくるしいところで。

127 鳥居　それでもよくこんなにお綺麗に……此の家はね，實は元わたくし共が建てたものでございますがね，えゝえゝところが一昨年の夏，借家を二三十軒整理致しましてね。えゝえゝその時此の家も宮田さんにお譲りしたやうなわけでございますよ。えゝえゝ只今では其處の所にちよつとした橋みたいなものがございましよ？あれから十七八丁先までがわたくし共の地所になつてをりますがね。えゝえゝ借家も只今ではもうほんの七八十軒になつてしまひましたよ。えゝえゝ，此の家も一昨年までは，私共の工場で使つて居りました中谷初太郎と申す者が這入つて居りましたのですがね，

えゝえゝその後高崎の方に私共の工場の分工場ができまして，只今では其の方の專務取締を致してをりますよ。えゝえゝいえもう腕は立派なものです。なかなかよくやつてくれます。えゝえゝ……

128 夫　（皆が向ひ合つてゐる眞中の机を鞭叩きで叩く）

129 妻　（睨みつけて）あなた！何でせう……

130 女客甲　（鳥居女史に）では如何でせう，早速あの方のお話を……

131 鳥居　さうさう。そのお話をしなければ……（妻に）實はちよつとおねがひがありましてね。あの……お宅様はなんですつて，あの……こんど總理大臣におなりになつた片山さんとは特別にお親しい御關係ださうですね……

132 妻　いゝえ別にそれほどでもないんですけど……

133 鳥居　いゝえ結構でございますよ。えゝえゝお偉い方ださうですね？

134 妻　あの……　へへへ……實は親しいといふほどでもないんですけど……

135 鳥居　それで實はちよつとおねがひなんですが，わたくしも婦人會長として，就任致しました以上は何か致しませねば皆様に申しわけがありませんからね。えゝえゝそれでまあ一つあなたのお取りなしで，片山さんにでも來て頂いて，こちらの婦人會のために何か有益なお話でも承はつてはといふ事になりましてね。えゝえゝ……

136 妻　あの……片山さんにですか？

137 鳥居　えゝえゝ。

138 妻　あの……總理大臣の？

139 鳥居　えゝえゝ。

140 妻　來て頂くのですか？

141 鳥居　えゝえゝ。

142 妻　こんな村へ？

143 鳥居　えゝえゝ。

144 妻　（大袈裟に）さあ……（夫の方を見て）あなた，どうお思ひになります？

145 夫　（此の時までは緊張して注視してゐるが，皆が一齊に視線を向けると，急に鬚を叩きはじめる。）

146 女客甲　（妻の顏を見て）駄目でせうか

147 妻　（女客甲の顏を見て）ちよつと……ねえ……

148 女客乙　でもちよいちよいこちら樣へお見えになるのではございませんか？

149 妻　えゝ，お見えになりますけどね……でも近頃はなかなかお忙しいやうですから，どうですかしら…

150 女客丙　さうでせうねえ，ちよつと新聞などで拜見したところでも隨分……

151 女客甲　でも其處のところを奥さまに何とかして頂くのよ。あなた！

152 女客丙　何とかして頂くつたつて，そりやあなた無理だわ。お親しい仲と云つても，どの程度までお親しいか，それは私たちにわからないでせう？

153 女客乙　そんな失禮なことを云ふものぢやないわ。來てお泊りになると仰言つてるんですものねえ？（と妻に）

154 女客甲　そりやさうよ，あなた！そりやモウこちら樣から一言おねがひして頂ければ，それやあ來て下さることは來て下さるわよ。けれどもそれだけにまた奥樣に責任がかかるわけなのよ，さうですわねえ奥樣？（と妻に）

155 妻　ええ，そりやモウ主人からお願ひするとなれば葉書一本で解決する問題ですけど……（夫は鬚叩きを振り上げて妻の背中をぶたうとするが，次の女客たちの騒ぎ方の激しさに氣を奪はれて中途で止してしまふ）

156 女客甲　（飛びつくやうに妻の方に向つて坐り直しながら，激しく）奥さま！ぢやあ何とかしてお願ひ出來ないものでせうか?!

157 女客乙　（激しく妻の手を取つて）責任の点なら私たちが絶對にお引受け致しますから……

158 女客丙　（乘り出して激しく）本當ですわ，奥さまに氣まづい思ひをおさせ申すやうな事は絶對に致しませんわ……

159 女客甲　本當に大丈夫ですから……ねえ鳥居さん。

160 鳥居　えゝえゝ，そりやモウ皆さんの仰言る通りです。えゝえゝ，わたしがついてゐる以上は絶對に，えゝえゝお金なら少々のことは私共の方で何とでも致しますから，えゝえゝ。

161 女客甲　（前の姿勢のままで）奥さま，おねがひ致しますわ！

162 女客乙　（同）是非おねがひ致しますわ！

163 女客丙　（同）本當は會員全部でお願ひに上る所なのですけど，それではかへつて御迷惑だらうと云ふことになつて，その代りにわざわざ會長さんにお出でをねがつたのですから。

沈　默

164 妻　さうですねえ……（一寸考えたのち）ではまあとにかく衝るだけ衝つて……（女客一同は一齊に手をついてお體を云はうとする，同時に夫が妻の背中

を蠅叩きでどやす)……みても好いやうなものですけれども，其処がねエ……エヘヘヘヘヘ……わたし困つちやつたわ……

165 女客甲　でも本當に奥様のお力で，何とかお取りなし下さるわけには參りませんかしら。

166 妻　(笑ひながら) さあ……

167 女客乙　(遠慮した小さな聲で)一寸御主人に一筆……(あとは何と云つたかわからないが口だけ動かして，最後に妻の顔を凝と見てうなづく)

168 妻　エヘヘヘヘ……　私困つちやつたわ……(夫の方に半ば身體を向けて) ねえあなたどうでせう。(良人は蠅叩きを上げてジツと蠅を狙つたまま動かない) 齋藤さんにさう云つてやれば何とかならないかしら……(夫はやはり同じ姿勢のまま) 何とかなりますわね？ (夫はやはり同じ格好) 好いでせう？

ここで長い緊張の瞬間を置く。夫は蠅叩きを上げたままの姿勢，女客一同は片膝をのんで半ば夫の方に上體を向け，じつと下を向いてゐる。

169 妻　好いでせう？

こんどは二三秒の短い間を置く。

170 妻　ぢやあ……何とも申しませんから多分何とかなるんだらうと思ひます。(良人は啞然として妻の顔を見る)

171 女客一同　(一齊に手をついて) ありがたうございました。では宜しくお願ひ致します。(皆がお叩頭した瞬間に夫はおそろしい顔をして妻を睨みつけながら蠅叩きで思ひきり背中をどやす)

172 妻　あ痛ツ！(と夫の顔を見る)

173 女客一同　(こんどは夫の方に向つてお叩頭(じぎ)する) ありがたうございました。(夫は蠅叩きを上げて女客たちを片つぱしから叩きさうな格好をする。妻はあわててこれを制止する)

174 女客甲　(大袈裟に胸をなでおろしながら) まあ好かつた！

175 女客乙　(同じしぐさ) 好かつたわ……

176 女客丁　ごめん下さい。ポスターが出來上りましたから…

177 女客丙　須藤さん，どうも御苦勞さまでした。

178 鳥居　まあお早かつたこと。

179 妻　どうぞお上り下さいまして。

180 女客丁　失禮致します (上つて夫に) お邪魔致します。大急ぎで書きましたのでとても不出來なんですけど。

181 女客乙　では早速ポスターをお目にかけては。

182 女客丁　さうね一寸御免遊ばせ (ポスターを正面にかけて) いかがですか？

(一同ポスターを眺める。ポスターにはでかでかと「片山首相〇〇村に來る！」「〇〇村婦人會主催，片山首相を圍む夕」などと書いてある。

183 妻　まあ！すばらしいポスターだこと！

184 女客乙　何月何日といふところだけは空けてございますが，此の方は至急御決定ねがへますでせうか。

185 妻　えゝ，それはモウ決定次第お知らせ致します。皆様も新聞などで御存じの通りあゝ云ふお忙がしい方のことですから，暇が無いと云へばマア無いやうなものですけどね，しかしお國の事も大事は大事だがそれぢや君，神經が續かんよ。二日や三日君が居なくつたつて誰かが何とかするだらう。たまには息ぬきに田舍へ逃げ出して來た方がかへつて好いぢやないかなどと，こないだも主人が申し上げて居りましたわ。さうしたら，そりやあ御馳

走さへ出るなら何時だつて逃げ出して來るよ。なんて御笑談を仰言いましてね……

186 女客甲　まあ，面白い方なんでございますね……

187 妻　えゝ，そりや面白い笑談を仰言いますのよ，齋藤さんといふ方は。

188 女客乙　齋藤さんと……仰言いますと……?

189 女客丙　あゝ片山さんは御養子さんですか……

190 妻　えゝ……いえ……齋藤さんといふのは……

191 女客甲　(丙の膝を叩いて) あなた，それより大和屋さんの方は大丈夫？

192 女客乙　そりや鳥居さんに一言さう云つて頂けば大丈夫でせう，ねえ鳥居さん？

193 鳥居　えゝえゝわたくしが一言さう申しましたら大丈夫です。えゝえゝ大和屋の主人といふのは以前わたくし共の方で使つてをりました男ですからね。ええええゝ。

194 妻　食糧の方などは大丈夫でせうか？

195 女客乙　(笑つて) 食糧などは問題ぢやございません，大和屋なら五十人や百人のお客は何時でも引き請けますわ。

196 鳥居　えゝえゝ。大和屋がぐづぐづ申しましたらね。ええええゝ，大和屋がぐづぐづ申しましたら，お米の一俵や二俵はわたくし共の方で何とか致します。えゝえゝ。

197 妻　一國の總理大臣をつかまへて，お米を五合さげて來いとは，いくら宅でもちよつと申し兼ねますからねえ……そりやあまあ隨分失禮な事も申し上げるやうですけれども……

198 鳥居　えゝえゝ。そりやもう何なら一俵背負はせてお歸し申しても構ひません，えゝえゝ……(皆笑ふ)

199 妻　(笑ひながら) さあそれはどうですか……

200 鳥居　お宅樣は……お米などは御不自由はございませんか？

201 妻　えゝお藤さまで，まあどうやら……

202 鳥居　あの……御不自由でしたら何時でもお屆け致しますよ，えゝえゝ——お酒などは間に合つておいでですか？

203 妻　えゝ，お酒の方は別に……

204 鳥居　あの……御不自由でしたら何時でもお屆け致しますよ。えゝえゝ——お野菜などは，お作りになつてゐますか？

205 妻　(少し怒つて) たくさん作つてますわ！

206 鳥居　さうですか？御入用の時はいつでもお屆け致しますよ。えゝえゝ——おさかななどは……

207 女客甲　(鳥居女史の腕を叩いて) あの……奥さま，ではあまり晩くならないうちにちよつと大和屋の方へ寄つて歸りませうか。

208 鳥居　あゝ，さうでしたね。では早速參りませう。

209 女客甲　(改まつて) では奥樣，大變お邪魔を致しました。ではまあどうか宜しくお願ひ致します。

210 女客乙　本當に欣(よろこ)くお引請下さいまして，ありがとうございました。(お叩頭(ひれ))

211 女客甲，丙　ありがたうございました。(お叩頭)

212 鳥居　(お叩頭して) ではまあどうぞ宜しくおねがひ致します。

213 妻　畏りました。どうもお茶も入れませんでほんとうに御無禮申し上げました。

214 鳥居　(起ちながら輕い口調で) 片山さんにも宜しく仰言

つといて下さい？

215 妻　あら，あなたも片山さんを御存じなんですか？

216 鳥居　（草履をはきながら）いえ，わたくしの方では存じませんけれども，向ふで御存じかも知れませんからね，えゝえゝ。

217 女客丙　（草履をはいてしまつてから）あゝ，さうだ！あの……これはちよつと別な事ですけれどもねえ，奥様……あの……そら……此の前拜見させて頂いた寫眞ですねえ……

218 妻　ハア……

219 女客丙　あの……そら……片山さんと御主人と御一緒にお寫しになつてゐるのがございましよ？

220 妻　ハアハア……

221 女客丙　實は婦人會雜誌の特輯號を出すことになりましたのよ……ですからあのお寫眞を卷頭に載せたらと皆さんがさう仰言いますの。お差支へございませんでしたらあれを二日ばかり拜借させて頂きたいんですけど……

222 妻　（景氣よく）ハアハアどうぞ！（とアルバムを取りに行かうとしてうしろを向いたとたんに，待ち構へてゐた夫が鞭叩きで頬つぺたをピシヤリと叩く）あ痛ツ！（見物の笑聲が鎮まるのを待つことなくちよつと夫の方を睨みかへしたら，すぐ次のセリフを云ふ）あゝ，あのアルバムは今ちよつと……

223 女客丙　さうですか，それではまた改めて頂きに上りますわ。どうもお邪魔を致しました。

他の客も「では失禮させて頂きます」「では御免下さいませ」などと云ひながら退場。
妻も玄關まで送つて出る。夫は正面奥に突つたつたまま緊張して妻の一擧一動を見守つてゐる。
妻は平氣な顔をして，まづ座布團を片づけ次に机の上を拭きながら，ひとりでクスクス笑つた後に云ふ。

224 妻　あの鳥居さんと云ふ人は，あれでも昔はなんですよ。異人さんに結婚を申し込まれたことがあるんですつて，異人さんつて，あんな顔が好きなのかしら……オホホホホ……（突然夫の方を振り向いて激しい囁き聲で）あなた！氣がおつきになつて？（相手をぶつやうな具合に手を動かしながら）あれは鬘よ！鬘をかぶつてるのよ！凝と額の生え際を眺めてゐるうちに，私オヤツと思つて氣がついたから，それからしよつちゆう氣をつけて見てゐたら，たしかに鬘だつたわ。本當よ。此の次いらした時には其の眼でよく見てごらんなさい。（またクツクツ笑ひ出して鳥居女史の口調を眞似ながら）『えゝえゝ，その後高崎の方に私共の工場の分工場ができましてね。えゝえゝ只今ではその方の專務取締を致してをりますがね，えゝえゝ，いえもう腕前は立派なものですよ。えゝえゝ，なかなかよくやつてくれますよ。えゝえゝ……』

225 夫　（鞭叩きで輕く連續的に妻の肩を叩きながら）おいおいおいおいおいおいおい……

226 妻　（顔を見た後）何ですか？

227 夫　何ですかぢやないよ君！

228 妻　どうして？

229 夫　（横を向いて溜息をつき乍ら）あーあ。

230 妻　どうかなすつたの？

231 夫　（突然はげしく鞭叩きでビラをばたばたと叩きな

がら）これは一たいどうするつもりなんだよ，これは！

232 妻　邪魔ならのけませうか。

233 夫　（ガクリと腕を垂れ，ゲンナリした顔をして妻の顔を眺めながら溜息をつく）

234 妻　あゝ，片山さんを呼ぶ話ですか？それは……それは……それはあなた何ぢやありませんか，やつぱり……なんでしよ。齋藤さんにでもさう云つてやるより仕方がないでせう。

235 夫　齋藤さんにどう言つてやるんだ。

236 妻　どう言つてやるつて……そりややつぱり……なんぢやありませんか……あの……片山さんに來て頂くことになつたから御都合をお伺ひして，至急日取りを決めて下さいつてさう云つてさう言つてやれば好いでせう？

237 夫　（嘲笑と怒氣の交つた笑ひ聲で）さう言つてやれば片山さんが來るか！

238 妻　來ません？

239 夫　（爆發的に）ジョジョ冗談ぢやないよ君！（ゴロンと仰のけに寢て天井を眺めながら大きな聲で）あーあ！

沈默。妻はしばらく夫の顔を見てゐるが，やがて机の上に眼を落し，それからモジモジしながら，やや眞劍に物を考え始めた樣子を見せる。

240 妻　ぢやあ駄目でせうか？

再び沈默。妻は机の上に置いてあつた書物を手に取って，その表紙を折つたり曲げたり或は皺をのばしたりし始める。

241 妻　だめだつたらどうなるの。

三度目の沈默，妻は殺々と手に力を入れて書物の表紙を虐待する。夫は仰のけに寢たまゝ動かない。

242 妻　（少し昂奮の籠つた顫え聲で）駄目だつたらいつたいどうなるの？

243 夫　（やおら起き上つて，妻と共に机に向つて坐りしばらく妻の顔を見てゐる。やがて妻の手をとめて）表紙がとれちやふぢやないか。

244 妻　（二三秒不動。然る後やにはに机の上にうつぶせになつて激しく啜り泣き始める）……駄目だつたら……（泣き出して）駄目だつたらどうなるの……

245 夫　（机の上に肘を突いて，妻の顔を見ながら）わかつたか。

246 妻　（激しく顔をあげて，憤激の調子で）駄目だつたらあなた，いつたいどうなさるつもり？

247 夫　（落ちついた口調で）それはおれの方から訊きたい事だ。駄目だつたらお前，いつたい，どうするつもりなんだ　え？

248 妻　（泣き伏して）どうなつたつて好いわ……

249 夫　（おだやかに）さうも行かないだらう。今歸つて行つた連中が大和屋へ行つて宿の交渉をして村中に廻覽板を廻してそれからかういふビラを方々にベタベタ貼つてしまつたら……それからどうなるんだ。

250 妻　（泣き伏したままの姿勢で）ぢやあ私はいつたいどうすれば好いのヨウ！今頃になつてそんな意地の惡い事を云ひ出さないで，どうしてみんなの前で，私が訊いた時に駄目なら駄目とハツキリ言つて下さらなかつたの？どうして默つて聞いてゐらつしたの？

251 夫　(大きな聲で) ピアノを買はされちやあたまらんからだよ!!

三秒の沈默

252 妻　(力のないセリフで) ぢやあつまり，なんですね，みんなしてわたしをやり込めたわけなのね? 計畫的に!

253 夫　(前よりはもつと大きな聲で，頭つから喝鳴りつける) 誰もお前をやり込めたわけぢやないよ!! お前が自分で勝手にやりこまつたんだよ!!! 計畫的に!

此處で長い沈默。
妻は最初の間昂奮に身體中を微動させ乍ら兩手で机の緣を攫んで坐つてゐる。やがて昂奮が鎭まり，眼が蕩とすわる。それから，机の上に肘をついて考へ込む。やがて眼を上げたかと思ふと，机の上の右を見たり左を見たりして決心の一歩手前の動搖を示すこと數秒，つと起ち上つたかと思ふと，悲壯な面持を以て屹と前方を凝視したのち，すみやかに身を轉じて玄關の方に向つて歩き出す，上りかまちの所に來ると，夫の方に向つて坐り，兩手をついて，神妙な口調で次のセリフを云ふ。

254 妻　(神妙に) わたしが惡うございました。(それから草履を穿かうとする)

255 夫　(妻の一擧一動を見守つてゐたが，最後の頃には段段と不審の面持を示し，此の時忽ち不安に襲はれ，あわてて駈けつけ，妻の手を攫んで激しく) 何處へ行く!

256 妻　(手を離さうともがきながら) 私が惡かつたのです!

257 夫　(なほ强く手を攫んで) 何處へ行くんだ!

258 妻　(同じ動作) ちよつと……ちよつと……離して下さい!

259 夫　(引き戻しながら) 待て! 待てといつたら!

260 妻　(同じ動作) 私が惡かつたのです! 留めないで下さい!

261 夫　(ぐいと力强く引き戻しながら) 待て!
(妻はその勢で上りかまちに ドスンと 尻餅をつく。夫は背後から妻を絆と抱きしめ，凝と顏を見る，數秒の間を置く，やがて) 馬鹿なことをするんぢやないぞ!

沈默。妻は夫に抱きとめられたまま，激しく息使ひをしてゐるが，そのうちに段々と昂奮が鎭まつて行く。夫の方はまだ昂奮が鎭まらない。

262 妻　(やがてふと夫の顏を見て怪訝な顏をする。それからニヤニヤ笑つて) あなた，私が何處へ行くとお思ひになつたの?

263 夫　何處へ行くつもりだつたんだ。

264 妻　(クツクツ笑つて) 鐵道自殺でもするとお思ひになつたの?

265 夫　さうぢやないのか。

266 妻　(上體を起して) あらいやだ! (睨みつけながら，叱りつけるやうに) いやだわ!

267 夫　(輕く頬べたを手で突いて) 馬鹿野郎!

268 妻　しかし今のは何だか芝居みたいだつたぢやないの? 何だかかう變にうまく行つたぢやないの? (甘えて夫の兩腕をつかみながら) ねえ! びつくりなすつたの? ほんとにびつくりなすつた?

269 夫　(身を引きながら) さあどうだか……

270 妻　(夫の兩腕を强くゆすぶりながら) ねえ，ちよつと言つてごらんなさいツてば! 私が死ぬと思つたらどんな氣持がして? ねえ!

271 夫　（席を起たうとしながら）どんな氣持もしないよ。

272 妻　（縋りつき顔を覗き込みながら）心臟の鼓動がとまつたやうな氣持がして？

273 夫　何を言つてやがる。

274 妻　一瞬にして全身の血が凝結したかと思つた？

275 夫　おいおい，お前は少しくだらない小說を讀みすぎるよ。讀むのは好いがね，さういふキザな文句を覺えてゐて振り廻すのだけは止せよ。

276 妻　はいはい。どうも失禮致しました。（起ち上つて）ではちよつと行つて參ります。

277 夫　何處へ行くんだ。

278 妻　大和屋まで

279 夫　大和屋？

280 妻　だつてあの人たちは大和屋へ行くと言つたでしよ？私ちよつと行つてあやまつて來るわ。

281 夫　（びつくりして妻の顏を見る。それから次の妻の言葉を聞く間にまるで初對面の人に對するやうに，きちんと正座して兩手を膝の上に置く。）

282 妻　だつて仕方がないんですもの。とにかく嘘を言つたのは私が惡かつたんですから，さう云つてちよつと謝つてくるわ。今のうちなら大和屋にゐるでせう。

283 夫　（腕を組んで）フーン！

284 妻　（輕く）なアに？

285 夫　（凝と顏を見て）お前ほんとうに謝りに行く氣か。

286 妻　（輕く）行つちやあ駄目？

287 夫　いやいや，そりやモウ勿論行くのが一番好いんだけど……。フーン……さうか！

288 妻　（笑つて）あら，どうして？

289 夫　（組んでゐた腕を解いて手を兩膝の上に置く）いやそれが好からう（深く溜息をついて）フーン！こいつはちよつと劃へられた。お前にそれだけの勇氣があらうとは思はなかつた。人は見かけによらぬといふが，なるほどさうだ。結婚して十年，今日はお前を見直したよ。

290 妻　（輕く夫をぶち）何いつてらつしやるのよ！人の氣も知らないで！そんなことどころぢやない，わたしどういつて謝らうかと思つて考へてるところなのよ。考へるとちよつと癪だわ。あの鳥居さんさへゐなければ謝り好いんだけど……さうだ！『ちよつとちよつと』と云つて三宅さんだけ表へ呼び出して『あのねえ，さつきは私ちよつと嘘を言つちやつたのよ。ごめんなさい』ツてさう言つて，ちよつと譯を話してさつさと歸つて來れば好いでせう？それぢやあ，おかしい？

291 夫　（今度は胡坐をかいて頭を掻きながら）ははあ……こりやどうも又もう一度見直す必要があるな。結婚して十年，今日はお前を二度見直したよ，二度見直すとまた元の通りだ。お前と云ふ女はどうも非常に賢いのだか非常に馬鹿なのだか，おれにはちよつとわからん。（としきりに頭を掻く）

292 妻　（元氣よく）ではちよつと行つて參ります！

ちよつと前から花道の蔭に鳥居女史，及び女客甲，乙，丙，丁が現れて，こそこそ內緒話をしてゐる。お互に『あなた行つて下さい』と云つて押しつけ合つてゐる樣子。やがて女客甲と鳥居女史とが行くことになつたらしく，花道を舞臺の方に向つて歩き出し，女客乙，丙，丁は元の位置に殘る。
次の女客甲のセリフは妻の「ではちよつと行つて參ります」に直ぐ續けて云ふ。

293 女客甲　(歩き出しながら) ではちよつと行つて參ります!

294 妻　(足をとゞめて) でも何だか厭だわ!

295 女客甲　でもなんだか厭だわ!

296 夫　しつかりやれよ!

297 女客乙　しつかりやつて下さい!

298 妻　相當の決心がいるわね。

299 女客甲　相當の決心がいるわね。

300 夫　思ひ切つて初めつから言つちやふに限るよ。

301 鳥居　思ひ切つて初めつから言つてしまふに限りますよ。えゝえゝ。

302 妻　言ふ事だけ言つて直ぐ歸つて來ますわ (格子戸をがらつと開けて) あらツ!

303 女客甲　(妻と同時に) 言ふことだけ言つてすぐ歸つて來ますわ (格子戸をガラツと開けて) あらツ!

二人は同時に『あらッ』と云つた後，默つて向ひ合つたまま四秒間顔を眺め合つてゐる。さうした後次の急き込んだ速口のセリフに移る。
(注意)。次のセリフは三〇四番から三一七番までは兩者が同時にまくし立てるので，なるべく相手に喋舌らせまいとして，できるだけ大きな聲を張り上げなければならない。セリフがづれて狂ふところがあつたら，速くなる方の俳優は適當に『あの…』を入れたり，同じ語句を反覆したりすることによつて關係を調節する。速度をゆるめることによつて調整してはいけない。

304 妻　(急ぎ込んで) ちようど好かつたわ! 私これから大和屋の方へ伺はうかと思つたのよ……

305 女客甲　(玄關へさツと飛び込んで妻と並んで立ち，急き込んで) その大和屋の事なんですけどねえ……

306 妻　といふのはね，といふのはね (玄關の外を覗いて) 鳥居さんはいらつやらないわね。ぢやあいいわ，あのね……。

307 女客甲　あの……大和屋の主人つて，ちよつと變な人でせう! 私達もう，少しいやになつちやつたんですのよ……

308 妻　あのね。わたし後で主人に散々お叱言を頂戴……さう，ちよつと變な人ですからね……

309 女客甲　ですからね，ですからね，取り消しならば取り消しのやうに早くしなくちや駄目でせう?

310 妻　さう! さうなんですよ! 早くしなくちや駄目でせう? だからわたし思ひ切つてあなたにねえ……

311 女客甲　そりや勿論，宿をしたい意志は充分にあると申しますの。そりやさうでせうねえ……

312 妻　(少し焦つて) だから一寸わたしの言ふ事を聞いて頂きたいの……えゝえゝ宿も宿ですけど，それよりもちよつとわたしの言ふ事を聞いて頂いてですね……

313 女客甲　けれどもですね，けれどもなにしろ唯今のやうな食糧事情ではですね……(焦つて) いえ宿の方が先決問題でせう……? ,ですから其の食糧事情がですねえ……

314 妻　私ね，私ね，今度はほんとうに反省しましたわ，でもほんとうにお騒がせしてすみませんでしたわ。別に惡氣があつて嘘を言つたわけではなかつたんですけどね……

315 女客甲　だから初めからあんな大きな事を言はなければよかつたのですけどね，えゝそりやあ勿論ですわ。勿論，反省は致しますけれども，今度の事は何と云つても……

316 妻　とにかく私のところの主人と片山さんとが親友であるやうな事を度々申し上げましたけれども，実

は親友でも何でもないんですから，此の點だけはどうか……

317 女客甲　もちろん惡氣があつて嘘を申し上げたわけではありませんけれども，食糧事情だけはどうするわけにも參りませんからねえ，食糧事情さえもう少し何でしたら……(ちよつと變に思つて) は?

318 妻　(殆んど同時にちよつと變に思つて) は?

沈默四秒

319 女客甲　あの……何でせうか。

320 妻　あの……何ですつて?

321 女客甲　いえ，あの……親友でも何でもないと仰言るのは……

322 妻　食糧事情と申しますと?

再び沈默四秒

以上の二重奏の間，夫は，最初不審さうな顏をして座敷に立つてゐるが，或る所で，ハツと緊張して裸足のまゝ玄關へ飛び降り，二人の背後に廻つて聽く。最後の頃には，何とかして妻の雄辯を制止して，相手の言葉に無づかせようとして，蠅叩きで妻の背中を叩いたり，切齒扼腕したりしてひとりでやきもきしてゐる。一番最後のセリフ，三一六番の時には背中を二三度どやす。兩者が沈默すると，蠅叩きを宙に上げた儘の姿勢になる。

鳥居女史の方では，極く最後に，ちよつと不思議に思ふ表情。しかし格子戸に耳をあてると同時に二人が沈默するので，格子戸に耳をあてたまゝの姿勢になる。

323 女客甲　(變な顏をしてゐたが，やがて) だから其の，食糧事情がですね……たとへば何でしよ，一國の總理大臣ともあらう御方に向つて，まさかお米を五合いくら持つて，お醬油を何勺瓶か何かに入れて下げて來て下さいと云ふわけにも參りませんからねえ……

324 妻　(ちよつと遲れて同時に喋舌る) まあ食糧事情も食糧事情ですけれども，片山さんとは本當に何の關係も……(夫に思ひ切り背中をどやされて磕と沈默する)

325 女客甲　それに……(云ひにくさうに) お酒が全然ないんですの。

326 妻　あゝお酒がね……

327 女客甲　お酒がなくつちやあ……ちよつとねえ……

328 妻　(だいぶ判りかけて) さうですね。お酒がないんでは……

329 女客甲　お米はまあ何なら皆さまに一勺づつ出して頂いても百人で一升集まるわけですけどねえ……でもお酒が無くちや　あなた，どうにもならないでせう?

330 妻　(釋然として氷解し大いに自信を取り戻した表情で) さうですか……お酒がないんですか!! (輕く) ぢやあお流れですね?

331 女客甲　えゝほんとうに殘念ですけど……

332 妻　(凱歌を奏する如く) お酒がなくなつちやあ　あなた，どうにもならないでせう?

333 女客甲　(口惜しさうに齒噛みして) わたしたちが惡かつたんですわ!

334 妻　(格子戸の蔭に鳥居女史をみつけ皮肉たつぷりにはしやいで，愛想よく) 鳥居さんどうぞお這り下さいまし! どうぞ! (鳥居女史はあわてて格子戸の蔭にかくれる。女客甲に向つて笑ひ乍ら) さうですか! お酒がないんですか! (振りかへつて夫の方を向き大はしやぎにはしやいで歡呼する) あなた，お酒がないんですつてさ! ハハハハ……(夫に睨んで制止されて笑ひを磕と止め，ぐつと自制

して女客甲の方を向き，讃み深い口調にかへつて）それでは　まあ致し方がございませんわね。では片山さんの方へはさう云つてお斷り致して置きませう。

335 女客甲　（泣き聲で）何とも面目次第もございません。（座敷へ駈け上つてポスターをさつと外す）

336 妻　（鷹揚に）いゝえ，どう致しまして。

337 女客甲　（ポスターを持つて，倉皇として逃げ出しながら玄關の所でちよつとお叩頭して）どうも申しわけがございません！（玄關を飛び出し格子戸をピシヤツと閉める）

女客甲は玄關を出ると，鳥居女史をほつたらかしておいて花道を一目散に退場。鳥居女史はその後を追ふ。四人が落合ふと一言二言交した後すぐ退場する。一方舞臺の方では，妻は，格子戸が閉まつた後數秒間（即ち女客が退場し切るまで）は「いゝえどう致しまして」と言つた儘の鷹揚に取りすました姿勢を崩さないで凝としてゐる。やがて觀客の視線が自分に集中すると，先づほつと溜息をつきヒヨロヒヨロとよろめきながら後退して上りかまちにどすんと腰をおろしハンケチを出して顔を扇ぐ。

338 夫　（大袈裟にモーションをかけて蠅叩きで妻のお尻を引つぱたく）

339 妻　あ痛たツ！（と夫を睨みかへしそれからハンケチで顔を扇ぐ）

――幕――

遲読の讃

關口存男

辞典と首っ引きでボツボツ読む外国語には，その遲々たるところに，普通人の気のつかない値打ちがあります。それは，„考える“ 暇が生ずるということです。否でも応でも吾人を „考える“ 人間にしてくれるという点です。

どんな好いことが書いてあっても，スラスラと読めたのでは，マア，大した効果はありません。どんなくだらないことが書いてあっても，その数行を繰りかえし繰りかえし読まなければならないとなると，それに関係したいろいろな事をついでに考えるから，上わすべりして読んでいる際には気のつかない色々な事に気がつきます。いわんや，多少くだる事が書いてある場合には，それを何度も何度も読みなおしたり，その数行を眺めたまま五分も十分も考えこんでしまったりするということは，単にそれを書いた人の真意に徹する機縁となるばかりではない，時とすると原著者の意図しなかったところへまでも考え及ぶという効果を伴います。

なさけないことには，御同様 „人間“ というやつは，とかく，考えないように考えないように出来ている。上わすべりするように上わすべりするように出来ている。スラスラ読める母国語ばかり読んでいると，うっかりすると，上わすべりした，ツルツルした，平坦な人間になってしまうおそれが充分にあります。

この平坦なツルツルした意識にブレイキをかけて，否でも応でも一個処を凝と眺めて考えさせるという効果，——外国語をやる主な目的は此処にあるのではないでしょうか?

ほんとうは，翻訳をしてみると，なお徹底します。どんな文章でも，これを全然たちの違った日本語で云いなおすとなると，原文を正しく理解しただけではまだ駄目です。原著者と同じ気持にならなければダメです。否，時とすると原著者以上の所へまでも乗り込まないと，その同じことを責任をもって引き受けて本当に日本語で再現することはできません。そのためには，何度も何度も同じ個所を読みなおして，自分自身の考え方を叩きなおす必要が起ってくる。問題は此処です。

考える力というものは恐ろしいもので，どんなツルツルした平坦な馬鹿野郎でも，否でも応でも考えないわけに行かないように仕向けられるというと，長い年月の間には，相当いろいろな事を考えるようになります。いったん考える癖がつくと，時とすると，何かのはずみに，甚だ馬鹿野郎らしくもないことを考えて，自分でビックリすることすら起って来ます。そういう馬鹿野郎が，ひとつ間違うと，文豪になったり，詩人になったり，偉人になったりしてしまうのです。偉人とか何とかいうのは，どうせみな，間違ってなるのですからね。一つ間違ったくらいではならないが，二つ三つ間違うと，偉人とか天才とか云った飛んでもないものになってしまうのです。間違いほどおそろしいものはない。

だから，そんな事になっては大変だと思う人は，あん

まり一つことをシツコク考えてはいけません。スラスラと，人の書いた通りに読み，人の考えた通りに考えておくのが，いちばん安心です。語学のやり方にもそんなのがある。

けれども，なんなら天才になったって構わない，と考える人は，あらゆる機会を利用して，自己独得の考え方を育成しなければなりますまい。ただし，その自己独得の考え方というやつは，自分ひとりで眼をつぶって考えていたって出て来るものではありません。人生は，たとえ大根一つ植えるのだって，最初はみんな人真似なんですから，まず人真似をしなければならない。問題は，どういう風にその人真似をするかです。

他の方面のことは知らないが，思想，文学，その他いやしくも „文“ に関係のある方面のことがらは，すべて „遅読“ が出立点ではあるまいか，とわたしは語学者らしい妙なことを考える次第です。

これには，私自身の体験も多分に加味されています。語学者として世渡りするためには，実のところを言えば，べつにそう大した考えは要らなかった。常識の範囲に終始し，人の考えそうな事を考え，人の言いそうな事を言うのが，これがむしろ語学の本義ですからね。——ところが，数行の文を，ほんとうに責任をもって人に理解させようとすると，どうしても，それを一応すっかり自分の考えにするために，何度も何度も読む，或いは遅読する必要が生ずる。現に教室の語学はすべて遅読です。——この遅読によって，わたしの頭の中には，別に語学とは当面何の関係もないような，いろいろな趣味と道楽が生じ

て来た。形容詞の語尾や動詞の変化とは直接大した関係はないのですが，語学を離れて，„そもそも人生というもの“ が面白くなってきたのです！人は，語学の副産物というかも知れないが，副産物にしては，これはまたあまりにも本問題すぎる！„人生が面白くなった“ なんて副産物は，これはもはや副産物ではない。こうなると，もはや主副を逆にして考えた方が正しいでしょう。

語学には直接大した関係はない，と云ったが，„間接“ には大関係があります。ここも問題が逆になって来るわけで，**語学にとっては，直接に関係のあることよりは，むしろ間接に関係のある事の方がズッと直接に関係がある……** ということが，あとになってわかって来た！

そして，それらすべてが，外国語が遅々としか読めなかったおかげなのです。(1956 年 11 月)

ひねる

„ことばをひねる“ ということは „考えをえぐる“ ということに等しい。„考えをえぐる“ ということは „人間をねる“ ということです。言語と思想と人間！„ひねる“ と „えぐる“ と „ねる“！

夫子みずからの人間をねることなしに，人を感服させるような思想をひねり出して，人の胸をえぐったり，人のドタマの中を掻き廻したりすることはできません。人

様の胸をえぐったり人様のドタマの中へ手を突っこんで掻き廻したりするためには，まずそう遊ばす御方自身頭の中が掻き廻っていなければならない，胸がえぐらっていなければならない。また，それらを言葉で表現したり説明したりする際には，言葉の言い廻しはむしろ第二段の問題で，それより前に，まず自分の考えていることを一抉り，二抉り，三抉り，右から抉って届かなかった所は左から抉って掘り下げ，左から抉って抉り足りなかった所は右からメスを廻して底を衝くといったようなあんばいに，誰が考えてももはやこれより以上は考えられないというところまで考え到った上でなければ，ほんとうの表現ができるものではない。

„表現をひねる“ とか „言葉をひねる“ とか „言い廻す“ とか云うことを言いますが，„考え廻す“ ことなしに „言い廻す“ なんてことはできません。言葉だけひねったって，ろくな言葉は出て来ない。考えをひねってはじめて適当な言葉が出て来る。

„言葉をひねるより考えを抉れ“? „考えを抉るより人間を練れ“? サア大変だ。まるで精神訓話みたい。してみると関口さんも，だいぶん焼きが廻ったかな? 昔はこんなヤボな調子のことは言わなかったようだが……

„文部大臣!“ だと? 誰ですか，くだらない野次を飛ばすのは。

野次を飛ばすのはチョットしばらくお待ちください。話というものは，聞いているうちに段々アベコベになって来て，おしまいにはアレッ? と言って舌を捲くことも無きにしもあらず。

まず，事をハッキリ考えていただきたいが，考えをえぐることなしに，単に „人間“ だけ練るなんてことができますか? „人間“ から „考え“ を取ってしまったら，後に残るのは „五尺の体軀“ だけです。人間に麻酔をかけて，すっかり眠ってしまったのを，按摩さんにでも揉ませるなら，それはなるほど „考え“ をこねることなしに „人間“ をこねてる，ということになるでしょうが，まさかそんな事を言ってるのじゃないということは申しあげるまでもありますまい。

次に，言葉をひねることなしに，考えだけひねるということは……たとえ芭蕉といえどもなし得なかったことだから，われわれ共のようなものに出来るわけがない。原稿一つ書くのでも，筆を取って机に向った瞬間にあらかじめ頭の中に持っていた（或いは大抵の場合単に持っていた „と思っているにすぎない“）考えなんてものは，たとえゲーテといえども，ろくな考えでは無かったろうということは，私は断言するに憚りません。それは恐らく，逆に引っくらかえったり，訂正を余儀なくされたり，混乱に陥入ったり，あわてて引っこめたりするための，滑稽千万な，偶然な出立点にすぎません。蹴っ飛ばすための踏台です。——そんな踏台を，そのまま人前に出していた日には，ゲーテはお笑い草，芭蕉は啖も引っかけてもらえなかったでしょう。

では，何が踏台を蹴っとばかすか? 言葉の苦心です。何がお笑い草をゲーテにしたか? 言葉です。何がオッチョコチョイを芭蕉にしたか? 言葉です。

理窟の上の順序と，„事実“ の上の順序とは逆です。理

窟の上では，人間あっての思想，思想あっての言葉ですが，事実の上では，言語あっての思想，思想あっての人間なのです。御存じの通り，理窟というやつは人間が考え出したもので，これは大抵の場合大したものじゃない。ところが事実というやつは，これは神さまがお作りになったもので，大したものです。前者はマア好い加減に聞いておいた方がよろしい。後者はほんとうによく噛みしめる値打ちがある。

ほんとうによく噛みしめると，こういう „事実" が発見される：人様の気持に喰い入ったり，人様のドタマの中へギャッと手を突っこんで脳味噌をえぐってやろうなどというイタズラをしていると，逆にこっちの脳味噌がえぐれっちまう。まことに皮肉な大自然のしっぺ返しで，好い気味です！ しょっちゅうそんな目にあって，目を白黒するほど煮湯を呑まされると，おしまいには……うっかりすると大天才になったり大思想家になったりすることがある……

„言葉" をひねっていると „考え" がえぐれ，考えがえぐれて来ると „人間" がねれて来る……これが言語と思想と人間の三位一体の神秘です。

それと同時に，こういうことも言える：いかにも揑ねたような理窟，いかにもひねったような言葉は，それはまだ本当の理窟ではない，本当の言葉ではない。それはまだ揑ね方の足りない理窟です。それはまだひねり方の足りない理窟です。それはまだひねり方の足りない言葉です。

ひねった上に，更にもう一ひねりひねれ！ 指先だけで

ひねり足りなければ，全身でひねれ！ はらわたの体操になる。全身でひねってもまだひねり足りなければ，こんどはモウやむを得ない，いよいよ本腰を据えて „全人" でひねれ！ 一切智を成就して涅槃に入らん。喝。

(1956 年 12 月)

羽目に立て！

いやに気むずかなことを言うようだが，私が語学者として最も嫌いな術語に Kontext（文脈，文の脈絡，前後関係）というのがある。なぜ嫌いかというと，科学的だからです。いやに客観的な，冷静な顔をしているからです。語学というものは憚りながら科学よりは少し上級に位するもので，こんな科学的な術語を用いるとイヤに……科学的になるから，それで嫌いなんです。私は „局面"，„羽目" 或いは „行きがかり" という言葉を用いたい。

„前後関係" というのは，たとえば怪事件の真相を探ろうとする頭の好い刑事の眼に映じた „あとさきの事情" です。刑事なんて，どうせ大した頭でもないから，そんな頭で考えた前後関係なんか，高が知れてます。あんよはお上手，手の鳴る方へ，といって犯人がすぐうしろの所で手をたたいている。むつかしい個所に赤線を引っぱって，その個所よりもっとむつかしい顔をして原文の

前後関係を勘考している語学者もだいたいそんなもんだ。

それよりも，どうしていっそ „行きがかり“ に捲きこまれてみないか？ 犯人同様の „羽目“ に飛びこんでみないか？ 犯人同様の „局面“ に全人格を挙げてぶつかって見ないか？行きがかり，羽目，局面というやつは，もはや前後関係とか文脈とかいったようなのんきなものではありません。前後関係は „ひとごと“ です。„羽目“ はわがことです。„ひとごと“ となると，どんな偉い人でも頭が一人前に働かなくなる。„わがこと“ ともなればどんな馬鹿野郎でも相当頭が働く。人間というものは，はなはだ勝手にできているのです。横着なんです，つまり。

前後関係と言えば好いところを，わざわざ羽目とか行きがかりとかいう底意地のわるい文法用語を用いるのは，一つはお年のせいで，口ごごとがうるさくなったせいもあるでしょうが，一つは以上のようなわけもあるのです。これで序論は終り。次が本論。

× × × × ×

語学を教えてくれる最高の権威は，教壇に立った先生でもなければ，蜜柑箱みたいな大きな辞書でもない——羽目です！ どこにも書いてない，しかもどんな場合にあてはめても絶対に間違いのない，しかもドイツ語にも英語にも全部共通な，しかも馬鹿にも阿呆にも間抜けにもわかる文法は——行きがかりです！ 不肖わたくし自身の事を申しあげるならば，人にむかっては „原書を引きながら辞書を読め“ とまで辞書を讃美しおきながら，そう

申す私自身，実のところ甚だ不勉強で，(私の書斎にロクな辞書がないことは私の所に出入する人たちがよく知っていると思いますが) 辞書というやつはあまり引かない。こんなことを言うと自慢みたいになるかな？ ……しかしです！ しかし，たった一冊だけ，手垢で真黒になったボロボロの，所々血痕さえ見える小さな辞書がある。それは神様が御発行になった „局面“ という辞書です。(定価 5 円，各書店に無し。)

辞書をあまり引かない，などというと，いかにも天才風を吹かすようで，不愉快にお思いになる人も多いということは重々存じていますが，自分で自分の特長と欠点とを何人よりも以上に意識しているわたしとしては，自慢になるか懺悔になるかは第二の問題として，固有癖を本当に鋭く言い表わすためには，此の一面をとらえてぶちまけるのがもっとも話が早くわかると思うきりの話です。ただし，此の悪癖は，ほんとうに偉い語学者になろうとする人たちにはすすめられません。うっかり真似をすると，私のような，単に語学を路傍でたたき売りするのだけが上手な，品のわるい語学者になってしまうおそれがあるからです。

辞書をあまり引かないから，従って辞書についての知識が稀薄で，興味もほとんどない。この妙な個癖をよく知らない本屋さんが，辞書を出す相談を持ちこんで来ると，わたしは，言下に „興味がない“ といって断わるが，興味がないというよりはむしろ，自分の最も不得手な方面だから，頭っから反感を覚えるのです。

だから，わたしが辞書に関して吐く迷論は，賛否両論

とも，まあ，大したものじゃないと思って頂いても結構です。その代り，辞書よりも一段上の権威である „局面“ „羽目“ „行きがかり“ についてわたしが述べることは，これは，語学をやる上の絶対の真理だと思っていただきたい。

辞書を引くときには，指先にツバをつければよい。わけのないことです。局面にぶつかり，羽目に立ち，行きがかりに飛びこむには，眉にツバをつける必要があります。顔を洗う必要があります。時として冷水三斗をあびる必要があります。局面は人間のたたきなおしです。人生の出直しです。あなた自身の再検討です。時には魂の入れかえです。大抵の場合はドタマのすげかえだ。

辞書は微妙な，上品な，体裁の好い，利いた風なことを言う。そして，ときどき間違っている。——局面は，親切だけれども少し言葉つきの乱暴な交通巡査みたいなところがあって，マゴマゴして変なところを歩こうとすると „コラッ!“ と言って，一喝する。相手が立派な紳士だろうがお姫さんだろうがおかまいなく，人権もへッたくれもあったものじゃない，なんなら飛んで行って突きとばしても人の命を救う……

もっとも，こんな巡査に呶鳴られてばかりいると，こっちまでそんな巡査みたいな口調になってしまう……わたしがその好い例です。イヤ，悪い例か。 (1957 年 1 月)

自己と對決せよ!

むかし，田舎に疎開していた頃，ある爺さんが私に „西洋人も糞をたれたときには自分でケツをふくのかね?“ といって真面目な顔をしてきくので，„そうだ，自分でふくのだ“ といって教えてやったことがあります。ふくところを見たことはないけれども。

この爺さんのはマアあんまり極端すぎるけれども，ほとんどこれに近いアイマイな考え方は，外国語を研究したり翻訳したりする人の意識の中に多少見受けられるように思います。西洋人だって我々と全然同じ人間なのだから，糞をたれたときには自分で手に紙を持ってお尻をふくのと同じように，何か考えたり言ったりするときには，我々でもやはり考えそうなことを考え，我々でもやはり言いそうなことを言うにきまっている。それを，西洋人のことだから万事勝手がちがっているに相違ないという漠然たる前提の下に，では，糞をたれても，何か便利な施設があって，あるいは，お尻のあたりが少しちがった具合に出来ていて，手で拭かなくてもいいようになっているかも知れない……爺さん，おそらく，こういうふうに考えたものに相違ない。„では，どういう施設があると思うのか? お尻のあたりがどういう具合にちがっていると思うのか?“ と言って反問したとすれば，爺さんは，おそらく，少しまごついて，„いや……其処まで考えてみ

たわけではないけれど……" と言ったにちがいありません。„其処まで考えてみたら，人に訊かなくったってわかる話じゃないか!" ときめつけたら，„いや，ごもっとも!" と言って頭を掻いたことでしょう。

べつに，此の爺さんばかり責めるわけではないが，此の爺さんは，つまり，自分が考えたことがらに関して，自分で責任を持ってみなかったのです。自分で本当に責任を持って考えてみれば，おのずと崩れてくる考え方というものが世間にはたくさんあって，それらのうちの，爆笑価値 100 パーセントに近いものは採り上げられて笑話になったり落語の材料になったりするが，爆笑価値 90 パーセント以下のものになるというと，笑おうと思っても笑えず，怒ろうと思っても怒れず，同情しようと思っても同情できないから，笑いと怒りと同情とが大脳の中途半端なところで内訌をおこして，顔面筋肉が妙な具合によじれて，はなはだ気持がわるい。平気なのは，そういう事をいったり書いたりする御当人だけです。

外国人が外国語で書いたものを翻訳したり解釈したりする人たちは，単に語学の知識をもって原文と対決すると思ったら大きな間違いで，実は „自分自身の最後の良心" と対決するわけです。奇抜な言い方だが，原文なんか問題じゃない，語学の学力なんか問題じゃない。„おれは，おれ自身の腹の底から響いてくる幽かな声に対して何処まで忠実か" が問題なのです。

いわゆる誤訳，曲訳というやつの中には，当人が本当にそういうものと思いこんでいる間違った誤訳もないではありません。称して „勘ちがい" という。けれども，こ

んなのは百に一つ，千に一つです。100 のうち 99 までは，ただいまの田舎の爺さんの話じゃないが，„実は其処まで考えたわけではなかった" 式の誤訳です。„実は其処まで考えたわけではなかった" というのも実は少し嘘なので，少し詳しく本人の気持に立ち入ってみれば，精神異常者ででもない限り，ほんとうは，„多少は其処まで考えたわけだった" のですが，„其処" の一歩手前のところで邪魔くさくなって引き返して来たのです。つまり，自分自身の考えに対して責任を持つだけの勇気に於いて欠くところがあったのです。つまり，誤訳というやつの 99 パーセントまでは，誤訳する瞬間に，誤訳だということが薄々わかっている誤訳なのです。ちょうど，デパートで万引する立派な奥さんが，万引する瞬間に，これは万引だということが薄々わかっているのと同程度にです!

此の „薄々" というやつ，こいつがまことに始末にわるい! „ハッキリ" わかっているなら犯罪です。全然前後不覚なら精神病です。„薄々" は，つまり，犯罪と精神病との中間なのです。結論：誤訳の 99 パーセントは犯罪と精神病との中間現象である……

× × × × ×

ずいぶんひどい事を言ってしまったが，これはべつに語学をやる人を世間の笑い物にしようなどというくだらない見地から言ったのではありません。語学の人間教育的使命，人文語学の旗幟を高らかに掲げんがための序曲を奏したにすぎません。語学は何学よりもよく „吾人を吾人自身の最後の良心と対決せしめる" という，おそろ

しい事実を指摘したにすぎません。此のおそろしい事実の前にちぢみあがるだけの感受性を持った人たち……その人たちは，すでにそれだけの事実によって，此の地上の少数の選良に伍したことになるでしょう。此のおそろしい事実の前にビクともせず，だいいちそんな事実があることを知るでもなく知らぬでもなく，どっちかというとマア知らないことにしておく方が都合がよい人たち……その人たちは，つまり犯罪者と精神病者との中間現象，換言すれば „ぼんくら“ です。„ぼんくら“ というのは，悪人にもあらず狂者にもあらず，悪に徹するだけの勇気なきが故に幸にして善，狂に走るだけの力なきが故に幸にして正常なる人間——即ち，勇なく力なき人間のことです。（1957 年 2 月）

言葉は腹の虫に直結す

言葉は思想の拠点です。言葉は思想のスイッチです。

哲学者だなんて威張っても，若干の自製の „用語“ を頼りにして自分の思想をやっと覚えていられるのが実状です。哲学の先生などに至っては，誰は何という言葉を用いた，かれは何という言葉を用いた，と，言葉を二三十知っていれば一年間の講義ができる。どんな雄大な思想でも，それが二三の摑みでのある，ハンドルみたいな „標語“ に結晶しなければ，他人にもわからず，また——

ここが面白いところですが——御本人自身にもわからなくなる。

言葉は思想の部屋を開く鍵です。言葉使いの下手な人がクダクダと三時間しゃべったって思想の部屋は開くものじゃない。それはちょうど，合わない鍵をさしこんで三時間ガチャガチャやったって扉が開かないのと同じことです。そんなのは，はやくあきらめて，しずかにして頂く方が，はたが助かります。此の部屋には此の鍵，此の思想には此の言葉——ピタリとしたのを持って来れば思想の部屋はパッと開きます。また，思想というものは，それがたくましい思想であればあるほど，これを観る者の腹の虫が向くべき方へ向いていさえすれば，パッと一眼に見通せるはずのものなのです。ところが，腹の虫というやつは，畜生のあさましさと申しますか，どんな腹の虫でも，頭と腹とは元来無関係にできていると見えて，ずいぶんトンチンカンな方を向いていることが多い。こいつに，ヤッ！ と気合を掛けて，向く方を向かせるのが „言葉“ です。もっとも言葉の中には，頭にはピンと来るが，腹にはちっともこたえない言葉というやつもある。けれども，そんなのは二流，三流の言葉です。一流の言葉は，頭よりはまず腹にグッと来るはずです。そういう言葉は，頭で考えたってわからない。頭で考えるのがそもそも間違っている。

ついでにチョット毒舌を弄することを許していただくと，世の中に頭の好い人が多いのにはおどろきます。しかし，それにもましておどろくのは，腹の虫がトンチンカンな方を向いている人が案外多いことです。 „右向け

——右ッ!" と号令をかけると，左を向きやがる！ 手がつけられない！ そこで，わたしは，右を向かせようと思うときには „左向け——左!" と言うことにした。称して逆説という。だから，わたしが左向けと云ったら，左を向かないでください。みなさんの腹の虫におねがいしておきます。

腹の虫というやつは，とにかく „虫" なんだから，どうにも始末にいけない。虫というやつは，御存じの通り，動物の中でも最も下等なやつですからね。 結論として，お互い人間というやつは，頭はどうあるにせよ，根性の奥底は（此処をハッキリと考えましょう!）下等動物だということになってくる。

言葉は，思想の拠点，思想のスイッチたるのみではない，直ちにもって腹の虫と直結しているという，実にきわどい，気味のわるい，物すごいものなのです。この点を深く考えるのでないと語学の使命は真に理解されたとは言えません。

たとえば，喧嘩というやつは大抵言葉の行きちがいから起る。事実の行きちがいは事実を是正すれば元通りになるが，言葉の行きちがいは事実を訂正しても元通りにならない。人間は事実よりも言葉の方を重要視する動物らしい。 „口先でうまいことを言うより，金の一万円も持ってこい" と，口先では言うが，そういう人にかぎって，„サア一万円呉れてやろう!" と言って畳の上へほうり出されたら，„なにッ？ 人に物を呉れてやるのに，呉れてやるとは何事だッ!" と言って正面切るにきまっている。それから先はモウ，„呉れてやる" という動詞の人称

変化や三要形，分詞からまた分詞が派生して厄介千万なことになり，拙俗法から直接法に飛んで横っ面を張りとばすぐらいが落ちです。——

それとは逆に，道元禅師の言に „愛語よく廻天の力あり" というのがある。ほんとうに相手の腹の虫に触れるような „やさしいことば" は，宇宙を四十五度廻転させるだけの力を持っているというのです。たとえ心になくてもいい，たとえ嘘でもいい，見えすいたお世辞でもいい，人にむかって，ほんとうに腹の虫がのびのびするようなやさしいことばを掛けてごらんなさい（たとえばあなたの細君に)！ あなたの細君は思わずホロリとするでしょう。あるいはワッと泣いてあなたにしがみつくかも知れない。 すると，その次にヘンなことが起って来る。たとえどんな人間でも，人間にワッと泣いてしがみつかれたら，五秒後にはモウ人間ではなくなる。一足飛びに神になってしまうのです。(わかるかな??)

言葉は思想の拠点，思想のスイッチであるばかりではない，或る種のおそろしい電線によって一直線に „腹の虫" に直結しているのです。スイッチのボタンを一つ押せば火薬が爆発するように，押すべき言葉を一つ押せば人間は一瞬にして野獣になる，押すべき言葉を一つ押せば人間は一瞬にして神になる！ 人間を野獣にするのも一語であり，人間を神にするのも一語です。しかもそれは何の不思議もないことで，つまり，言葉というものは，頭とは，わたしもこれで長年ずいぶん研究しているが，どういうふうに結びついているのか，いまだによく判明しない……ことほど左様に厄介に結びついている。ところ

が，腹の虫とは——べつに文法や言語哲学でゴタゴタ研究するまでもなく——„直結“ しているのです。これほど簡単な事実はない。わかりますか?

言語に関する一切の学説は，此処から出立するのでないと，ろくな学説にはなりますまい。(1957 年 3 月)

達意眼目

およそ小説を読むにしても，新聞を読むにしても，論文を読むにしても，手紙を読むにしても——およそ，どんなくだらぬ事が書いてあるのを判読するにしても，はたまた，どんな幽遠な，玄妙な哲理が述べてあるのを解読するにしても，——火星人が書いた文章，或いは銀河系以外の何等かの未知の世界の未知の生物が書いた文章ならばいざ知らず，いやしくも地球上の人間がこの数千年以内に書いた文章である限りは，たとえそれが数千年以前のエジプト語であれ，ギリシャ語であれ，梵語であれ，たとえそれが現代のドイツ語，英語，フランス語，その他何語であれ，いやしくも精神に異状のない人間によって書かれた文章には，すべて „達意眼目“ というものがあります。そして——これが驚くべき事実なのですが——達意眼目は，大抵の場合，人が普通思っているよりは，ずっとずっと簡単なものなのです。

語学で苦労しはじめてから四十年，その間，ありとあ

らゆる種類の文献で頭を悩まし，また他の多くの人が頭を悩ますのを見，教室では学生がヘンテコな訳をつけるのを聞かされ，書斎では靴の裏から足の裏を掻くようなホンヤク書を読まされて六十年の今日に達した私として，もし誰かが私にむかって，„語学者として後輩に何か言い遺す好いことばはないか“ と言って問うとしたら，私は言下に答えるでしょう：„達意眼目は簡単な筈だ!“

言語というものの „なま“ のままの姿に対して不感症のような頭を持った人の中には „そんなことを言ったって，複雑微妙なことを言ってある場合が実際にありますぜ!“ というかも知れません。私は，それに対しても，否，特にそれに対して斯く答えたいと思います：„それはおそらく達意眼目があんまり簡単すぎるために，表現によるほどき方が複雑微妙になってしまった場合のことではありませんか? それに第一，何かハッキリした単純な達意眼目の存在を想定しなければ，複雑とか微妙とかいう感じは起らないはずですよ。あなたが複雑とか微妙とかいう言葉をお用いになるのは，それはつまり „頭っから“ 私の主張を容れてしまったことになりはしませんか?“

事実，複雑微妙なことの言ってある文章があったら，その複雑，その微妙を，最後の暗い隅へまで追いつめて，それを書いた当人自身が恐縮して顔まけするほど複雑且つ微妙に解釈してごらんなさい。そうしたらその複雑が如何に単純な複雑であり，その微妙が如何に簡単な微妙であるかが，大抵の場合まるで一口噺のように暴露するとしたものです。これを称して達意眼目，或いは „けっきょく言わんとするところ“ という! 複雑微妙は表現で

あって，達意眼目は一点に集中した簡単なものである筈です。それは何故か？ 理由は簡単です。すなわち „人間のことば“ だからです。カンガルーのことばではないからです。

以下に，典型的な一例を挙げて見ましょう。多情多恨の女王が犯した罪のことが問題になっている所ですが，乳母が女王をさとし慰める言葉に：

Ich wiederhol' es, es gibt böse Geister,
Die in des Menschen unverwahrter Brust
Sich augenblicklich ihren Wohnplatz nehmen,
Die schnell in uns das Schreckliche begehen
Und zu der Höll' entfliehend das Entsetzen
In dem befleckten Busen hinterlassen.
Seit dieser Tat, die Euer Leben schwärzt,
Habt Ihr nichts Lasterhaftes mehr begangen.
(*Schiller: Maria Stuart 1. 4.*)

さきほども申した事ですが，世にはおそろしい悪霊がございまして，ふとした油断の隙に乗じて人の胸に忍び入り，ほんのしばらく腰をおろしたかと思うと，矢庭に，何か飛んでもない取り返しのつかない罪を犯させ，犯させると同時にサット元きた地獄へ引きあげてゆく，ギョッと気がついて己れを顧みた時には時すでにおそく，心は罪に汚れている，といったようなことがございます。あの御所業は，あれはたしかに陛下の御生涯の汚点ではございましたが，あれ以来は別に何一つ悪いことをあそばしたわけではございませぬ。

太文字で印刷した六行の達意眼目は，日本語で言えば要するに „魔がさした“ の一語に尽きます。ドイツ語には残念ながらこの „魔がさす“ という通念がないために，複雑微妙な，蜿々長蛇のごとき六行の詩文が展開されてしまったというわけです。

„けっきょく何のことを言おうとしているのか？“ これが言語と思想との間のギリギリ一杯最後の関係です。„一つの箇所で二つのことを言おうとするわけはない“ これが言語の最後の原理です。(言語学者にこれがわかるかな？ ちょっと不安……)

このバカみたいな原理がムシ■ウにおもしろくなったとき，その時，紫雲たちまち左右に開け，パッと五光がさし，天楽りゅうろうと鳴りひびき，エンゼルたちのストリップダンスとともに，„人間学修了証書“ がヒラヒラとあなたの足もとに舞い下るでしょう。おめでとう！

(言語と思想・終り　1957 年 4 月)

諷刺詩

狼と犬

關口存男

食糧難におちいって
骨と皮とになりはてた
お化のやうな狼が，
眼ばかりギ■ロギ■ロさせながら
路を歩いてをりますと，
向ふの方から，これはまた
でっぷり太った，たくましい
色つやの好い番犬が
のそのそやってまゐります。
これは御馳走かたじけない，
こいつをまるごと噛ったら
さぞうまからうと思ったが，
相手はなにしろブルドッグ
こっちは骨皮筋右衛門，
さうやすやすと當方の
おのぞみ通り御馳走に
なってはくれまい，それどころか，
ひとつ間違やあべこべに
こっちが相手にたべられる……
こりやあきらめた，と狼は

辭を低うして話しかけ
世間話を皮切りに，
いろんなことを言ったのち，
相手の様子をつくづく見て，
てかてか光った毛のつやを
うらやましげに褒めました。
するとブル氏の申すには，
ほめられるほど毛のつやが
好いかどうかは別として
なにしろとにかく腹いっぱい
食はなきゃどうにもならないさ。
かう申してはすまないが，
君はあんまり腹いっぱい
食ってるやうには見えないね。
そりゃまあ實際無理もない，
山にゐたんぢゃ何ひとつ
食へやうわけがないからね。
ときたまなにかうまさうな
獲物がみつかったとしても，
まさかお皿にのっかって，
ひとついかが，といふ風に
待ってるわけぢゃあないだらう？
その都度實力行使だらう？
ひとつ間違や，あべこべに
こっちがやられるわけだらう？

それぢゃあまったく頼りない，
だいいち當てになりゃしない。
食へない方が當然で，
食へるとしたらそりゃなにか
まぐれあたりだ，間違ひだ。
らくに食はうと思ふなら，
わしといっしょに里へ來な。
里にゃ物資(よつし)がうんとある。
あるところにはあるんだよ。
　言はれて狼考へた。
『聞けばなるほどもっともな，
ところで，ただぢゃあ食へまいが，
いったいなにをするんだね?』
『なァに，なにをするといふ
ほどの仕事はなにもない。
門の近所にがんばって，
乞食(ごじき)が來たら追っぱらふ，
あやしい者が通ったら
大きな聲でほえたてる。
それに反して主人には
よろしく御機嫌(ごきげん)とり結び，
家の者には愛想(あいそ)よく
尻っぽの一つも振っておく，
要するにただそれだけだ。
さうしておけばその代り

それだけのことはあるわけで，
三度の食事は言はずもがな，
おやつ，お三時，小夜食と，
人間どもの食ふたびに
そのおあまりがいただける。
にはとりの骨，はとの骨，
骨はたいていおれたちが
いただくことになってゐる。
いったい人間てえやつは
利口なやうでまぬけだね。
自分は肉しか食はないで，
いちばん食ひでのある骨を
みなおれたちにくれるんだ。』
　骨と聞いては矢も楯(たて)も
たまらなくなる狼君，
ありがた涙と鼻みづと
よだれをゴッチャに啜りつつ，
この親切なワン公に
案内されていそいそと
人里さしていそぐうち，
なにげなくフト前をゆく
犬のうなじを見てゐると，
毛がすりむけてゐますので，
どうかしたかと尋ねると，
『イヤ，こりゃ別に何でもない，

首輪の跡(あと)だ』との返辭(へんじ)。
『首輪といふと?』――『頸(くび)の輪さ,
頸のまわりにはめる輪さ。』
『そりゃわかったが然しまた
いったいどうして頸に輪を
はめたりなんかするのかね?』
『輪でもはめなきゃ,頸をすぐ
つながれたんぢゃあ堪るまい。』
『つなぐ? こいつは初耳だ。
するとなにかい,輪をはめて
鎖(くさり)かなにかでつなぐのかい?』
『うん,まあさういうわけなんだ。』
つなぐと聞いて,狼は
ハッと思はず立ちどまり,
相手の顏をヂッと見て,
顏が長ァくなりました。
『さあ,さうなるとコリャちよっと
考へなくちゃあなるまいな。
いくら食へても,さうなると,
其處(そこ)には何か割り切れない
或種の物がありさうだ。
人權蹂躙(じんけんじゅうりん)……ぢゃなかった
謂(い)はば狼權蹂躙(ろうけんじゅうりん)だ。
男をつなぐといふことは,
女でいへば醜業(しゅうぎょう)だ。

するとなにかい,君たちは
御機嫌とりして,つながれて,
たらふく食って,おじぎして,
さうして尻っぽを振るのかね?
さうか。おかげで目が覺めた!
氣持がハッキリして來たよ。
せっかく此處まで來たけれど,
わたしは山へかへります!
山へかへって痩(や)せこけて,
目をぎょろつかせて,うろついて,
木の根をかぢり,露を吸(つゆす)ひ,
齒をくひしばって我慢(がまん)する!
我慢するともその方が
つながれて尾を振るよりは
どれだけましだかわからない。
さうしていよいよどうしても
食へなくなった曉(あかつき)には,
行きあたりばったり其の邊の
路(みち)ばたにでもくたばって
見事に腐(くさ)ってみせるから,
「男」の死骸(しがい)といふやつを
話のたねに見に來たまへ!
いろいろお世話になりました,
では御機嫌よう,ごめんなさい。』(終)